

NO. 89
AUTUMN
1987

英語展望

ELEC BULLETIN

特集 つづり字と発音

文字とつづり字と発音 小川芳男／森住 衛

英語発音の多様性 島岡 丘

英語発音の表記法 竹林 滋

英語のつづり字と発音 今井邦彦

フォニックスの理念 若林俊輔

Pronunciation Notation without Respelling 上西俊雄

アメリカの人種と民族 國弘正雄

河村重治郎と『クラウン英和』 小島義郎

特集 つづり字と発音

対談・文字とつづり字と発音 — その背景にあるもの	2
小川芳男／森住 衛	
英語発音の多様性 島岡 丘	8
英語発音の表記法 竹林 滋	14
英語のつづり字と発音 今井邦彦	21
フォニックスの理念 — この当然のことへのアプローチ	27
若林俊輔	
Pronunciation Notation Without Respelling	32
KAMINISHI Toshio	

連載

アメリカの人種と民族(18) 國弘正雄	41
英語辞書物語(11) 河村重治郎と『クラウン英和』 小島義郎	48

英語教育の情報と資料(28)

学習者の個人差について 松永 隆	54
------------------------	----

Teaching Eye

必修語のアクセントの分析 望月国男	64
-------------------------	----

英語教師のための読書案内・7

心理言語学 伊藤克敏	66
------------------	----

新刊書評 『最新の音声学・音韻論』(牧野 勤)	68
-------------------------------	----

『言語習得と英語教育』(小池生夫)	69
-------------------------	----

新刊紹介 『国際英語』(比嘉正範)	70
-------------------------	----

『言語と国家』(橋内 武)	70
---------------------	----

『動詞+名詞 英語活用表現辞典』(中田 実)	71
------------------------------	----

『旺文社 和英中辞典』(名和雄次郎)	71
--------------------------	----

『英語ヒアリング集中コース(上級用)』(古川法子)	63
---------------------------------	----

展望通信	72
------------	----

文字とつづり字と発音

—その背景にあるもの—

小川芳男 (神田外語大学学長)
森住 衛 (大妻大学助教授)

——英語の発音は英語教育における最も重要なテーマの一つといえますが、本日は特に文字、つづりの関連に焦点を合わせ、入門期の指導上の問題点から、発音記号とフォニックスの考え方を含めて様々な角度からお話しいただければと考えています。最初に、日本の英語教育で広く用いられている発音記号が導入された経緯など小川先生にお伺いいたします。

発音記号の紹介と普及

小川 日本ではじめて本格的に発音記号を紹介したものといえば、マッケロー (R. B. Mc Kerrow) と片山寛の共著になる『英語音声学』ということになりますね。明治 35 年に東京の上田書店から刊行されました。マッケローという人は東京外語の最初の外人教授で、イギリスに帰ってから書誌学の研究などで著書を出し、有名になった人です。片山寛先生は外語の第一回の卒業生ですが、マッケローの愛弟子で随分親しく指導を受けられ、非常な天才だった人です。

この本は一部の人に熱心に読まれたのですが、しかし発音記号が英語教育に導入されるのはもつと後になります。市河三喜先生が、大正 8 年に唱導して広がりはじめ、やはり大正 8 年に岩崎民平先生の『英語の発音と綴字』が研究社から出版されました。これは大変な名著で、文検（文部省教員検定試験）を受ける人などは必ず読む殆んど指定参考書でしたね。それから岩崎先生の授業は定評がありましてね。当時四中（東京府立第四中学校）で教えていましたが、各地から先生の授業を

見に来る人が多く、「四中詣り」という言葉があつたくらいですね。そういうこともあって岩崎先生の発音と綴字の本は熱心に読まれ、広い影響を与えました。

そういうことで、発音記号の導入ということでは、マッケロー・片山、市川三喜、岩崎民平が最も重要な人たちということになりますね。

それから大正 11 年にパーマー (Harold E. Palmer) が来日し、ご承知のように、大変な影響を与えましたね。パーマーの新しい教授法は福島中学の磯尾哲夫先生、湘南中学の松川昇太郎先生などが学生を引率してきて模範授業を行なって話題になった。その前は高等師範の附属中学校の村岡(博)先生も模範授業をやられた。そのことと発音記号と関係はなくはないんですね。発音記号でやったんだから、マッケロー・片山、岩崎先生の本は理論書で、先生方が熱心に読んで勉強したわけです。それに対して、磯尾哲夫先生などの福島プラン、あるいは青木常雄、寺西武夫などの高等師範附属の授業は実践的な影響を与えたということになりますね。

発音記号の定着と反省

小川 昭和 11 年に日本英文学会が宮城女子専門学校で開かれました。日本英文学会というのはもともと東大の英文学科の同窓会みたいなもので、学会はずっと東京大学でやってましたが、はじめて地方で開かれたのがこの昭和 11 年の学会です。その時の会長は土居光知先生でしたがね。その英文学会で市河三喜先生は発音記号に関する話をなされたわけです。日本の英語教育に発音記号を

導入したのは自分に責任がある。発音記号は良いものと信じて導入に力を尽くし、そして普及した。しかし、当時の情況を見ると「赤ん坊に名刀を持たせているようで危なくしてしまうがない」とその特別講演でおっしゃられた。私自身もその学会に出席して講演をしたので直接市河先生のお話を聞いたわけですが、同感しましたね。つまり発音記号は正しい発音をするための手段なんですね。しかし発音記号を正しく理解するというのは易しいことではないですね。日本の英語の先生で発音記号を正しく理解して、そしてそれにそって正しい発音ができる人というのは非常に少ないと思っています。理論は知っているけど実際に正しい発言はできない、あるいは比較的正し発音を実際にできるけど発音記号の理論は知らない。それが実状だと思いますね。発音記号が導入された頃のことですが、それまでは“pocket”は「ポケット」のように発音すると思ってたら、実は山に入って枯木を折るように「ポキット」と発音するのが正しいんだ。そう発音するように先生方が指導したんです。発音記号は [pɔkit] となっていましたからね。それも [i] に強勢がないんだから弱くすればまだいいんでしょうけどね。そんなことがいろいろありましたね。まさしく「赤ん坊に名刀を持たせている」ようなものでしたね。

森住 日本の英語教育では、発音記号は発音指導に不可欠絶対なものという、いわば神話が定着していますが、これがいつ頃、どういう形ではじまったかがよくわかりました。実践的な面としてはパーマーの教授法で、入門期にはつづりを教えないで発音記号だけを用いることがありましたが、このようなことも発音記号が広まった理由の一つでしょうね。

小川 そうですね。発音記号が金科玉条というものになったのは大正から昭和にかけてでしょうね。もちろん当時の英語教育というのは旧制中学が中心ということですからね。そして発音記号、ジョーンズ (Daniel Jones) の方式ですが、それが用いられ、定着しましたね。ジョーンズが *English Phonetics* という最初の主著の附属的な読み

物として *Phonetic Readings* というのを書いています。つづり字を使わないで発音記号だけで読まされました。それから戦後ゲルハルト (Robert H. Gerhard) が三省堂の「コンサイス」(『最新コンサイス英和辞典』、1951年) の発音表記を工夫して変えたこともあります、とたんに売れ行きが下がってしまい、あわててジョーンズ式に戻して売れ行きを回復したことがあったくらい、ジョーンズ式の発音記号一辺倒になったわけです。

カタカナ利用の注意点

森住 発音記号はたしかに一部の生徒には役に立つと思うんですが、大多数の生徒にとっては負担になっていると思うんですね。schwa [ə], inverted 'v' [ʌ] や inverted 'c' [ɔ] など、あるいは th の [θ] や [ð] など、アルファベットの他にも覚えなければいけない。これが一通りであればまだよいのですが、IPA、ジョーンズ、ケニアン・ノットさらには POD 方式など、それぞれ違っています。辞書にしても『コンサイス』『岩波新英和』『研究社大英和』『小学館ランダムハウス』など、まちまちです。これでは生徒はとても追いついていけません。そこで、小学生や中学生だけでなく、高校生あたりでもカナ発音でもいいのではないかという意見も出てきています。具体的な例を言いますと、この8月に検定用の高校英語Iの教科書が44種類出そろったそうですが、その中に発音記号を使わずカタカナで発音を表記したものが出来ました。そのねらいは、実は私自身その教科書に関係しているんですが、いわゆる新出語の発音をカナで示し、教師が教室で実際の発音を示すことでいいんじゃないかな、発音記号というのは大多数の生徒は覚えられないし、また発音記号を示すことと実際に正しい発音を習得させることは別のことではないか、そういう考え方からなんんですけども。

小川 それは大賛成ですね。私は昔からそういうってますしね。前に言ったように発音記号は手段なんで、結局は先生が正しい発音を示さなければ意味ないですよ。ただカタカナというのはどうし



小川芳男先生

たって日本語なので、発音が日本語的になるんじゃないかという不信感を持たれるんですよ。発音記号なら何か英語らしい気がする。そこで先生が “I have a book.” などと言うと生徒の方は「アイ ヘブ ア ブック」などとカタカナで書いたりする。そんな場合 “have” は「ヘブ」よりは「ハヴ」だぞ、そんな指針でいいんですよ。

森住 昔の横浜あたりのマドロス英語、車屋英語といいますか、その人たちはつづり字を知らないで、聞いた音をなるべく忠実にカタカナで再現し、強弱に注意して発音して結構用を足していたようですね。

小川 そうなんですよ、ギムソン(A. C. Gimson)も英語の弱音は全部あいまい母音でいいんだといっているし、その通りだと思う。

森住 例の「メリケン」(American), 「ミシン」(machine), 「サミッチ」(sandwich), 「バイスケ」(basket), 「プリン」(pudding)あるいは「タン」(tongue)なども、弱音ないし強勢がない音をそれなりに発音した——いや「しない」と言った方がよいかもしれませんが——からでしょうね。それから r の発音なども red は「ウレッド」, ring は「ウリング」というように前に軽く「ウ」か「オ」をつけたように聞えますね。

小川 昔は三高あたりの先生で r で始まる音は全部ウで書かしたそうです。writing を「ウライティング」とかね。そうすると英語に近くなるんで

すよ。それから、ペリー、黒船で来たあの Perry ですが、それなども昔は「ペルリ」と書いた。その頃、ある人が「ペルリ」というのはオランダ語の影響で、英語だから「ペリー」が良いとある一般誌に書いていた。そんなことはないと思って岩崎先生におたずねしたら、君の言うとおり「ペルリ」の方が良いと言われた。「ペリー」とのばすより「ペルリ」と言った方が r の発音に近いんですね。

森住 dark 'l' の発音も「アブル」(apple), 「リトル」(little)と書くよりは「アポー」「リトー」などの方が原音に近いと言えます。そういえば、ある研究授業で生徒が先生の言うのを一所懸命にうつしているのを見たことがあるのですが、difficult を「デフカウ」と書いていました。そう聞こえるんですね。

小川 そうですね。それから学生に言う必要はないけれど、日本語と英語の音韻組織が違うんだということは基本的に押さえておくべきですね。生徒は、これは日本語の何にあたるんですかと質問したがる、“hat” は「ハット」ですか「ホット」ですか「ヘット」ですか、どれか先生決めて下さいよと。ただ、特に初步の段階では日本語で代用できるものは認めたらいいと思いますがね。

発音表記の工夫

森住 たとえば “cat” の [æ] の音でも、日本語で近いものがありますね。こわいものを見て「ヒヤー」とか「キャー」と言うときの「ア」ですね。アメリカ音の “pot” や “hot” の場合の口の開け方は驚いたときに「アッ」と叫ぶときに似ています。あいまい母音にしても、寿司屋などが「いっちょあがり」という時の「あ」ははっきり「ア」と言わないんで、英語の [ə] にかなり近いんじゃないでしょうかね。

小川 そうですよ。それから日本語では「す」というのは “su” と「ウ」が入るというんだが、そうでない場合もありますね。この「ありますね」の「す」がいい例ですよ。まあ「こうです」、「そうです」なんかも「う」の音は入っていないんで、

“s”と同じといつていいんじゃないですかね。それから今の“cat”的場合ね、普通は「キャット」と書くんだが、それも「ケヤット」と工夫して書く人がいる。どうしても日本語で書くならそのほうがいい。口が開きますからね。英語の発音をカタカナで書くならそんなことも考えなくちゃいけない。

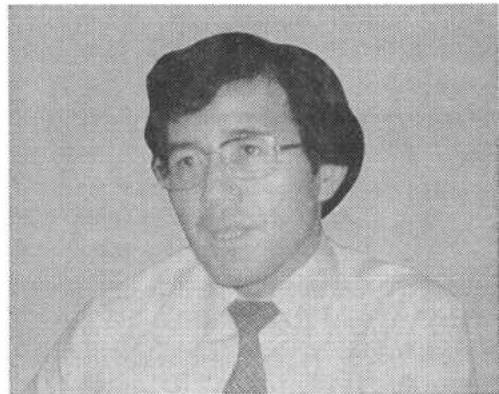
森住 なるほどそうですね。

それから生徒がむずかしいなと思うのは、日本語の場合は平仮名・片仮名が原則として一文字一音主義ですが、英語の場合は違う点ですね。例をあげれば同じ“a”でも“father”, “cake”, “cat” “water”, “about” “village”とかみんな違うんですね。逆に同じ音がですね、たとえば[u:]の音ですが、“rude”的“u”をはじめとして，“food” “fruit” “group” “through”的ように“oo”, “ui”, “ou”, “ough”あるいは“news”的“ew”などもある。これはかなりむずかしいんですよね、生徒にとって。このことは「フォニックス」の問題になるかと思いますけどね。

小川 本質的なことは Webster や POD でやっている diacritical mark (分音符号) ね、つづり字の上などに記号をつけて発音を示すやつですね、あれがいいと思うんですよ。それだとスペリングと音声があまり離れたものとならないですね。

森住 そうですね、新しい文字をおぼえる必要もないですし。

小川 発音記号についていえば、辞書と教科書の著者、編集者は協力的でないといけない。とにかく発音記号は普及しているんだし、「名刀を赤ん坊に持たせる危険性」はありますけどね、発音記号が導入されてから確かにそれ以前より発音はよくなっていますよ、全体的にね。それはあらゆる教科書が同じ記号、ジョーンズ式を用いたからですね。あらゆる字引も同じ記号を用いた。そういう結束が必要ですね、発音についても。教科書で習った記号と辞書の記号が別なものじゃ生徒が困っちゃう、かわいそうですよ。



森住 衛先生

スペリングと発音の関連性

小川 英語はスペリングと発音がかけはなれているというんだが、私はそうじゃないと思っているんです。歴史的にみれば、私などが知っている古い英語といえばチョーサーあたりですけど、ドイツ語みたいなものですね。風土的なもの、私は最近 climatic method というのを盛んに言っているんだけど、その影響で発音が少し変容してきているんじゃないかな。根本はスペリングを発音するということに変わりないと思うんです。Wednesday は Wed-nes-day (ウェド-ネス-デイ) と書くんだというが、Wed-nes-day というのをコントラクトして言えば Wednesday (ウェンズデイ) ですよ。だから理屈は通っていると思うんですよ。それから“often”なんかは最近は“t”を発音することが多いですね。アメリカでは unification という立場から‘スペリングどおり発音しろ’、あるいは‘発音のとおりにつづれ’という傾向がありますね。いずれにしてもスペリングと発音は密接に関連しているんでね、英語は無茶苦茶だということにならないと思いますよ。

日本語でもそうですよね。たとえば金田一京助の『国語音韻論』に書いてあるけど、「近江の国」というのはもともとは「淡海の国」といったんだそうですね。琵琶湖は淡海だからね、「あはうみ」

というわけですね。それが「あふみ」になったんだそうですね。そんなことが英語のスペリングにも沢山あると思うんですよ。ブラッドレー(Henry Bradley)あたりを読むとね、発音は同じだけどそれを表記するスペリングが変わったとか、スペリングは変わったけど発音は変わらない、それからスペリングが変わったから当然発音が変わった、発音が変わったのに応じてスペリングが変わった、そんなことがしばしばある。しかし本質的には発音とスペリングは結びついている、そう思うんですね。

森住 それがフォニックスなどの基本的な考え方ですね、つづりと発音の規則的な関係ですね。

小川 ただ、本来的につづりと発音が関係しているということと、英語教育でどうするか、理論的な説明をやたらにするというのも問題かもしれませんね。

森住 すくなくとも、環境の上からも、時間的にも大きな制約を受けている英語教育のような場合は、簡単な説明というのは是非必要だと思うんですよ。知識、雑学というものとしてではなくてですね。技術を身につけるための一つの大きな援護になると思うんですよ。ただ教師の言うことを良く聞きなさい、理屈抜きに覚えなさいというよりもですね。

生徒が奇しくも言ったんですが、英語というものは不規則変化ばかりですね、と。発音から始まっています。先ほどいいましたアルファベットの“a”的発音にしても幾通りもの発音がある。生徒はみんな覚えなければいけないんですが、少し説明を加えてやればかなり納得がいくし、当然おぼえやすくなると思うんですね。

小川 まあ私なんかはあまり理屈を言わないで、英語もはじめは芸の一つとして覚えるほうを強調したいんですね。踊りとか三味線じゃないけれど、お師匠さんを見習って覚える、そんな風に考えているんですね。まあ、中学生なら理屈も分かるから、なるほどと思うような説明もするなとは言わないがね。

英語教育の基本的な考え方

小川 英語教育における発音の問題としては、私は一般社会人教育ではなく学校教育を考えているのですが、基本を教えるべきだと思っています。会話の本なんかには “I'd like to go.” といったように書いてあるけど、教科書では “I would like to go.” という形を示すべきだと思っています。それを ordinary speed で言うと wouldと言わずに “I'd like to go.” となることを教えるのが良い。“It's a dog.” とか “It's a book.” と教科書で書いてあるのは、私はけしからんと思っていますよ。学校教育ではね。

森住 そういう短縮形がはやってきたのは東京オリンピックの頃からで、いわゆる会話熱というのが起って教科書もそれに慣れなくてはいけない、それで教科書も短縮形を用いるようになったそうですね。私も、まず ‘full form’ を教えるべきだと思いますね。それが基本ですからね。そうでないと、例えば「彼女は教師ではありません」というような英文は，“She is not a teacher.”, “She isn't a teacher.”, “She's not a teacher.” と 3 つ覚えなくてはいけないことになります。ここまでやるのは、現在の週 3 時間体制という時間制約から言ってもかなり無理をすることになりますし、よしんばこの制約がはずれて週 5 時間や 6 時間になったとしても、私は日本人が書いたり話したりする英語は She is not a teacher. のような ‘full form’ でよいと思いますね。つまり、外国語として英語を使う人に contracted form は必要ないということです。

このような視点で言いますと、たとえば中学一年で出てくる can の否定形ですが、can't のみならず cannot もしばらく教えないでいいんではないかとする立場も出てきます。つまり can not でよいということですが、cannot は形が do, may, will など他の助動詞と比べても irregular ですし、アクセントも変ってくる。can not は覚えやすいし、口で言ったときも、確実に意味が伝わるとい

うことなんですが……。

小川 賛成だね、大賛成だ。私の友人でアメリカから来た人がいるが、その人が日本に来て一番驚いた、意外だったことは、殆どの日本人が“What's your name?”と聞くことだというのです。その人は先生なんだが、学生が教師に向かって“What's your name?”と言うのはけしからんというんだね、もっと丁重な聞き方があるじゃないか。せめて“What is your name?”と言ってくれというんだね。

それから話題が広がるが、日本人の英語は音声に関してはあくまでも日本人の英語んですよ。真似に終始していればparrot speakerになり、それじゃだめですね。比嘉（正範）君なんかも言っているが、音声に関してはnative speakerのようになるのは不可能だと考えていいんですよ。最近は海外に出る機会も多くなっているが、その時はむしろ日本的な英語で話すとむしろ尊敬を受けてますよ。味があるんだな。

森住 同じ趣旨のことですが、逆にあまりのparrot speakerぶりに自ら反省したという人がいますね。明治大学の越智道雄が言っていることです、マニラのアジア作家協会に出席した際に自分の話す英語が外国人が模倣し得る限りのBritish Englishで、他の出席者のそれぞれフィリピン、インド、マレーシアなどお国ごとば丸出しの英語とは違っていたらしいんですね。彼は言わば自分の「いい子ちゃん英語」に疑問を抱いたということなのです。自分のIdentityをなくしかねないほどの規範追従だというわけです。

小川 太平洋戦争前にアメリカ大使をしてた齊藤博という人がいる。その前はイギリス大使だったんだがね。アメリカで非常な尊敬を受け、向こうで客死した人です。アメリカが軍艦で齊藤大使の遺骸を送ってくれたんだな。しかも開戦の直前ですよ。その齊藤大使の英語のことを福島慎太郎さんに聞いたことがある。そうしたら、「そうね、候文の英語だろうね」と言ってましたね。

森住 候文といいますと、古めかしい表現を使うわけですね。教養ある英語といいますか、それ

で尊敬されたわけですね。

小川 そうなんだ。もう一つ古い話をさせてもらいうと、福島慎太郎は外務省で幣原喜重郎の秘書官をしていたんだが、秘書官になって第一に命じられたことはWebsterの最新版を買ってこいと言われた。東京中をさがして手に入れたそうです。当時は仲々なかったんでしょううね。それから幣原喜重郎は外人記者クラブによく行っていたんだが、そこの床屋で散髪しているのをGI、アメリカの兵隊が見つけた。日本のprime ministerだとうんで何か記念になるものを書いてくれとたのまれたんだな。そうしたら幣原さんはMerchant of Veniceの一節を書いたんだそうだね。それで帰ってきて、日本の首相だから間違っていると恥ずかしいというので調べたら一字一句正しかったんだそうです。

そういうことも大事なんで、今はあんまり英語が通俗化しているんじゃないかな。実際に聞くのはそんなものだけどね。社会教育ならそれでいいんだけどね。会話学校ならぬ。学校教育は区別しなくちゃと思っているんですね。

森住 そうなんですね。学校教育でなぜ英語をやるのか、どんな英語を教えるのか、そういうた根本的な問題を常に問い合わせることが重要でしょうね。

(文責編集部)

英語発音の多様性

島岡 丘

はじめに

ごく最近までは、一般に、活字として接触している文字言語の画一性のために、英語発音の多様性が十分取り上げられなかつた傾向がある。音声学者ダニエル・ジョウンズが著書、*The Pronunciation of English* (1956⁴) の冒頭で “No two people speak exactly alike.” (2人として全く同じようには話さない) と書いているように、英語の場合でも、音声面の差は実に多くの多様性をもつてゐる。

英語を母国語とする人ならば、ふつう、音声上の差異は、相互意志伝達の支障にはあまりならず、ちょうど私たちが日本語の方言的差異をむしろ社会生活の潤いを与えるものとして楽しんでいるのと同じように、取り扱っているものと考えられる。

しかし、英語を外国語として学ぶものにとっては、多様な英語の発音は伝達を妨げる重大な障害となっている。本稿では、主に、音声上の多様性は実際にどのようにになっており、またそれらの多様性に妨げられず円滑な伝達・非伝達が行われるにはどのような言語運用力をもつべきかという問題について取り上げようと思う。

1. 音声言語の多様性

音声言語の多様性を捉えるには、方言的差異とそれ以外の個人的・社会的差異とにまず2分して考えることがよいであろう。前者は固定的、後者は状況によって変わる流動的なものと考えられる。そこで、まず方言的差異を取り上げてみよう。

2. 方言的多様性

方言には多くの種類があるが、主なものは、イ

ギリスでは、ロンドンのコクニー(Cockney), 北部のスコティッシュ(Scottish), 西部のウェルッシュ(Welsh), それにアイリッシュ(Irish)であろう。

アメリカでは、ケニヨンなど伝統的枠組によれば、東部方言(Eastern Standard), 南部方言(Southern Standard), その他一般米語(General American)が主なものであるとされる。そのほか、カナダやオーストラリアではそれなりの方言がある。

McCrumらの書いた *The Story of English* (1986) によれば、現在英語を使用している人口は、10億近くおり、母国語として使う人口よりも、外国語として使う人口のほうが多いとのことである。外国語訛りの英語も方言としてある程度理解できなければ、これから国際的な交流に支障が生じるおそれもある。

ニューヨークやロンドンの大都会などでは、生粋の英語よりはむしろ千差万別の英語を耳にする。インドの英語、ドイツの英語、ロシアの英語、フランスの英語、ケニアの英語等々、実に千差万別である。

どうしてそのような多様な英語があらわれるかと言えば、人が外国語を学ぶ際に、一つには、それぞれの母国語の音声特徴が素地になって、干渉(interference)が起こるからであり、もう一つは、与えられるモデルが異なるからであろう。

英語は、現代において、世界の共通語 *lingua franca* として重要な役割をもつてゐる以上、何らかの標準的なモデルに近い方言に向かう努力がやはり必要であり、そのためにも、方言の実体を把握することが、言語学・言語教育者に与えられ

た課題でもあろう。テープなどで録音することが便利になった今日、昔よりはるかに容易に資料が得られるようになったことは喜ばしい。

3. 方言上のずれ

方言差はさまざまだが、音素の性質から検討すると、ある特定の音素の表れ方で方言差が生じていることがわかる。方言差が最も大きいのは、二重母音であり、その次に母音であり、子音のゆれは最も少ない。ただし /r/ はその性質上母音に近く、方言差が多いと言えよう。

例えば、スコットランドの英語では、2重母音 /eɪ/, /oʊ/ の単純母音化 (monophthongization) の現象がおこる。

/eɪ/ → [e:] bay, state, make, came

/oʊ/ → [o:] home, know, show

母音では /æ/ を奥母音化したり、/a:/ を前寄り音にしたりする。

/æ/ → [a] Japan, understand, habit

/a:/ → [a:] ask, amass

一方、/r/ は巻き舌音 (trilled 'r') に変わる。very, over, relax など r 文字はすべて巻き舌音で発音される。また /r/ の前の母音は、r-帯色 (r-coloring) しない。

/ɜ:/ → [ər] certainly, world

/ɔ:/ → [o:r] before, important

巻き舌の /r/ を発音するのには、かなりのエネルギーが必要であり、例えば person の r の前の母音は /ɜ:/ よりも [e:] を用いたほうが巻き舌音を出しやすいと考えられる。また were を [wə:r] と発音するのもスコットランド方言の特徴である。

アイルランド方言では、母音 /ɪ/ を /ɪə/ としたり、/t, d/ を摩擦音化したりする特徴が目立つ。ウェールズの方言は個々の音よりむしろ音調にある。yesterday, library などの弱音を含む語でも語尾を高い調子で言う特徴があり、ウェールズ方言が「音楽的」と言われるのもその特徴をさしていると思われる。

アメリカの方言は前述のような3大区分のほかに、東部から西部への移住に伴う動きにしたがつ

て北部方言 (Northern), 中部方言 (Midland), 南部方言 (Southern) と3つに区分することもある (Wells (1982) など)。いずれにしろ、南部と東部は次のような特徴がある。

南部方言では、広二重母音の長音化の現象があり、/aɪ/ が [a:] のように、/ɔɪ/ が [ɔ:] のように表れる。goodby が [gʊdbá:] のようになり、boys が [bɔ:z] のように聞える。

黒人の英語 (Black English) が聞きとりにくいのは、the を da に、子音連結を一子音に、(Ex. less than → less'n, first → firs', master → massa), going to を gwine にしたりすることなどのせいもあるが、伝達が不可能になるほどでもないであろう。故キング牧師の有名な演説、“Let Freedom Ring.” などには黒人英語の特徴が随所に表れている。

東部方言はイギリスとの交流があまり途絶えなかったせいもあり、比較的イギリス標準英語に近い。東部方言の特徴は、母音では /a:/ の前舌音化と、r-帯色がないことが主なものであろう。

/æ, a:/ → [a:] fast, Harvard

/ə/ → [ə] speaker,

故ケネディ大統領が 1961 年 1 月 20 日に行った大統領就任演説には東部方言の特徴がよく出ているが、r-帯色をしない発音を用いているのでその翌日のニューヨークタイムズには、“Kennedy as a Public Speakah” という見出しがつけられていたそうである。

オーストラリアの英語は、もともとロンドンからの移住者が多いため、ロンドンの下町の発音が方言として生きている。よく引用される文 He went to the hospital “to die”. に見られるように、today の /eɪ/ が [aɪ] のようになっているため、うつかりすると、「病院に『死ぬために』行った」と、誤解するかもしれない。

しかし、方言はそれぞれ母音体系があるので、ある音素の表れ方もずれている場合は、ほかの音素の表れ方もずれていることを想定すべきである。オーストラリアの方言とロンドンの下町方言とのそれはおよそ次のようになるであろう。(Culti-

vated Australian, CA は GB に近いので除く)

/i:/ → [i:] または [əi]

/u:/ → [ə u]

/eɪ/ → [ʌɪ]

/aɪ/ → [ɔɪ]

/o u/ → [ʌ u] または [a u]

/a u/ → [æ u], ...

方言ははじめは聞き取りにくいが、慣れてしまえば決してむつかしいものではないであろう。

4. 標準語の必要性

方言を聞いても伝達上それほど支障がないのは、話題から内容がある程度予測できる、場面や状況からヒントが得られる、文法的、語彙的手がかりがある、などのせいであろう。しかし、方言訛りが強いと、聞いている側で、話しの内容よりもむしろ話し方の形式のほうに関心が行ってしまい、伝達効果もうすれてしまうことも十分考えられる。

十億近くの人々が英語を使っている現状では、やはり少なくともイギリス標準語、アメリカ標準語の2つをモデルとし、それらに近い発音をすることが伝達の円滑さのためにも望ましいと思う。

幸い、イギリスの標準語としては、RP(Received Pronunciation) が主に BBCなどを通して広く受容されており、また、アメリカ標準英語としては、人口、地域的広がり、などで優っている一般米語(GA, General American) があるので、これらの2つの標準語をモデルとして、世界広域通用語の役割を与えておきたい。

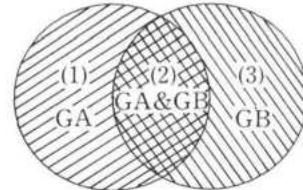
5. RP と GA

RP でも Gimson (1980) によれば、保守的 RP (Conservative PR), 一般 RP (General RP), 進歩的 RP (Advanced RP) の3つがあるが、Windsor Lewis (1972) は一般 RP を(年令約40~60歳)を GB (General British) と名づけ GA と対比している。

GB も GA も発音辞典に示されているので発音辞典に掲載された音声表現を比較することによって GB と GA の共通点や相違点が明らかになる。

ただし、同じ記号を用いても、調音位置がそれぞれ違っていることもあるので、口形図によって調音位置を確かめたり、また実際に多くのインフォーマントにあたり資料を得ることも必要である。

GB と GA と比較すると、以下のモデルに示したように、共通点がはるかに多いことがわかる。



GA と GB の共通点と相違点 (1) GA のみの特徴、(2) GA, GB の共通的特徴、(3) GB のみの特徴

(1)には r-帯色、多音節語の第2アクセント、弾き音の [t̪] などがある。

(2)には、主に /t̪/ と r-帯色を除くすべての子音、母音の大部分、二重母音の一部が入る。

(3)には、つなぎの r (linking 'r'), 母音の /ɒ/, 二重母音の /əʊ/, それに高低変化の顕著な音調の特徴などがある。

以上述べた3点の具体例をあげるとそれぞれ次のようにになる。

★ r-帯色

orange の発音は出だしの [ɔ] が GA では r-帯色化し /r/ 自体の音は消失し, [ɔ'rɪndʒ] のようになるのに対し、GB では、母音間に挟まれた /r/ は弾音化し、舌先が口蓋に一回はじく調音運動が生じる。/r/ と音声的性質が近い /ɜ:/ では、GA と GB では次のような違いが生じる。

hurry [hɜ̄ri (GA), hárri (GB)]

courage [káridʒ (GA), kárídʒ (GB)]

★ 第2アクセント

多音節語、例えば、secondary, temporary は GA と GB とでは次のような違いが生じる。

secondary [sékəndəri (GA) |sékənd(ə)rɪ (GB)]

temporary [témpərəri (GA) |tèmp(ə)rəri (GB)]

temporarily になると、GA では [témpərérili] のように GB では [témpərlili] のようになる。GA がゆったりとした感じを与え、GB がひきしまつ

た感じを与えがちなのは、この第2アクセントの有無に負うていると思われる。

★弾き音の [t]

語中では、a letter to the editor などに生じるが、語末の t が次の語のはじめが母音のときにも生ずる。get up, a lot of beer, it is など比較的頻度が高い。

★挿入の r

far はイギリス英語では [fa:] だが、east など母音で始まる語が続くと r は [t] に近い音で発音される。この linking 'r' は GB の特徴の一つと考えられる。far east に r-帯色か r-挿入かで GA か GB かの区別ができるほどである。

★二重母音の [əʊ], 母音の /ɒ/

GA では [oʊ], GB では [əʊ] であるが、いずれも二重母音音素 /oʊ/ に属するものと考えられる。

I don't know about those stones.

の /oʊ/ をどう発音するかで地域差異が明らかになる。

一方、母音の /ɒ/ は GB の特徴で、GA の /ɑ/ に円唇を伴って発音する。hot, hot, pot, box など日常語に多く生じる音である。また、GA の /æ/ が GB で /a:/ で発音されることがあるが、その数はあまり多くない。GA と GB を対比すると次のようになる。

man	} /æ/	/æ/
ask		/a:/
father	} /ɑ/	/a:/
hot		/ɒ/

つまり、GA は GB より母音を一つ減らすことができる。しかし、GA と GB を共通に取り扱う記述方式をとれば、father も GA で /a:/ を採用し、hot は /a|ɒ/ とすることになる。この方式だと、bomb /bam/ と balm /ba:m/ を区別する母音体系になる。

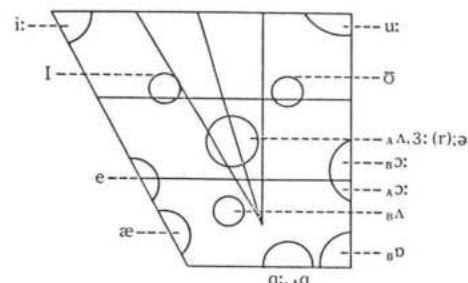
このほか、母音の位置は米音と英音とで少々違うことがあるが、それを記述するには次のような附加記号 (diacritic mark) を用いることになる。

V̄ = 中寄り, V̄ = 狹め, V̄ = 開き

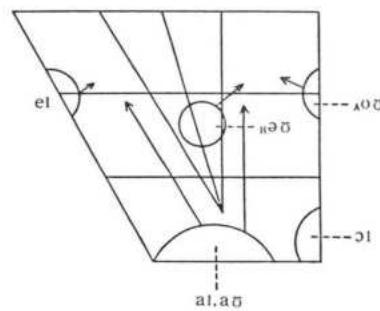
V̄ = 後退, V̄ = 前進

GA → GB	GB → GA
1 /ɪ/ → [ɪ̄]	/ɪ/ → [ɪ̄̄]
2 /e/ → [ē]	/e/ → [ɛ̄]
3 /æ/ → [ǣ]	/æ/ → [ǣ̄]
4 /ʌ/ → [ʌ̄]	/ʌ/ → [ʌ̄̄]
5 /ɑ/ → [ɒ̄]	/ɒ/ → [ɑ̄̄]
6 /ɔ:/ → [ɔ̄̄]	/ɔ:/ → [ɔ̄̄̄]
7 /oʊ/ → [ȫ̄]	/oʊ/ → [ȫ̄̄] or [oʊ̄̄]
8 V+/r/ → V+(/r̄/) V+(/r̄̄/) → V+/r/	

以上の 1 から 7 までの差異は音声上の、つまり異音上の差であって音素的な差ではないので、GA, GB を同一の母音図によって、共通点と相違点を示すことができる。



GA, GB を含めた母音の調音位置



GA, GB を含めた二重母音の調音位置

一方、音調については、GA と GB の違いは Marckwardt (1958, p. 242) によって図示されているように、GB では出だしが高いのに対し、GA では音調核が特に際立っている。

GB	GA
My name is <u>John</u> .	My name is <u>John</u> .
Are you quite <u>sure</u> ?	Are you <u>quite</u> <u>sure</u> ?
Will you pass the <u>salt</u> , <u>please</u> ?	Will you pass the <u>salt</u> , <u>please</u> ?

以上の諸例から GA と GB と共に通する面が多いものの、個々の音（特に母音・二重母音）、語中の‘t’、第2アクセント、r-帯色、出だしの音調が両者の区別をする手がかりになる。いずれにしろ、GA と GB との間で伝達上の困難はあまりないものと考えられる。

6. その他の差異

方言以外の固定的な差は、時代的なものや社会階層的なものがある。RP（前述）では年令層に3つの段階を分けたが、社会階層も大別すると、上流階層（upper class）、中流階層（middle class）、勤労階層（working class）の3つに分けられる。これらの階層はほぼ教育年限とも関係があるが、現在は昔ほどはっきりした区分はなくなったり、また、一部には反体制主義（antiestablishmentarianism）が作用し、標準的な発音に対しては気取っているとして避けたい傾向もあるようだ。

7. 可変的な多様性

方言が固定的なものであるのに対し、各人が場面や状況に即応して変化する語法は可変的で柔軟なものである。

これらの変化しやすい側面を捉えるいわば柱として、媒体、話題、場面、相手と4つに分けて検討することが便利である。

8. 媒体（medium）

文字言語と音声言語とはかなりずれがある。音声言語とは、活字を媒体とせず、話し手と聞き手の間で自由に行われる伝達、非伝達活動をさすの

であって、音読（reading aloud）とは異っている。音読では、文字に助けられて、統語的に複雑な文でも、つかえることなしに音声化するが、音声言語では、統語的にも語彙的にも簡単で話者がふだんからなじんでいるものを選ぶ傾向がある。文中で言い換え、つかえ、省略などが起こるが、音調や強勢の話者の意向を伝達するために十分用いられる。

9. 話題・場面・相手

一般的な話題の場合と専門的な話題とでは自づから音声上の差があると考えられる。また、場面についても公式な時と略式な時では、発音もかなり違ってくる。公式な英語は、概して、放送英語（network English）に近いものと考えられている。略式な場面ではかなりの略式表現が用いられる。

相手に対する話者の態度によっても発音はいろんな表れ方をする。相手に敬意を表す必要のある場合は、丁寧な（polite）な文体になるし、親しい間柄では、略式な発音でもかまわない。

外国語として英語を学ぶ多くの人にとって戸惑いを覚えるのは、略式な発音である。つづり字からかなり離れていたり、弱音化、同化現象、脱落など多様な変化があると、文字言語では理解できることでも音声では理解できないことになってくることがある。次項でそれらの主な変化について取上げてみたい。

10. 多様な変化

and を [ænd] と決めつけていると、Bed'n Breakfast, Rock'n Roll, Fish'n Chips などにあるそれぞれの and (=’n) が聞き取りにくい。音声変化は前後関係と同時的特徴によって変化するが、それを定式で示すと次のようになる。

前後関係：A → B/X — Y

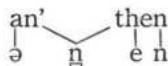
同時関係：A → B/[z]

and を例とすると、以上の定式は次のようになる。

/æ/ → [ə]/[-stress] /ænd/ が [ənd] になる。

/d/ → \emptyset / /n/ ___ # C
 /ən/ → [ŋ] / [-stress]

/n/ → [ŋ] / ___ /ð/



/ən/ → [əm] / ___ /m/
 /ən/ → [əm] / ___ /f/
 /ən/ → [əŋ] / ___ /g/

and は an' になる。
 an' がさらに弱まると [n] になる。
 and then が次のように変化する。

(-は歯間音を示す)

John an' Mary
 three an' four
 boys an' girls

and は an' と同じような発音になることが多いので、発音自体だけでなく、文構造などいくつかの情報を駆使して理解することが望ましい。

一方、/t/ だけを捉えても次のような多くの表れ方をする。(詳細は略)

/t/ → [tʰ] / (V) ___ ˥
 [t] / ˥ ___ V
 [t̪] / ___ [-cons]
 [t] / s ___ V

/l/ についても次のような表れ方をする。

/l/ → [l] / ___ V like
 → [ɫ] / V ___ (C) # milk, mill
 → [l̪] / [-voice] ___ V fly

/r/ についても無声化現象がおこり、try, cry, pray の r は先行する子音が無声子音なので、その影響を受けて一部無声化が行われる。

無声化現象は以上の環境のほかにも、語末にも認められ、その際、無声/有声の区別は子音自体ではなく、有声音の前に生じる母音は無聲音の前の母音より長いという性質によって、つまり母音の長さによって、区別するということになる。定式で示すと次のようになる。

V → [+long] / ___ [+voice]

例えば、cap と cab は /p/ と /b/ の区別よりもその前の母音 /æ/ の長短が両者を区別する手がかりとなる。

以上の音声現象はふつうの速さの英語でも生じるが、やや速い英語 — これは親しい間柄で多く用いられるものであるが — では、特に次の現象

が際立っている。

☆ /h/ の脱落 : he, his, him, her, have の /h/ が脱落する。he の h も文中では I think 'e's right (he is right)。のようになる。

☆ ing が in に : How are you doing? が How're ya doin'? のようになる。また、I'm going to see him. が I'm gonna see 'im のようになるのは goin' to → goinna → gonna の変化を考えれば説明がつくことであろう。

速いスピーチでは、母音が弱声化したり、h が脱落するので、次のような同音異義語 (homonymy) が生ずる。

our = are = her = or	a = of (o')
his = is = has = does	have ('ve) = of ('f)
there = their = they're	

このほか、Did you make 'er? が Jamaica のように速い話し方では変化があると言わされている。

これらの発音の多様性を捉えるためには、上記のように精密表現 (narrow transcription) が必要であるが、ふつうのつづり字に工夫をこらすことによって音実質 (phonetic substance) の表現に迫ろうとする工夫もある。そのいくつかの例である。

Whadda you say?
 a cup o' tea
 a frenna mine
 He might of been late (of=have) など

11. 結び

英語の発音は実に多様であるが、その実態を検討すると、GA か GB にあまりかけ離れていないことがわかる。このことは、つまり標準的な GA か GB をよく知れば、多様性の中にも現代英語という共通なものが見えてくるのであり、定式を用いることによって現代英語の統合的な記述が得られるのではないかと思われる。(筑波大学教授)

参考文献

- A. C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English*. Arnold. 1980.
 (p.20 へ続く)

英語発音の表記法

竹林 滋

英語のつづり字が不規則で複雑極まりないものであることは世界的に知られていて、恐らく世界で最悪の言語の一つであろう。そのため英語では早くから、つづり字によらずに、1つの記号は1つの音しか示さない、という約束で発音を表わす方法が行なわれてきた。この方法を音声表記ないし発音表記と言い、そこで使用する記号を音声記号または発音記号という。従来我が国の教科書や辞書において使用してきた発音表記の方式はJones式と呼ばれるものであるが、それは今世紀前半における世界的な音声学者Daniel Jones (1881—1967) が英語の発音辞典 *An English Pronouncing Dictionary* (1917) で使用した記号に基づいているからである。

Jonesはこの発音辞典で母音と子音を表わす音声記号として国際音声学協会 (International Phonetic Association : 略 IPA) が勧める国際音声記号 (International Phonetic Alphabet : 略 IPA) を採用した。IPAが発行している *The Principles of the International Phonetic Association* に紹介されている母音記号の原則は、Jonesが考案した基本母音に基づくもので下の図の如くである。黒丸で示されたものが基本母音の位置で、世界の諸言語の母音にはこの図の区分けに従ってい

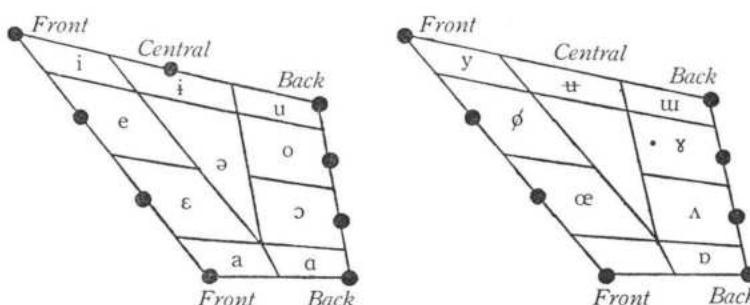
ずれかの基本母音の記号を当てるわけである。Jonesはこの原則に従って英語の母音を表わすのに次のような記号を用いた。

[i:]	see	[o]	molest
[i]	it	[u]	put
[e]	get	[u:]	too
[æ]	cat	[ʌ]	up
[ɑ:]	father	[ə:]	bird
[ɔ:]	hot	[ə]	china
[ɔ]	saw		
[ei]	day	[iə]	here
[ou]	go	[ɛə]	there
[ai]	fly	[ɔə]	four
[au]	how	[uə]	tour
[ɔi]	boy		

また子音記号は [p, b, t, d, k, m, n, l, r, f, v, s, z, h, w] については普通のつづり字通りで、そうでないものは次の如くである。

[g]	give	[ʒ]	measure
[ŋ]	long	[j]	yes
[θ]	thin	[tʃ]	chin
[ð]	then	[dʒ]	jam
[ʃ]	ship		

読者が既にお気付きのように実際に70年も経た現在の我が国の教科書・辞典類がイギリス発音を表わすのに使用している記号は上と殆んど変わっていない。ただアクセントを示す方式が現在とは違って第一および第二アクセントを [mækə'rouni] のように表わし



ている。

この Jones 式表記が我が国で使用されるようになったのは大正末期で、三省堂発行の『袖珍コンサイス英和辞典』(1922, 大正 11 年) がその普及に大きな貢献をした。それまでの英和辞典は Webster 式と呼ばれた方式を採用していた。この方式は本来のつづり字を書き直さずに種々の補助記号をつけて発音を示そうとする煩雑極まりないものだった。Jones 式はそれまでの発音表記方式に比べて遙かに学問的に優れていたため我が国の英語教師に高く評価されて普及した。ただし『コンサイス英和』はアクセント記号は Jones の発音辞典と同じ [mækə'rəuni] であった。また発音表記は現在のように [] に入れて示すのではなく () に入れている。アクセント記号が [mækə'rōuni] のようになったのは市川三喜『英語発音辞典』(1923, 大正 12 年) からであるが、岡倉由三郎『研究社新英和大辞典』(1927, 昭和 2 年)においてほぼ現在の方式が定着した。英語教科書においても大正末期から昭和初期にかけて Webster 式から Jones 式に交替が行なわれた。昭和 10 年代までの我が国の英語教育において対象となつた発音は専らイギリス発音であったので、辞書や教科書においては第二次世界大戦の終了まで Jones 式以外の発音表記方式は採用されなかつた。

しかしながら戦後は事情が一変した。それまで全くといってよいほど無視してきたアメリカ発音を示す必要に迫られたのである。そこで注目を浴びたのが John Samuel Kenyon と Thomas Albert Knott 共編の *A Pronouncing Dictionary of American English* (1944) であった。しかしこの発音辞典は母音の表記方式が Jones 式と全く異なつていて英語研究者や辞書および教科書編纂者を戸惑わせた。次にこの発音辞書の母音記号を紹介する。

[i]	bee	[bi]	[o]	go	[go]
[ɪ]	pity	[pɪtɪ]	[ʊ]	full	[fʊl]
[e]	rate	[ret]	[u]	tooth	[tuθ]
[ɛ]	yet	[jet]	[ɜː]	further	[fɜːðə]

[æ]	sang	[sæŋ]	[ə]	further	[fɜːðə]
[ɑ]	ah	[a]	[ə]	above	[ə'bʌv]
[ɔ]	jaw	[dʒɔ]	[ʌ]	custom	[kʌstəm]
[aɪ]	while	[hwail]	[ɔɪ]	toy	[tɔɪ]
[au]	how	[hau]			
[ɪr]	ear	[ɪr]	[ɔr]	war	[wɔr]
[ɛr]	air	[ɛr]	[ɔr]	four	[for]
[ar]	far	[far]	[ʊr]	poor	[pur]

この発音表記方式はしばしば Kenyon-Knott 式と呼ばれるが、Jones 式と Kenyon-Knott 式の違いは次の 3 点にある。

1. Jones 式では長音符[:]を使用しているが Kenyon-Knott 式では使用しない。また Kenyon-Knott 式は Jones 式では使わない [ɪ], [ʊ] の記号を使用している。
2. Jones 式の二重母音 [ei], [ou] を Kenyon-Knott 式では [e], [o] と表わしている。
3. Kenyon-Knott 式では Jones 式にない [ɔ], [ə] という記号が使われている。
4. Kenyon-Knott 式には Jones 式にない [ɪr], [ɛr], [ar], [ər], [ʊr] があり、逆に Jones 式の二重母音 [iɔ], [əɛ], [uə] がない。

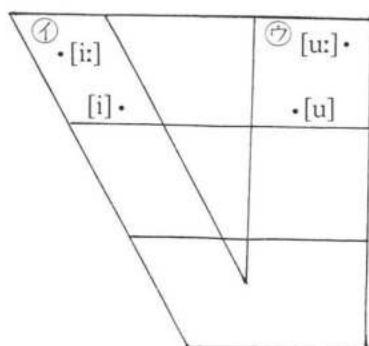
次に両者の記号の相違について説明する

1. 長音符[:]について。日本語の母音と英語の母音の大きな違いは、日本語の母音には短母音と長母音の 2 種類があるのに対して英語の母音にはそのようなはっきりした区別がないことである。

日本語では [odʒisan] (叔父さん) と [odʒi:san] (お爺さん), [obasan] (叔母さん) と [oba:san] (お婆さん) のように母音の長短だけで語の意味が変わるが、英語では母音の長短の関係が日本語ほど単純ではない。Jones 式の表記では一見母音の長短だけの違いと思える sit [sit] と seat [sɪ:t], pull [pul] と pool [pv:l] の母音の実際の発音を比較してみると実は次の 3 点で違つてゐるのである。

	長さ	舌の高さ	緊張度
[i], [u]	短	低	弛緩
[i:], [u:]	長	高	緊張

まず長さの違いであるが、確かに同じ条件では [i:] のほうが [i] よりも長く [u:] のほうが [u] よりも長い。しかし日本語の「イ」と「イー」、「ウ」と「ウー」の長さの違いがほぼ 1 : 2 であるのに對して、英語の [i] と [i:], [u] と [u:] の違いはそれほどではなく 1 : 1.4 程度である。



次に舌の位置を比較すると図のようになる。[i:] は日本語の「イー」に近いが [i] は「イ」と「エ」の中間のような音色を持つ。また [i:] と [u:] では唇や舌などの音声器官が緊張しているのに対し [i] と [u] では緩んでいることも両者の相違点として挙げられる。Jones は上の 3 つの違いのうち長さの違いが最も重要だとして、舌の位置の違いを記号の上では無視して [i], [u] 対 [i:], [u:] とした。これに対して Kenyon は舌の位置の違いおよびその結果生ずる音色の違いが最も重要なとし、逆に長さの違いを記号では無視して [i], [u] 対 [i], [u] とした。このように Jones 式と Kenyon-Knott 式の違いは音声事実やイギリス発音とアメリカ発音の相違ではなくて、2人の音声学者の同じ音声現象に対する解釈の違いによる。このような理由で Kenyon-Knott 式では長音符号 [:] を全く使用せず、Jones 式の [a:], [ɔ:] に対しても [ɑ], [ɔ] を使っている。

2. 二重母音について。Jones 式で [ei], [ou] で表わされている二重母音はもともと二重母音性が比較的弱い。この傾向は特にアメリカ英語で顕著でこれらの母音が rate や rope のように無声子音の前にあるときには中西部地方ではしばしば

[e:], [o:] となる。つまりこれらの母音は二重母音として発音されることもあるが单母音 ([i:], [u:]) のように始めから終りまで音色が殆んど変わらない母音) として発音されることもあるのである。Kenyon は单母音を代表的なものと解釈してこれらの母音に [e], [o] の記号を当て(上述の理由で長音符はつけない)、二重母音はその変種とみなして特別に別個の記号は用いない。理屈は確かにこの通りであるが、母音の長い短いにこだわる日本人にとっては母音に長音符を付けない方式はやはり理解しがたく、Kenyon-Knott 式の see[si], two[tu], law[lɔ], say[se], go[go] という発音表記を見て「アメリカ英語では see は「スイ」、two は「トゥ」、law は「ロ」、say[se] は「セ」、go は「ゴ」と発音するのか」という疑問を持つ人が出たのも無理からぬことであった。

3. [ɹ], [ə] について。これは Jones 式と Kenyon-Knott 式の解釈の違いではなくてアメリカ発音とイギリス発音の音声事実の違いによるものである。Kenyon-Knott 式で [ɹ] と記される母音はアメリカ英語独特のもので、イギリス英語にはない。これに対応するイギリス英語の母音は [ə] である。この母音には図に示したように 2 通りのタイプがあるが、どちらの舌の構えで発音しても音色は極めて類似していて区別はつかない。両者をまとめてしばしば「そり舌母音」(retroflex vowel)と呼ぶ。



このそり舌母音を表わす記号 [ɹ] は air の二重母音を示す [ɛə] の [ɛ] の向きを逆にして右肩にかぎ (hook) を付けたもので、このかぎはそり舌を表わす IPA の記号である。この記号は馴染みが

ないために我が国ではついに一般化しなかった。次に [ə] の記号であるが、これは Kenyon 自身が考案したもので「かぎつきのシュワー」(hooked schwa)と呼ばれる。schwa というのは [ə] の記号の名前で、始めは [ə] の右肩にそり舌を示すかぎをつけた [ə̄] を使っていったのだが、一筆で書けるように [ə̄] としたものである。この記号は [ɜ̄] の母音が弱い音節に現われたために弱く短くなつた母音を表わす。従つて舌の構えは図の [ɜ̄] の場合と同じである。イギリス発音の [ə̄:] 対 [ə̄] の関係がアメリカ発音の [ɜ̄] 対 [ə̄] の関係だと考えればよい。従つて [ɜ̄] = [ə̄:] と考えると分かりやすい。[ɜ̄] と [ə̄] の両方が further ['fɜ̄ðə], murmur ['mɜ̄mə] に現われる。[ə̄] に対応するイギリス発音の弱い母音は [ə̄] である。

4. 「Rの二重母音」について。これもアメリカ発音とイギリス発音の相違である。これらの二重母音の後半の [r] で表わされる音は実は上述の [ə̄] と同じものである。ではどうして違う記号を使うかというと、[ə̄] がそれ自身で 1 つの音節をなすのに対して [r] は二重母音の一部であつてそれ自体で 1 つの音節をなさないからである。これらの二重母音は後半が全て [r] なので「Rの二重母音」と呼ばれる。しかし Jones 式で教育され、アメリカ発音の知識を殆んど持たなかつた当時の我が国の英語教師たちは [ɪr] のように母音の後につけた [r] は理解できなかつた。

そこへ登場したのが Gerhard 式である。Robert H. Gerhard [gēəhaəd] は戦後東北学院大学の教授を勤め、その後国際キリスト教大学の教授となつた音声学者で、『最新コンサイス英和辞典』の戦後最初の版（昭和 26 年）の発音担当者であつた。彼はアメリカ発音を表わすための Jones 式と Kenyon-Knott 式の折衷方式を考案した。彼は更に 1940 年代のアメリカの構造主義言語学の音素論の理論も取り入れて母音記号の簡素化と一音節語のアクセント表示を行なつた。これが Gerhard 式と呼ばれるものである。Gerhard 式を Jones 式と Kenyon-Knott 式の中間に並べてみるとこれ

が両者の折衷方式であることがよく分かる。

	Jones	Gerhard	Kenyon-Knott
bid	[i]	[i]	[i]
bed	[e]	[e]	[ɛ]
cat	[æ]	[æ]	[æ]
ask	[a:]	[æ/a:]	[æ]
hot	[ɔ̄]	[ɑ̄]	[ā]
dog	[ɔ̄]	[ō]	[ɔ̄]
book	[u]	[u]	[u]
cut	[ʌ]	[ə̄]	[ʌ̄]
about	[ə̄]	[ə̄]	[ə̄]
see	[i:]	[i:]	[i]
calm	[a:]	[a:]	[a]
law	[ɔ:]	[o:]	[ɔ̄]
boot	[u:]	[u:]	[u]
bake	[ei]	[ei]	[ē]
pine	[ai]	[ai]	[ai]
boil	[ɔ̄i]	[oi]	[ɔ̄i]
town	[au]	[au]	[au]
boat	[ou]	[ou]	[ō]
bird	[ə̄]	[ə̄]	[ɔ̄]
beard	[iə̄]	[iə̄]	[ir̄]
bigger	[ə̄]	[ə̄]	[ə̄]
bear	[eə̄]	[eə̄]	[er̄]
barn	[a:]	[a:]	[ar̄]
war	[ɔ̄:]	[ō:]	[ɔ̄r̄]
wore	[ɔ̄:]	[ō:]	[or̄]
poor	[uə̄]	[uə̄]	[ur̄]

上の表で明らかなように新しく加わつた記号は [ə̄] だけである。Jones 式に倣つて bird の母音に對しては Kenyon-Knott 式の [ɔ̄] を使わずに [ə̄:] とし、また「Rの二重母音」も [iə̄], [eə̄], [a:] , [ō:], [uə̄] と表わした。それでもやはり唯一の馴染みのない記号 [ə̄] が現場の教師たちの反発を買つた。更に [ɛ], [a], [ɔ̄] を廃止して記号を簡略化したこと、cat [kæt̄] のように一音節語にアクセント符号をつけたことなども、Jones 式をバイブルの如く信奉し、構造主義言語学の音素論には全く無縁だった当時の現場の教師たちに強いアレルギーを引き起した。このように

して Gerhard 式発音表記を採用した『コンサイス英和』は営業的に手痛い打撃を蒙りこの試みは惜しくも失敗に終った。時期尚早だったのである。

Gerhard 式の失敗をまの当たりにみた教科書および辞書編纂の関係者たちは [ər] の記号を使用しないで何とかアメリカ英語のそり舌母音および「R の二重母音」を表わそうとした。そこで登場したのが昭和 30 年刊行の『新簡約英和辞典』の方式で、これを簡約式と呼ぶことにする。次に簡約式を紹介し、=の後に / で区切って Gerhard 式でアメリカ音を、Jones 式でイギリス音を示す。

[ə:r]	= [ə:/ə:]	: bird
[iər]	= [iə/iə]	: beard
[ɛər]	= [eə/eə]	: bear
[a:r]	= [aə/a:]	: star
[ɔ:r]	= [oə/o:]	: door
[u:r]	= [uə/u:]	: poor

簡約式では新しい記号は使われていないので現場の教師の心理的な抵抗がなく、かなり普及した。現在でもこの方式を採用している教科書や辞書が多い。

しかしアメリカ発音の学習が盛んになるにつれて簡約式の [r] の記号の持つ大きな欠陥が指摘されるようになった。特に問題なのは [ə:r] の記号で、bird などに現われるこの母音はイギリス音の [ə:] と同じく始めから終りまで音色の変わらない単母音(monophthong)で、ただ [ə:] と違っている点は前述のように舌がそり返っているのである。[ə:r] の記号が表わすように [ə:] の後に [r] が続くのではない。だからこそ Kenyon-Knott 式では [ɹ], Gerhard 式では [ə:] という单一の記号で示しているわけである。ところが [ə:r] を一種の二重母音とした解説が通俗書ばかりでなく発音の専門家の書いた本にも見られるような状況が生じた。いっぽう star の [a:r] および door の [ɔ:r] はそれぞれ [ar], [or] (Kenyon-Knott 式) ないし [aə], [oə] (Gerhard 式) で、完全な二重母音でそり舌で発音されるのは後半の部分だけである。全く同じ形式で示されているのに [ə:r]

は単母音で [a:r], [ɔ:r] は二重母音というのは発音表記としては重大な欠陥と言わざるをえない。どうしてこうなったかと言えばイギリス音を基礎にしてアメリカ音を副次的に考え、Jones 式にただ [r] をつけただけだからである。更に困ったことに簡約式は英米の発音の併記という要求から生まれたものなのに、英米の発音を併記せずアメリカ発音だけを教える教本にまで簡約式の [iər], [ɛər], [a:r], [ɔ:r], [u:r] を使うものが現われた。その結果として [r] を正規の発音記号と考える誤解や、アメリカ英語の [r] の音の練習などという滑稽な指示まで登場することになった。もちろん [r] という発音記号は存在しない。これは上で紹介したように、本来辞書においてアメリカ発音とイギリス発音を（不十分ではあるが）同時に示そうとする一種の「約束記号」である。従って [r] の記号が示す独立した音などはアメリカ英語に存在するはずもなく、もちろん練習のしようもない。現在でもアメリカ英語のそり舌母音および「R の二重母音」の完全な理解が一般の教師や学習者に欠けているのは簡約式が普及した皮肉な副産物といってよい。

一音節語にアクセント符号をつけたのも教師たちが Gerhard 式を敬遠した理由の一つであったが、こちらのほうはそれほど強いアレルギーはなかった。実際に使用してみると何ら不都合なことはなかったからである。理論的な詳しい解説は紙面の関係で省略するが、現在の音声学および音韻論では N. Chomsky and M. Halle : *Sound Pattern of English* (1968) の “In monosyllables, the vowel receives primary stress.” (p.16) いうことばのように、一音節語には第一アクセント（強勢）があるとする説で一応決着がついている。また実際に辞書において一音節語にアクセントをつけてみると、逆に文中ではアクセントを受けずに弱く発音されるいわゆる機能語(function word) の発音表記が次のように非常に合理化されるのである。

{ for [fɔr ; fɔər]
{ four [fɔər]
{ have(助動詞) [v, (h)əv ; hæv]
{ have(本動詞) [hæv]
{ that(関係代名詞) [ðət]
{ that(指示代名詞) [ðæt]
{ will(助動詞) [(ə)l, wəl; wɪl]
{ will(名詞・動詞) [wɪl]
{ would [(ə)d, wəd; wud]
{ wood [wud]

接尾辞のアクセント表示も非常に合理的になる。

- (1) 常に第一アクセントを受けるもの : -er [iər] (engineer), -ese [i:z] (Japanese), -esque [ésk] (picturesque)
- (2) 常に第二アクセントを受けるもの : -ful(名詞語尾) [fùl] (basketful), -hood [hùd] (boyhood), -like [lāik] (childlike)
- (3) 常に弱いアクセントを受けるもの : -er [ər] (teacher), -ful(形容詞語尾) [fəl] (beautiful), -ing [iŋ] (seeing)

現在では一音節語にアクセントをつける方式が有力な英和辞典の半数ほど、高校の教科書のかなりのものにおいて採用されている。

このように現在では Gerhard 式の長所が次第に理解されるようになり、一音節語のアクセント表示だけでなく [ə] を使用する英和辞典も次第に増加し、63 年度からは高校の教科書にも登場する。

最後に話を最初に紹介した Jones の発音辞典に戻そう。Jones の後継者のロンドン大学の音声学教授 A. C. Gimson は 13 版 (1967) からこの発音辞典の編者となったが、次の 14 版 (1977) では母音記号の大幅な変更を行なった。またこの 14 版の少し前にイギリスにおいて J. Windsor Lewis 編の *A concise Pronouncing Dictionary of British and American English* (1972) が刊行された。これは Kenyon-Knott 式に非常に近い表記方式を採用している。注目すべきことは、イギリ

スの有力な学習辞典である *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (*OALD*) (1974) が Lewis 式を、また *Longman Dictionary of Contemporary English* (*LDCE*) (1978) が Gimson 式を採用したことである。次に両方の表記方式を紹介する。

	Lewis, OALD	Gimson, LDCE
see	[i]	[i:]
sit	[ɪ]	[ɪ]
happy	[ɪ]	*[ɪ, i]
ten	[e]	[e]
hat	[æ]	[æ]
calm	[ə]	[ə:]
got	[ɔ]	[ɔ]
saw	[ɔ]	[ɔ:]
put	[u]	[u]
too	[u]	[u:]
cup	[ʌ]	[ʌ]
ago	[ə]	[ə]
fur	[ɜ(r)]	[ɜ: r]
butter	[ə(r)]	[ər]
page	[eɪ]	[eɪ]
home	[əʊ]	[əʊ]
five	[aɪ]	[aɪ]
now	[aʊ]	[aʊ]
join	[ɔɪ]	[ɔɪ]
near	[ɪə(r)]	[ɪər]
hair	[eə(r)]	[eər]
star	[a(r)]	[a: r]
store	[ɔ(r)]	[ɔ: r]
poor	[uə(r)]	[uər]

* Gimson では [ɪ] を使用し、LECE では [i] を使用している。

長音符号を使用しない Lewis-OALD 式はやはり実用性に難があったようで、Gimson-LDCE 式が現われるとフランスなどで OALD の売れ行きが激減したと伝えられる。そのため Oxford 社は急遽 OALD の発音表記を Gimson-LDCE 式に変更せざるを得なかった。上述のように sit, pull の母音と seat, pool の母音の違いは後者が前者より

長くて舌の位置が高いということにある。ところが Jones 式では前者を [i], [u], 後者を [i:], [u:] と表わすために両者の音色の違いが示せず、逆に Kenyon-Knott 式および Lewis 式では前者を [i], [u], 後者を [i], [u] と表わすために長さの違いを示せない。Gimson 式は両方の違いが直接記号の上に現われるように前者を [i], [u], 後者を [i:], [u:] と示しているが、この方式の実用性は極めて高く評価された。『研究社新英和辞典』(1980, 昭和 55 年) が我が国で始めてこの方式を採用し、高校の教科書も使用するものが現われた。いずれはこの方式を採用する学習辞典も現われるだろう。日本人にとっては特に sit の母音は習得が難しく、日本語の「イ」とは音色がかなり違うことを理解させる必要がある。ところが従来の Jones 式では seat の母音（こちらのほうは「イー」に近い）と同じ記号を使っているので、学習者にはなかなかこのことが徹底しなかった。[i] の採用はこの点で大きな意味を持つ。Lewis 式は逆に [ɛ], [a] を廃止して [e], [a] に一本化するという注目すべに記号の簡易化も行なっている。

以上で Jones の出現以来約 70 年にわたる英語の発音表記の歴史を概観したが、発音表記の今後のありかたについて一言述べてみたい。結論から言えば、頑なに Jones 式に固執するのは好ましくないということである。戦後、ことに最近 20 年ほどの間に我が国の英語教育ではアメリカ発音が大きなウェートを占めるようになった。それは人の接触がイギリス人よりもアメリカ人のほうが多いことのほかに、テレビやラジオなどから直接耳に入ってくる音声がアメリカ英語のほうが圧倒的に多いことにもよる。そのため現在の英語の辞書や教科書の発音表記ではアメリカ発音が主流となっている。ところが Jones 式はもともとイギリス発音を表わすものであるから、当然アメリカ発音を表記する際には無理が生ずる。簡約式はイギリス発音をベースにし、[r] を使用して全く便宜的にアメリカ発音を表記しようとしたものだが、これは音声学的にみて重大な欠陥が存在することは上述の通りである。アメリカ発音にはイギリス発音

にはないそり舌母音が存在するのであるから、それを表わす記号が 1 つ増えるのは当然で、素直に [ə] を導入すればよい。Gerhard 式を抜きにしてはアメリカ音の合理的な表記は考えられない。Gerhard 式を基盤として、それに Jones 式、Kenyon-Knott 式、Gimson 式、Lewis 式などの長所を加味すれば完全無欠とは言えないまでもかなり満足のいく表記方式ができると私は考える。

(東京外国語大学教授)

(p.13 より続く)

伊藤健三ほか、『英語学と英語教育』『英語学体系』(太田朗監修) 12 卷。大修館書店。1982.

D. Jones, *The Pronunciation of English*. Cambridge. 1956⁴.

J. W. Lewis, *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English*. OUP. 1972.

A. Marckwardt, *American English*. OUP. 1958.

R. McCrum, et al. *The story of English*. BBC. 1986.

島岡丘・佐藤寧、『最近の音声学・音韻論』、研究社出版。1987.

J. C. Wells, *Accents of English*. CUP. 1982.

(p.31 より続く)

great, other, any, aunt, build, busy, country, heard, come, who などはテストに頻出する語である（下線部は例外を表わす）。「文法」においてはルールが優先されているにもかかわらず、つづりになると、にわかに「例外」が幅を利かせる。これでは、学習者はつづりのルールを身に付けることができない。

最後に、繰り返しになるが、どうしても言っておきたいことがある。それは、「発音記号は我が国の英語教育に百害あって一利なし、早急に、教科書・辞書・参考書などから排除すべきである」ということである。

(東京外国語大学教授)

英語のつづり字と発音

今井邦彦

0. 「英語のつづり字は発音と食い違いがひどい、減茶苦茶だ、なんてよく言われるけど、そりでもないんだ。made の e が発音されないのは確かだけど、この e を削ればどうなる？ mad [maed] になっちゃうだろ？ e は made の a の字を [ei] と読ませる目印しになっているんだ」

中学の教室で英語の先生にこう教えられたのが今でも強く印象に残っている。後になって大学の英文科に進んでから、英語のつづり字と発音の食い違いをもたらしたものが何であったかを学んだ。そもそも本来の英語的つづり字法とフランス語式つづり字法が混在していた所へ、発音が変化したにもかかわらずつづり字の方はそれに応じて改変されなかつたこと、そして例は少ないが、doubt の b のように、発音もされない字が、語源に忠実であろうとする気持から挿入された場合があること、などが発音とつづり字の“ずれ”を生じさせた主な原因である。

同時に、この“ずれ”が現代英語において思いがけない効果を生んでいることも知った。英語の文章を読むときに、われわれが例えば right と write, site と sight といったような同音異義語を混同せずにいられるのは、むしろつづり字が違うおかげである。少し大袈裟にいうなら、現代英語のつづり字は部分的ながら表意文字化しているのだ。（じゅんすいにはつおんどおりに、たとえばはつおんきごうをつかってかかれたえいごが、ふつうのつづりじでかかれたものよりよみにくいのは、ちょうどこのぶんのようにかなだけでかかれたにほんごがかんじかなまじりでひょうきされたものよりよみづらいのとおなじで、けっしてなれだけのもんだけではない。）上記の made と mad が発

音し分け可能なものも、これまた「ずれの効用」である。この稿では、英単語の正しい発音を——強勢の位置まで含めて——知りかつ覚るために、つづり字がいかに役に立つか、と言う話をしたい。

1. 長母音か短母音か

ここで言う「長母音」には、いわゆる「二重母音」が含まれる。というより二重母音の方が主である。つまり最初にあげた例の mad と made の場合のように、a の字を [æ] と読むか [ei] と発音するかと言うことだ。つづり字の方を主体にして考えると、英語の 5 つの母音字は、長いか短かいかという点に関して次のような対応を示していることをまず指摘しておきたい。なお、以下の例では長（二重）母音を表す字には上に “—” をつけ、短母音を表す字は無印のままにしておく。

	長	短	
a	[ei]	- [æ]	(例：māde-mad)
e	[i:]	- [e]	(例：mēte-met)
i	[ai]	- [i]	(例：kite-kit)
o	[ou]	- [ɔ, a]	(例：cōne-conic)
u	[ju:]	- [ʌ]	(例：cūte-cut)

1.1 1 個の母音字

ai とか oo などではなく、母音字が 1 つだけ使われている場合を考えよう。

1.1.1 1 つの子音字 + e の前にある時

この位置の母音字は長（二重）母音を表わす。上で例にあげた made, mete, kite, cone, cute 等がまさしくこれに当てはまる。ただしこれは e で

その語が終わっている場合の話で、category, ceremony, misery, honest 等の下線部の字は短母音を表わしている。なお u だけはいわば頑固者で, funeral の u は長母音であるし, それどころか後に続く子音字が 1 つだけならば, 次にくる母音字が何であろうと, また更にその後にはほかの音が続こうとも, 頑として [ju:] の音を表しつづける。cūbic, mūtation, cūrator, būcolic 等がその例である。

delicate, intricate, passionate, chocolate, climate 等の -ate は [it] ないし [ət] と発音されるが, これらが形容詞か名詞であることに注目せるとよい。語の終わりの -ate は, 形容詞・名詞の時このように発音されるが, 動詞であれば dedicāte, origināte, のように [eit] と読まれる。このことは, animāte (動) -animate (形), associāte (動) -associate (名) のようなペアを使って認識させるのがよからう。事実, チョコレート, デリケートなどの借用語を見れば, -ate に関する限り動詞型の発音の方が日本人学習者に定着してみることがわかる。

1.1.2 2 個の子音字の前

この場合は原則的に短母音である。apt, sect, camp, swift などがその例だ。ただし 2 個の子音字が両方ともいわゆる歯茎音 (t, d, s, l, n) である場合は例外で, child, pint, chāste, ghōst, cōld, mīnd などでは二重母音が現れる。また -ange というつづりも同様で, chānge, rānge, āngel などの a は [ei] だ。

describe, covēne, producē 等では長(二重)母音であるものが, description, convention, production では短母音に変わるものも, 2 個の子音字のなせるわざである。

ただし, 2 個の子音字のうち 2 番目が l か r である場合はこの限りではない。āble, ācre, title, library などには二重母音が現れる。子音字が 2 個並んでいても, そのうち 2 番目が l か r であるときは, あわせて 1 個としてしか勘定しない, といふわけだ。

1.1.3 うしろから 3 番目

profāne, extrēme, divīne, provōke で二重母音を表している a, e, i, o, は profanity, extremity, divinity, provocative になると短母音を表す。それは派生語尾が付いた結果これらの母音が後ろから数えて 3 番目の音節に立つことになったためである。一般に後ろから 3 番目にある音節に長(二重)母音が来ることは滅多はない。ただしここでも u は頑固で, pūtative, mūtiny, nūdity, immūnity の u は立派に [(j)u:] と発音される。

1.1.4 -ic の前

この接尾辞が付くと, もとの母音が長(二重)母音であっても, 短母音に変化する。cōne-conic, mīme-mimic, volcāno-volcanic, mētre-metric 等の各対を眺めてみるとよい。

-id, -ish の前でも, ある程度似たような現象が起こる。rapid, acid, placid; parish, relish, radish, abolish などは別に派生語ともいえないが, florid を flōwer と, vivid を vivacious と, Spanish を Spāin と比べてみるのも興味深ろう。

1.1.5 子音+i+母音の前

Arāb, Irān, Canāda の下線部は短母音を表すが, Arābian, Irānian, Canādian ではいずれも二重母音である。-ian という派生語尾が付いたため, これらの母音子が「子音+i+母音」という環境に立つに至ったからである。これはなにも -ian に限ったことではなく, -ial, -iate, -ious が付いた場合にも起こる。manager-manegērial, colon-colōnial, college-collēgiate, brevity-abbrēviate, fallacy-fallācious, victory-victōrious をそれぞれ比べるとわかる。

1.2 2 つに並んだ母音字

boat, heel, rain, beat, room に見るとおり, 2 つに並んだ母音字は本来的には長(二重)母音を表すものである。

1.2.1 例外

ところが、歴史のいたずらで2つの母音字が短母音を表す場合が生じた。しかし幸いなことにはその数は少ない。数少ない例外と言うのは、覚えてしまえばこと足りるものだから、実のところ恐るべきものではないのである。以下に主なものをおげておこう。

	通常の音価	例外の音価
ai [ei]	(plain)	[æ] (plaid [plaɪd]) [e] (says [sez])
ea [i:]	(seal)	[e] (head [hed])
ee [i:]	(meet)	[i] (breeches [brɪtʃɪz])
ei [eɪ]	(eight)	[e] (heifer [hɛfə]) [aɪ] (height) [i:] (receive)
ie [i:]	(field)	[e] (friend [frend]) [i] (sieve [siv])
ow [oʊ]	(know)	[ɔ, a] (knowledge [au] (cow) [nɒlɪdʒ])

2. 変則的つづり字

英語のつづり字にもかなりの規則性があるのは確かだが、中にはどうしようもなく変則的な、つまり「滅茶苦茶」なものがあるのも事実である。しかし有難いことに、これらは数が少ないのでなく、ほとんどが入門期に覚えてしまう易しい単語に限られている。「aを[e]と読む例をあげよ」と改めて問われるとまごつきそうだが、答えは何のこともない *many* と *any* である。

この節では、子音字の場合も含めて「おなじみの語ながらよく考えてみると変わったスペリングを持つ例」を取り扱うことになる。

2.1 母音の場合

* **u** : この字を *busy* では [i], *bury* では [e] と読ませるのは、考えてみれば理不尽な話だが、初期習得語だから実害はなかろう。

* **ou, au** : *bought* [bɔ:t], *caught* [kɔ:t] など

に使われているが、母音字2つであるため、これらの語が、二重母音 [ou] を持つも思い込んでいる学習者は少なくない。

* **ear** : *tear* [tiə], *tear* [teə] の区別や *beard* [biəd] の発音にはあまり問題がないようだが、しばしば耳にするのは *learn*, *heard* などの類推であろうが、*heart*, *hearth* を [ə:] を用いて発音する誤りである。しかしこれも-ear-を [a:] と読むのはこの2語に限る、と教えておけばどうと言うことはない。

* **er** : *herd*, *merchant* などに見るとおり、[ə:] と読むのが原則だが、*sergeant* と、またイギリスではそれに加えて *clerk* が [a:] と発音される。これもこの2語のみを例外として教えればそれで済む。

* **oa** : *road*, *coat*, *moan*, *toad* 等では [ou] であるものが、*broad*, *abroad* に限って [ɔ:] になる。しかしこれまたこの2語だけに注意させればよい。

* このほかにも、*police*, *machine* の i を [i:] と発音させたり、*women* で o を [i] と読ませたり、また oo が *blood* では [ʌ], *food* では [u:], *brooch* では [ou], *hood* では [u] を表すというのは理屈からすれば怪しからん話だ。もっとも、頭の柔軟な中学生などにとってはさほどの負担とも思えないが。

2.2 子音の場合

2.2.1 重字

apple, *bubble*, *battle*, *saddle*, *buckle*, *goggle* などで同一の子音字 (c と k はこの場合同一と考える) が重ねて使われているのは一見不合理に思える。発音上は [æpl], [bʌbl] 等、1個の子音のみを表しているからである。一体に英語では、日本語・イタリア語などと違って、同一子音を重ねて発音するということは原則的でない。だから子音の面に関する限りこの重字は当を得ていない。しかしこの重字が実はその前にある母音が短母音であることを正しく示す効果を持っていることに

注目してほしい。上で述べたように1個の子音プラス1（エル）は単一の子音としか勘定されない。これは *māple*, *būgle* などが二重母音を持つことから知られよう。つまり -ppl, -ggl と書くことによって初めてそれぞれ2個の子音字と同じ資格を得ることからなのである。

動詞の過去形や現在分詞、形容詞の比較・最上級、更にはさまざまな派生形を書くときに、元の形の最後の子音字を1つにするか2つに重ねるべきかに迷う学習者があれば、この理屈を説明してやればよかろう。*wrapped* では p を重ねないと a が二重母音に読まれて *raped* と同発音になってしまふが *wipe* の i は過去形になっても二重母音を表すのだから p は1つでよいこと、*sweet* の母音はもともと長母音だから比較級は *sweeter* でよいが *hot* の比較級を **hoter* にすると [hóutə] と読まれてしまうから *hotter* とせねばならぬこと、*greed+y* と *mud+dy* の違いも同様であること、等である。

2.2.2 黙字

Wednesday の d とか *answer* の w など、黙字の中には語源と結び付ける場合を除けば役に立たぬものも多いが、なかには知識増強のきっかけとして働き得るものもある。

knight の k は *night* との表意文字的区别に役立つだけかも知れないが、*know* の k は *acknowledge* で、*autumn* や *condemn* の一見無駄な n は *autumnal*, *codemnation* では立派に発音されることを説いてやったり、*sign* や *design* の g が *signature* や *designation* では決して黙字ではなく、それはちょうど *Christ* や *fast* の t が *Christmas*, *fasten* で黙字と化してしまうのと逆の関係であることなど教えてやれば、これが刺戟となって語彙が増大し、なかには *gnostic*, *diagnosis*, *paradigm*, *paradigmatic* などという大層な単語まで覚えこんでしまう生徒が出てこないとも限らない。

3. 単語の強勢

2音節以上の単語のどこにも最も強い強勢が来

るかということは、昔から英語の学習者を悩ませてきた問題である。しかし強勢の位置も、つづり字からかなりの程度正確に知ることができるとすれば、この知識を学習に利用しない法はないであろう。

3.1 うしろからの吟味

単語というものは、いうまでもなく頭から先に読んで行くものである。ところが英単語の場合、ひょこの雌雄鑑別ではないが、おしりの方からつづりを吟味してゆくと強勢位置が突き止められる。まず3音節以上の語から考えてみよう。

盟邦に敬意を表して *América* という単語を例にとろう。この語は「①最後の音節の母音が短母音で②最後から2番目の音節も短母音を持ち③その2つの音節を隔てる子音字が1つだけである」というつづり字上の特徴を持っている。こうした単語はうしろから3番目の音節に強勢を持つ。ほかにも例はいやすべてある。*cíntima*, *aspáragus*, *élegant*, *rígorous* 等がそれである。

最後の2つの音節を隔てる子音字が2つ(以上)あったらどうか？ その場合は強勢は終わりから2つ目の音節に来る。*veránda*, *appéndix*, *relúctant*, *intérpret* がその例だ。面白いのは中を隔てるものが子音「字」でさえあればよい、と言う点だ。*vanílla*, *spaghétti*, *Mississíppi* の ll, tt, pp のように実際に1音しか表していないものでも、ちゃんと直前の音節に強勢が来るということを教えている。これもつづり字の効用である。

álgebra, *recálcitrant*, *chívalrous* では最後とその前の音節が br, tr, lr という2子音字で隔てられているのにどうして後ろから2番目に強勢が来ないか？ 2つの子音字の2番目が l, r の時は1つに勘定する、というのがここでも生きているわけだ。ついでながら2つ目の子音が w である時も同じことが起こる。*cónsequent*, *éloquence*などを見るとよい。(これらの語では qu が kw を表しているわけである。)

では最後の音節は短母音でも、終わりから2番目の音節が長(二重)母音を持っていればどうな

る？この場合も *aréna*, *aróma*, *desírous*, *adjá-cent* が示すとおり、最後から 2 番目の音節に強勢が来る。

今までの例では最後の音節はいずれも短母音だった。それならば最終音節が長（二重）母音だったら？その時はまさしくその最終母音に強勢が来ることになる。*magazíne*, *serenáde*, *chimpanzée* などがその例である。

3.2 2 音節語

2 音節語の場合も、3 音節以上の語の約束事をそのまま当てはめればいいのである。まず、最終音節に長（二重）母音がある時は、やはりその音節に強勢が来る。*paráde*, *decíde*, *sincére* 等が示すとおりである。それから最終音節は短母音だが終わりから 2 番目の音節（ということは頭から数えた場合の第 1 音節ということにほかならないが）に長（二重）母音があったり、2 つの音節を隔てる子音字が 2 つ以上あった場合は、同じくその音節に強勢を持つ。*sôda*, *bêaver*, *bâcon*, *lêgal*, *cêrtain*, *câter*, *lôiter*; *mémber*, *cânter*, *vúlgar*, *hândsome*, *câncel*, *hândle* 等がその例である。

問題であるかに見えるのが *America*, *camera* 等に対応する 2 音節語だ。つまり両音節とも短母音を持ち、かつそれを隔てる子音字が 1 つ、という場合である。3 音節語の場合に準じて最後から 3 つ目の音節、といったってそんなものが 2 音節語にあるはずがない。しかし、である。3 つ目の音節に強勢が行こうとしても行けず、無理に行こうとすれば転げ落ちてしまうからやむを得ず 2 番目に踏みとどまるのだ、と考えればよいではないか。そうすれば *mérit*, *hâbit*, *sólid*, *hónest*, *púnish*, *lâvish* 等の説明がつく。

3.3 hurricane ほか

次にあげる単語は、3 音節（以上）であり、かつ、最後の音節に長（二重）母音を持ちながら、3.1 で触れた *magazine* などとは違って後ろから

3 番目の音節に最も強い強勢が来ている。

húrricane, *ánecdote*, *insínuate*, *pédigree*, *éxercise*, *solídfy*, *irrésolute*, *érudite*

実を言えば、3 音節（以上の）語で最終音節に長（二重）母音を持つ語の中では、上記 *hurricane* 類の方が圧倒的に多く、*magazine* 型はむしろ少數派なのである。それならば何故 *magazine* 型を先に取り上げたのか、という問い合わせに対するように答えるのが適切であろうかと思う。「*hurricane* 型の語の最終音節にも確かに強勢があるので、英語という言語はどういうわけか 3 音節（以上）の単語の最終音節に最強の強勢が来るのをあまり好まないので、より強い強勢を終わりから 3 番目の音節に新たに置くのである」と。（*magazine* 型はいわばこの調整措置に乗りそなった時代おくれのグループと言うことになる。）その証拠に、*hurricane* 型の語の最終音節にはいわゆる第二強勢なるものがあり、この点で *cinema*, *asparagus*, *elegant* 等と異なる。もっともこのような説明法は、本誌の読者向けのもので、初学者にはあくまでも *hurricane* 型を主流なものとして教え、*magazine* 類は例外として提示する方が望ましいだろう。事実、*mágazine* という発音も存在する。

-ate で終わる 3 音節（以上）の動詞は、圧倒的にすぐ上に述べた「調整措置」にしたがって後ろから 3 番目の音節に最大の強勢を持つ。ただし *illustrate* のような語は、最後の 2 音節同士を隔てる子音が（r を無視しても）2 個あるので、最終音節が二重母音であること除けば、*verânda*, *appéndix* の類と同じ形をしていることになる。そこで-ate 動詞の中には *íllustrate*-*illústrate*, *ínculate*-*incúlcate*, *ádumbrate*-*adúmbrate* のような強勢の揺れを示すものが若干ある。*démonstrate* は最終 2 音節の間に-nstr-を持つが、示したとおりの強勢型しか持たず、また *remónstrate* は *verânda* 型の強勢型しか持たない唯一の語である。

3.3 permit ほか

次のような動詞は3.1の原則に従えば*pérmítのように後ろから2番目の音節に強勢を持つはずだが、実際には最終音節がそれを受けている。

permít, persít, impél, exténd, remít,
resist, repél, refér, commít, consist,
compél, conténd, transmit, insist, expél,
transfér

これは残念ながらつづり字からは説明できない。しかしこれは単なる例外ではない。こうした語は per-, re-, in-, ex-, con-, trans- ; -mit, -sist, -pel, -tendなど、「独立では存在し得ない要素同士の結び付き」から成り立っているところが特徴である。この程度のこととは中・高校生に話してやってもさしたる負担にはなるまい。

3.4 「見えない」音節

次の語を眺めて見よう。

índustry, chémistry, líberty, fáculty

最後のyは厳密にいえば母音字ではないが、これらの語では[i]を表している。するとこれらは、最終音節も最後から2番目の音節も、ともに短母音を持ち、かつ両者を隔てて-str-, -rt-など2つ(以上)の子音があるので、veránda, appéndix等と同じ音節構造を持っていることになる。それなのに*indústry, *chemistryのような強勢配分(これは実のところ日本人學習者がしばしばおかず誤りでもある)を受けないのはどういうわけか?

ここで、最後の-yは強勢配分に関する限り「見えない」のだ、つまりいわば「無視」されるのだと考えてみる。そうすると industr-, chemistr-, libert-という形を後ろから吟味して行くことになる。となるとこれらはhónest, chémist, Róbertと並行するものとなり、正しい強勢配分が無事に説明される。

つぎに-oryという語尾を持った語を考えてみる。この中でも、compúlsory, advísory, intro-

dúctory, refráctory, illúsoryなどは-oryのoで表された母音が短母音なので、yを無視してもしなくても正しい強勢が得られる。無視すれば compulsor-, advísor-などの形で吟味することになるが、最後から2番目の音節が2子音(-ls-, -ct-)でつぎの音節と隔てられていたり、あるいは長(二重)母音(-í-, -ü-)を持っていたりするのでその音節に強勢が来るし、無視しなければyから数えて3番目の音節に来るのだから同じ結果となる。

anticipatōry, discriminatōry, confiscatōry, compénsatōryなどになると、-oryのoが二重母音なので、-yを無視せざるを得ない。そうしないと*anticipatōryになってしまふ。おまけに-yを無視しただけでは足りない。anticipatōr-という形を吟味し、ひとまず-or-に強勢を与え、húrricaneの場合と同じように2つ前の音節により強い強勢を与えようすると、*anticípatatoryになってしまふ。この際-at-部分も「見えない」ことにしなければならない。そうすれば-tic-, -crim-の部分が2つ前、つまり最後から3つ目ということになり、最初の2語については正しい結果が得られる。

ところがこれで行くと*cónfiscatory, *cóm pensatoryが生じてしまう。これを防ぐには「より強い」強勢を置く位置を hurricaneの場合のように単純に最後から3番目としないで、Américaとverándaを区別した時と同じく、最後から2番目の音節が-cip-, -min-のように短母音のあの子音が1つだけの時はもう1つ前、つまり最後から3番目に置き、-fisc-, -pens-のように2子音が続くときはその音節に置く、と考えれば統一的な説明が可能になる。

3.5 紙幅に余る事柄

つづり字と強勢位置の関係については、このほか、equíp, attáckなどの動詞やdiréct, robústなどの形容詞が何故第一音節に強勢を持たないか、

(p.53へ続く)

フォニックスの理念

——この当然のことへのアプローチ——

若林俊輔

なぜいまさらフォニックスなのか

近年、どういうわけか、そして、いまさらのように、「フォニックス」ということばが英語教育界に登場して、何となくもてはやされている。「もてはやされている」と言ったけれども、「フォニックス」つまり「英語のつづりとつづりが表わす発音との関係を押えた、語の読み方の教授法」が何故に今ごろになって、にわかにもてはやされ始めているのか、私には、本当は、理由がわからないのである。だから「どういうわけか」と書いた。

英語のつづりが発音を表わしていることは、何も今さら言うまでもないことであろう。英語に限らない。ドイツ語でも、フランス語でも、スペイン語・ポルトガル語・イタリア語、そもそもギリシア語・ラテン語からして、つづりは発音を表わしている。何もヨーロッパ語を引き合いに出すまでもない、朝鮮語のハングルも同じである。モンゴル文字も同様。日本語の片仮名・平仮名も同じく発音を表わしている。「はつおん」というつづりは〔ハツオン〕という発音を表わしている。

そもそも、文字というものは、もともと発音を表わすために作られたものである。発音を、手書きの記号を用いて他に伝えるために考案されたものが「文字」である。文字そのものを芸術化したものに書道があるが、当面、これは議論の対象から除く。

不幸なことに、日本語で用いられる漢字は、ひとつの漢字が表わす意味の領域がそれほど多様でもないので、その発音の仕方があまりに多様になっている。理由はわかっている。その発祥地である中国での漢字の発音と、その漢字の表わす意味

をヤマトコトバに翻訳したときの発音とが、複雑に入り交じっているからである。たとえば「日」。「元旦」「大相撲初日」「年月日」「月日は百代の過客にして」「火曜日」「五月二日」、これに「一月一日」が加わり、はては「今日(キヨウ)」「昨日(キノウ)」「明後日(アサッテ)」「日下(クサカ)」という姓まで加わると、これでは、文字の表わす「音」について不信感が募るのも無理はないと言える。文字が発音を表わすなどということはどうしても信じられなくなるであろう。

そこへ、英語のつづりについての変な話が輸入されてしまった。その典型的なものがghotiである。だれがこういうバカな話をしたかは、当面は問わないとして、ghotiはfishと発音できると、その男は言ったのである。なぜならば、enough, women, nationの下線部分の表わす発音を集めるとghotiはfishと読める、というのである。バカバカしいではないか。そもそも、英語には、iで終る単語はないのである。(hiとラテン語由来の語あるいはskiなどは別として)。ghotiは、英語のつづりの不規則性を強調するための典型的な例であった。

文字は「判じもの」ではない

英語のつづりが、かりに不規則であるとしよう。では、そのnative-speakersは、つづりをどのように読んでいるのか。アテもなくただアテズッポウに読んでいるのであろうか。そんなはずはない。アテズッポウでしか読めないつづりであるならば、それは、単なる「判じもの」にすぎないことになる。「文字」の役割を果すことができない。日本語における「日」にしても、これが表わす発音の複

雑さは気が狂うほどであるが、しかし、そこに全くルールがないわけではない。不規則に見えるかもしれない。それは、ただ不規則に見えるだけであって、もしルールがなければ、その「つづり」を書いた本人以外には読めないはずである。英語のつづりは読める。なぜなら、英語のつづりにはルールがあるからである。ghotiなどといふ加減なものではない。

一つの言語社会において、その社会における言語に関する共通ルールがなければ、その言語社会は成立しない。これは、自明の理である。「フォニックス」は、この点に着眼したものにすぎない。あたりまえのことをあたりまえに論じているにすぎないのである。だから私は「いまさらのように」と書いた。

フォニックスなどといふものは、けっして新しくも何ともない。昔から、英語のつづりが発音を表わしていることはわかっていた。たとえば、1902(明治35)年に出版された R.B.McKerrow・片山寛の『英語発音学』(上田屋書店)がそれである。今から80年以上も前である。次は、同書のpp.101-102からの引用である。

凡そ e なる語尾を有する詞は其 e の前に父音字の (r 及び v を除く) 存する場合には其前の母音字は字母音 (*Alphabetic Sound*) と称する音を生ず、即ち *Alphabet* に於て其有する名と同一の音なり、(之を長音と称することあり)、若し詞が一個以上の連字より成る時は第二の連字が強勢を有する場合にのみ比規則を適用することを得、即ち

a	は	ei
e	は	ij
i, y	は	aj
o	は	ou
u	は	juw (又 l, r, j の後に在れば uw) の音を生ず、故に下の二欄を比較せよ。
cane	kein	と can kæn
theme	pjm	と them ðem

fine	fain	と	fin	fin
hope	houp	と	hop	hop
use	juws	と	us	as

猶其他の長音の例を挙ぐれば下の如し。

name, came, lame, late, fate, lake, cake; eve, concrete, pipe, wine, vine, white; rope, smoke, note; duke, tune, June, lute.

下の諸詞は例外とす。

move muvv, bade bæd, sate sæt, come kem, some sem, done dən, one wan, gone gon, shone ʃon, 及び其複合辞 become, remove 等。

初めのほうにある「父音字」というのは、現在では「子音字」と呼ばれているものである。昔は、音とか字は「父母」であったが、昭和初年のころからなぜか「母子」になってしまった、というおもしろいことがある。

さて、上の引用のことばが難しいのは仕方がないであろう。なにしろ明治時代の本である。また、一般の人々を対象にした本ではないということもある。しかし、ここで述べられていることは、まさに「フォニックス」そのものである。そのフォニックスが、なぜか、今もてはやされ始めている。ということは、つまり、いつかある時期にこのフォニックスの考え方が消滅したのである。ある一時期にフォニックスが消滅して、その後になってやはり「フォニックス」がいいということになって、要するに「復活」した。Resurrectionである。ということで、もてはやされている、らしい。

ここで考えなければならないのは、何故に「フォニックス」が復活したのかという、その理由であろう。いや、話は逆であるかもしれない。つまり、「フォニックス」をある一時期につぶしたのは一体何であったのかということである。

困った存在としての発音記号

その「時期」は大正末年から現在までの60年以上にわたる長期間である。その期間は、「発音記号全盛時代」とでも呼ぶべきであろう。この「発音

記号全盛時代」は、「英語のつづりは発音を表わさない」という、言ってみれば「信仰」、さらに言えば「迷信」、もっとあからさまに言えば「無知蒙昧」の状態を作ってしまった。英語のつづりが発音を表わしているということは当然のことであるのに、英語のつづりは発音記号がないと読めないと、まさに「無知蒙昧」の状況を作ってしまった。

発音記号は、「音声学」にとって不可欠の道具である。音声学を展開するためには発音記号はなくてはならない。しかし、その発音記号が「外国語教育」に有効であるかどうかは、また別の問題である。このあたりの基本的な点検が行なわれないまま、ghoti にだまされて発音記号を英語教育に導入してしまったところに英語教育の悲劇がある。

発音記号は、音声学にとって不可欠な道具であるが、一般の英語学習者にとっては、何が何だかわからない存在なのである、ということをわかってほしい。例を示す。

(1) : yet	[jet]	
	jet	[dʒet]
(2) : oat	[out]	
	out	[aut]
		auto [ɔ:tou]
(3) : mile	[mail]	
	mail	[meil]

[jet] と jet, [out] と out, [mail] と mail の読みわけが、ちょっと教わっただけでスラスラできるなどというのは、これは非常に異常な能力の持ち主にちがいない。こういう混乱を起こさせるよりも、素直につづりをそのまま読む能力を身に付けさせたほうが、はるかに「教育的」である。

私と発音記号とフォニックス

私は、昭和 19 年（太平洋戦争中である）に中学生になって、英語の時間に先ず最初に習ったのは「発音記号」であった。単語カードを作って、表には「絵」（たとえば「ワシ」の絵）を書き、裏に

は [i:g] といったような発音記号を書いた。ずっと後になって、この方法は「フォネティック・メソッド」と呼ばれるものであることを知ったのだが、これは中学生であった私には関係がない。中学生である私は、教科書で pen という単語の右隣りに [pen] という発音記号がある理由がわからなかつた。pen が読めなければ [pen] も読めない。[pen] が読めなければ pen も読めない。読めないもの同士が隣り合っていて、どうして読めるのであろうか。私たまたま pen が読めた。だから [pen] も読めた。おかげで「デキル」生徒であった。これは、ある意味での偶然にすぎない。要するに、私は偶然によって救われただけの話である。

つづりを読むのに発音記号などは不要なのだなと思ったのは、大学 1 年生でフランス語を習ったときであった。先生は「つづりのとおり読めばよろしいのである。」とおっしゃった。そして、それはいくつかの例外を除けば、まさにそのとおりであった。たとえば gateau は、そのつづりどおり [gato] と読めばいい。eau を [o], oi を [wa] と発音することがわかれば、eau de toilette（化粧水）の発音の仕方などもの数ではない。

偶然のことながら、私の「発音記号不要論」の基礎を作ってくれたものに「聖書」がある。大学 1 年生になった年（昭和 25 年。あの、日本という国がどこまでも貧しかったあのころ）の冬、おそらく年末であったろう。東京・新宿駅の東口。夕暮れの寒風の中で「聖書」を売っている青年がいた。私と同じように貧しかった、少なくともそう見えた。どういうわけか、私は、小学校 3 年生のころから、どういうわけか我が家にあった「旧訳聖書」を、何ということではなくときどき開いて読んでいたということがあって、おそらく、大学で「聖書」の授業があったことと、学生になったのだから少しは真面目に聖書を英語で読んでみようと思ったこともあったであろう。新宿駅東口のあの薄暮のなかで、私は、1 冊の英語の「聖書」を買い求めたのであった。この青年とどういうことばを交わしたのか、全く覚えていない。おそらく何も言わなかったのであろう。いくら払ったのか

も覚えていない。その当時、30円という金額がおそらく学生の1日の生活を支えていた、という記憶しかない。まさか、百円は払っていないであろう。

さて、「聖書」と「発音記号不要論」の話をしなければならない。話は簡単である。私は、diacritical marks（発音区分符号）の存在を知ったのである。たちまち体得（納得）したのが、長音符号（~），短音符号（-），弱音符号（'）の3つであった——余談だが、この弱音符号を使うときに、小文字のiの「点」が邪魔で困った。このことが契機になって、のちに、iの「点」はこの文字にとつて不可欠な要素ではないことを知ることになった。テストなどで、iの「点」を打ちそこなったからといって減点するなどは言語道断なのである。

POD の発音表記法

長音符号と短音符号のことは、しばらくして、*The Pocket Oxford Dictionary*にも説明があることを知った。該当する部分を POD の初版（1924）から引用しておく。

PHONETIC SCHEME

Consonants: b; ch (*chin*); d; dh (*dhe=the*) ; g (*go*); h; j; k; l; m; n; ng (*sing*); n̩g (*finger*) ; p; r; s (*siɒp*); sh (*ship*); t; th (*thin*); v; w; y; z; zh (*vizhn*).

Vowels:

ā ē ī ō ū ūō (mate mete mite mote mute moot)
ā ē ī ō ū ūō (rack reck rick rock ruck rook)
ār ēr īr ōr ūr (mare mere mire more mure)
ār ēr ūr (part pert port)
ah aw oi oor ow owr (bah bawl boil boor brow bower)

不思議なことに、この版ではfが抜けている。さて、この方式は原則的にずっと守られて第6版（1978）に至っている。第6版の該当箇所は次のとおりである。

Consonants: b; ch (*chin*); d; dh (*dhěn=then*); f;

g (*got*); h; j; k; l; m; n; ū (French nasal; grah̩n̩d=g̩rande); ng (*sing*); n̩g (*finger*); p; r; s; sh (*shɪp*); t; th (*thin*); v; w; y; z; zh (*vī'zhon=vision*); x (Scots etc.; lōx=loch) .

Vowels:

ā ē ī ō ū ūō (fate meet bite goat boot due)

ā ē ī ō ū ūō (fat met bit got book dug)

ār ēr īr ūr (fare fear fire pure)

ār ēr ūr (far fur port)

ah aw oi oor ow owr (bah paw boil poor brow sour)

a e i o u (ago token basin flagon bonus)
er (baker)

ちなみに、現行版のPODは第7版（1984）であるが、この版から、2音節以上の語のほとんどに「発音記号」を slashes（//）の中に入れて示すようにしてしまった。私はこれをPODの堕落であるとひどく嘆いている。恐らくもっとも売れゆきのいい日本というマーケットを意識したのであろう（つまり日本では「発音記号」のない辞書は売れない、ことになっている）と、ブツブツ言っている。

「弱音符号」のことだが、PODでは、第6版からの引用の下から2行目を見ればわかるように、これをイタリック体で表わしている。私が入手した「聖書」（The Authorized Version）では、これを前述のように上付きの点（dot）で表わしていた。これは私にとっては非常に便利なものだった。たとえば次のようになる。

(1)ágō tōk én bāsin flágón bōnús

(2)t ēl' éphōne īntéresting cōlóny dēmōcracy
Amérīca

強勢符号（'）は、必要があれば強音節の後ろに書き込む。私は、学生時代にこの方式を用いて、初めて接する単語の発音を教科書に鉛筆で書き込んだ。何しろ中学校1年生から英語で用いる発音記号を叩き込まれていたから、発音記号で新出単語の発音を書くことには不自由しなかったが、使

ってみると、macron(̄), breve(̄), dot(̄)のほうがはるかに手軽で、教科書の紙面も汚れない。——と言うのにはちょっとした理由がある。ノートを作るなど面倒で仕方がなかったのである。私はノート作りが今でも大嫌いである。何でも教科書に書き込んでそれで終りとするという、言つてみれば、私は、ノート指導の好きな先生に言わせれば、どうにも仕様のない学生であった。とにかく3つの符号で(時にはもうひとつ「強勢符号」を加えて)それで発音は済んでしまう。便利この上もない。鉛筆の磨り減る量も少なくなった——貧乏学生の私にとっては、実にうれしいことであった。教科書の余白に発音記号を書く必要はなくなった。教科書の余白は、発音以外の必要情報を書き込むスペースになった。私は今でも、教科書の余白はメモを書き込むために存在するのである、などと学生に言っている。

やがて、その3つの符号を使っているうちに、これさえも不要なのではないかと思うようになった。 \bar{a} =ai, ayとか \bar{e} =ee, eaとかを覚えれば、何もいちいち書き直し(respelling)の必要はないと思うようになった。またしても、PODがそのことを教えてくれた。第6版から、このことに関連する部分を引用する。

some letters and combinations have special values:

$ae=\bar{e}$ (ae'ḡis), $ai=\bar{a}$ (pain), $air=\bar{a}r$ (fair), $au=aw$ (maul), $aur=\bar{o}r$ (dīnosaur), $ay=\bar{a}$ (say), c before e or i or y =s (ice, ci'cy, ī'cȳ, cȳ'press), c elsewhere is 'hard' and =k (cōb, crȳ, ārc), ea=ē (mean), ear=ēr (fear), ee=ē (meet), eer=ēr (beer), eu and ew=ū (feud, few), g before e or i or y=j (āge, ḡin, īr'ḡy gȳbe), g elsewhere=g (gāme, bāg, īr'gan), ie=ē (thief), ier=ēr (pier), n before 'hard' c, k, q, x=ng (zīnc, tānk, bā' nquēt, mīnx), oa=ō(boat), oar=ōr(boar), ou=ow (hound), our=owr(scour), oy=oi(boy), ph=f (phō'tō), qu=kw (quit), tion=shon (nā'tion, nă'tional), wh=w (which), x=ks (fōx);

(beginning a word) kn=n (knōt), rh and wr=r (rhȳme, wr̄st);

(ending a word) -age=īj (vī'llage), -ey=ī (dō'nkey), -le after a consonant=el (cā'ble), -ous=us (fūr'iōus), -sm=zem (spā'sm), -ture=cher (nā'ture).

当然のこととしてのフォニックス

「フォニックス」などと、いまさら特に気張つて言うほものことはないのである、本当は、フォニックスの原則は、上のPODの説明で尽きていく。あと、仮にしなければならないことがあるとすれば、この説明をわかりやすく整理して書き直すくらいのものであろう。だから、私は「何をいまさら」と何度も言う。ただ、何をいまさらと言っても、今は、熱狂的な「発音記号信仰時代」だから、つまり、英語のつづりはつづりどおり読めばいいのですよといふら言っても、ghotiに狂わされた状態が相変わらず続いているから、やはり「いまさら」かもしれないが、英語のつづりはつづりどおり読めばいいのですよ、と言い続けるしかないのであろう。

問題は、「フォニックスの『理念』」などというおおげさなものではないのである。英語の文字も文字である。「判じもの」ではない。だから、文字とは本来どういう働きをするものであるかどうかを冷静に判断すれば、簡単に得られる結論にすぎない。文字と発音の関係には一定のルールがある。文の作り方に「文法」というルールがあるのと同じである。そして、文法にも例外があるように、つづりのルールにも例外がある。文法において、例外は例外として教えられるように、つづりのルールの例外も、やはり例外として教えられなければならない。従来、つづりのルールについては、専ら例外に目が向けられてきた。テストに出されるつづりの問題は、例外的つづりの語によって組み立てられることがあまりにも多い。bread,

(p.20へ続く)

Pronunciation Notation Without Respelling

KAMINISHI Toshio

Introduction

Many attempts were made to overcome the seeming discrepancy between English spelling and pronunciation by reforming the former to conform to the latter with an expectation of orthoepic side effects. IPA can be regarded as an end-product of such attempts, and it is an irony that it has become more complex than ordinary spelling which its predecessors were envisaged to simplify, because of sophistication needed for dialectal differentiation. As it is out of the question to return to those halcyon days and accept domination of one particular dialect i.e. RP as standard, a simple and yet comprehensive notation must be established. And I think consensus about the inventory of English phonology is prerequisite and that it is possible only on the basis of ordinary spelling, for "was wirklich ist, das ist vernünftig". This is a proposal of an English Phonology Table and a case study of its adoption to notation of dictionary entry words.

The table is constructed on the principle of orthographical differentiation and some units are redundant from the strictly phonetic/phonemic point of view, e.g. the closed vowels of "e, i, u" followed by an "r" which are generally neutralized. It may be interesting to note that the brochure (1983) of Thurso, the northernmost town of Great Britain carries this, "Thurso, pronounced locally 'Thirsa', is an old and historic town." The table may seem incomplete for it lacks the velar nasal, which is treated as an allophone.

English phonology has three phenomena which

seem to defy segmental treatment: i.e. various phonetic realizations of /r/ resulting in different phonemic distribution between dialects, vowel reductions and palatalizations. Their differentiation is often said to be of minor importance, but we must spare more space for them than usual by listing many variants, if we stick to the principle of one-to-one correspondence between symbols and sound classifications, or choice must be made as to the variant to enter, which cannot be otherwise but arbitrary. When several variants are listed at individual entries, it would not be easy for a consultant to collect information as to conform to a distributional pattern at an idiolectal level, and different realizations might be chosen like /nju:z/ and /nu:d/. Besides, transcription by distinctive symbols tends to induce the learner to articulate with conscious effort which works, I'm afraid, counterproductive in the case of reduced vowels. In the scheme advocated here, they could be relegated to conventions.

Abercrombie says, "a systematic transcription really consists of two parts: the symbols in the *text*, on the one hand, and the *conventions* governing their interpretation, on the other." Though the English spelling seems to be "inconsistent, redundant and incomplete" (Wyld in *Universal Dictionary*), as the "vast majority of English words, about 90 to 95 per cent of the vocabulary, actually follow certain patterns in regard to their spelling and pronunciation" (Wijk 1965), we may well subsume it into "systematic transcription" as an extreme case "with the maximum information in the convention and the bare minimum in the symbols"

(Abercrombie), as far as the majority is concerned. When it comes to the remaining 5 to 10 per cent, we can resort to another system. And the convention or patterns built in English orthography is something really worthwhile to learn, if we want to learn the language at all. Systematic adoption of diacritical marks helps the dictionary user get accustomed to the patterns easily. They are training wheels for those who are learning to ride the bicycle. When sounds cannot be inferred from their spellings, respellings can be given, thus reinforcing the impression that the word treated has some peculiarities in terms of spelling-pronunciation relationship. These words may be called shibboleth words for they often betray foreigners who learned English in the written form first. They can be indicated as such by an asterisk to avoid respellings when the scheme is applied to the bilingual dictionaries where English is the target language. Sporadic respellings in a sentence would hinder readability. The scheme is not intended to replace phonetic symbols. It is envisaged for a different purpose and should be supplemented by or defined in terms of them when we speak of phonetic realizations.

Repeated Dichotomy

The whole system is a repeated dichotomy. First, strong syllables and weak ones. Strong syllables are syllables where the vowels retain their original values. They should not be confounded with stressed syllables. Stress or accent is essentially a key to break down an utterance into units or words. A word can have several strong syllables but has one and only one stress. In that sense, clitics are pseudo-words. Strong syllables are known either because they contain marked vowels (see below), or digraph vowels (see the table of spelling variants), or because they are stressed syllables indicated as such by an accent mark. Otherwise they are shown by a slender tick,

e.g. *ambush'*, *forecour't*', *input'*. Weak syllables are known mostly by unmarked single vowels or by specified digraphs or marked vowels. Two letters sometimes come up in the same sequence of a digraph. They could be differentiated by an elevated period but in most cases, the rhythmic pattern of English is a sufficient guide. Few people would take the "ea" of *ocean*, for example, as a strong "ea" if the initial letter "o" is marked as a macron and/or indicated accent.

The strong vowels are divided into macron ones which occur mainly in open syllables and breve ones which occur in closed syllables. They are diacritically differentiated: a macron vowel by a macron as a "vowel macron" and a breve vowel by a breve as a "vowel breve". When a vowel is weak, it is unmarked. The digraph vowels which do not occur in weak syllables and the "y" which does not get reduced often are differentiated by marking one of the macron-breve pair. The breve "ea", the breve "oo" and the macron "y" are marked, e.g. *heat*, *foot*, *fly*, *tyro*. The macron "ea", the macron "oo" and the breve "y" as well as the breve "ea" followed by a preconsonantal "r" are unmarked, e.g. *heat*, *clear*, *earth*, *moon*, *poor*, *lynx*, *myrtle*. When a vowel has a strong tertiary value, it is often relegated to respelling, e.g. the value of "o" in *wolf*, *woman* which cannot be covered by a single rule, or that of "ea" of *break*, *great*, *steak*, *yea*, and the corresponding "ear" of *bear*, *pear*, *swear*, *tear(v.)*, *wear*. This "ea" can be subsumed by employing the macron, for the other macron "ea" of *heat*, *clear* is left unmarked, but it may not be a consistent use of the mark. Another candidate is a subscript macron i.e. underline. In *SANSEIDO POCKET ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY with SELF-PRONOUNCING ENTRY WORDS* published in 1980 in which the scheme was first employed, this "ea" was respelled.

The macron and the breve vowels are again subdivided into straight and r-modified ones. R-modified vowels are modified vowels by the following

“r”. The “r” followed by a vowel or by a second “r” of the next syllable does not affect the value of the preceding vowels, e.g. *very, carry*. The rule does not apply to the second “r” caused by inflection, e.g. *inferring*. The r-modified macron vowels are marked with an extended macron: $\bar{a}\bar{r}$, $\bar{e}\bar{r}$, $\bar{i}\bar{r}$, $\bar{o}\bar{r}$, $\bar{u}\bar{r}$. The r-modified breve vowels are marked with an arc: $\widehat{a}\bar{r}$, $\widehat{e}\bar{r}$, $\widehat{i}\bar{r}$, $\widehat{o}\bar{r}$, $\widehat{u}\bar{r}$. The r-modified macron “o” is practically the same as the breve counterpart in RP but they can be different in American English, especially when restored in the penultimate syllable, e.g. *dormitory*. In American English, the pre-r straight vowels are neutralized with the r-modified counterparts in the case of the breve “u” and the breve “o”, e.g. *hurry, courage, worry, orange*.

Differentiation of Polivalent Letters

The breve “a” which is realized as an “o breve” when immediately preceded by the bilabial semi-vowel but not followed by a velar is left unmarked, e.g. *wash, quantity; warm, quarter*. This rule is a historical one, which worked when the fronting of the breve “a” was not complete. So it does not apply to recent borrowings. Some words fluctuate as in the case of *swastica* of which the earliest citation given by *OED* is dated 1871. cf *Jones's EPD 12th* and *13th*. Examples of blocking of the rule by velars: *swank, twang, wagon, quack*. The only genuine exception to the rule is *swam* which Dobson attributes to the analogy with the preterite of *begin*. How strong the rule is can be seen from the fact that some dictionaries give the value of “o breve” to the first syllable of *quango* though it has a blocking velar besides being a newly-coined word. The breve “a” taking the value of the “o breve” was represented by the same “a breve” and the same arched “ar” in *SPD*. The rule about the contextual differentiation had to be supplemented and the sequence of /w/ and the original breve “a” as in *wagon* had to be relegated to respelling by IPA symbols. A better idea would be to discriminate by

leaving the letter unmarked for the “o breve” and representing the original value by the “breve a” in any context, thus making respelling for the case of *wagon* etc. unnecessary.

The breve “a” is realized as “ah” in RP when followed by a voiceless dental or alveolar fricative and in the case of some French loan words, by the front nasal as well, e.g. *ask, after, path, advance*. The breve “a” is given this Continental value in loan words which still retain foreignness regardless of the phonetic contexts and in other dialects as well. In *SPD*, the diacritical mark of arc was employed to cover them. It would not be difficult for learners of American English to replace the arched “a” with the “a breve” appropriately.

The “o breve” followed by a voiceless fricative or a voiced velar can be realized as “aw” in some types of American English, e.g. *loft, across, long, dog*.

The “u macron” has two values in strong syllables, the front /ju:/ as in *cute* and the back /u:/ as in *flute*. The latter occurs after a liquid in RP but in American English it is more widely distributed, e.g. *acute, flute, nude, student, super*. In *SPD* the back macron “u” was marked by an arc. But because of different incidence of the values between dialects, comments on distribution were indispensable anyway. It would be more appropriate and simpler to treat it as an allophone.

The macron “ou” could be indicated by a macron but in the case of this digraph, the mark is not endoiconically self-evident. It has several values and the initial letter is strongly associated with lip-rounding because of the value of the breve “o” or the forepart of the macron “o”. The first association of the digraph is more often the value of the “o macron” than not. In *SPD*, the macron “ou” was indicated by a dotted “o”, e.g. *hōuse, ōur*. The spelling variant “ou” to the “o macron” is unmarked, e.g. *shoulder*. The spelling variant “ou” to the “oo macron” is marked by an arc, e.g. *cōugar*. The breve “ou” given in the table

as a spelling variant to the “u breve” is marked by a breve, e.g. *dōuble*. The spelling variant “ou” to the “aw” occurs in the sequence of “ough” only. The r-modified vowels of these “ou’s are contextually differentiated as *jour*, *tour*, *ourC*, e.g. *journey*, *tourism*, *court*.

The r-modified vowels of the other spelling variants except the case of “y macron” are contextually differentiated, e.g. *hear*, *heard*, *pier*, *board*, *myrtle*.

In *SPD*, the r-modified “ae” was assigned the value of the “ar macron” to account for the combining form of *aero-*. The value of the “er macron” would have been more consistent, e.g. *chimaera*, for the “ae” was subsumed with the value of the “e macron” and the “ae” with the value of the “a macron” was relegated to respelling, e.g. *blaeberry*, *brae*, *maelstrom*. The traditional method of typographical differentiation of the two “ae’s could be employed. The introduction of the ligature “æ” should be accompanied by that of the “œ” for consistency.

The “n” is realized as a velar nasal when preceding a tauto-morphemic velar stop, which, if voiced, is not realized unless followed by a tauto-morphemic vowel or sonorant: *uncle*, *young*, *angry*, *anguish*, *stronger*, *singer*, *conclude*, *engrave*. (Here the term “tauto-morphemic” was used to exclude *singer* but not *stronger*. The boundary is indiscernible in the latter.)

The “c” is soft when immediately followed by a front vowel, otherwise hard, e.g. *cent*, *cat*, *act*. A “k” must be added to retain the hard “c” in inflexions/derivations, e.g. *picnicker*. The Latin plural ending *-cae* fluctuates, probably according to whether association with the singular is retained or not, e.g. *basilica*, *-cae*; *vesica*, *-cae*.

In *SPD*, the Italian “c”, e.g. *cicerone* was subsumed by incorporating an appropriate subrule. It may be claimed that respelling it would be tantamount to designating the word as an Italian loan.

The “g” is soft when immediately followed by

a front vowel, otherwise hard, e.g. *gem*, *gum*. But the rule does not apply to Germanic words and recent borrowings from the Greek, e.g. *get*, *give*, *gynaecology*. The soft “g” is marked by a dot to cover them. The French soft “g” was subsumed in *SPD* by the same dotted “g” but the corresponding voiceless “ch” was not. For in the case of the former, French and English values are the same thing for most Japanese but that is not the case with the latter. And those who can differentiate the two soft “g’s can be expected to have enough knowledge to tell French words from others. The differentiation of the French “ch” needs to be more explicit. It is accompanied by the Continental vowel values which could be resorted to to avoid respelling. Incidentally the Continental “i” of *machine* was marked by an arc in *SPD*.

Some “o’s are remnants of an attempt to avoid “u’s in the proximity of “n, m, w”, where many minims might cause ambiguity, e.g. *son*, *some*, *love*, *wonder*. They are differentiated by a superscript dot except in the case of “wor-”.

Unmarked “o” and “u” in strong syllables should be construed as the second “o macron” and the second “u breve” respectively. Differentiation by leaving them unmarked would not give the user much difficulty, for they occur in well-known words only, e.g. *do*, *to*, *lose*, *move*; *bull*, *pull*, *bush*, *bushel*, *butcher*, *pulpit*. Anomalous cases of *tomb* (macron in a closed syllable) and *cuckoo* can be relegated to respellings. The second “u breve” may be said to be a misnomer for this is the original value of the letter, whose lip-rounding is often retained when immediately preceded by a bilabial. *Cuckoo* is a case of onomatopoeic palinogenesis. *Wolf* and *woman* can be subsumed as the case of the second “u breve”. In the case of “wor-”, the bilabial “w” was not effective.

The following spelling variants are differentiated by marks. With an “e breve”: ēi, ēy; with an “a arc” as “āl”; “gh” with a “dotted g” is /f/, e.g. *frēight*, *convēy*, *ālways*, *enough*.

The voiced “th”, “s”, “x” are differentiated by a superscript dot, e.g. *this, easy, example, anxiety*. The “x” is voiced unambiguously only when it begins a strong syllable and can be left unmarked. The initial “x” is unmarked.

The preconsonantal “ch” and the prevocalic “ch” in words of Greek origin are /k/. They are differentiated by a dotted “c”. The hard “ch” in *ache* is exceptional. According to Vallins, this was caused by the wrong etymon given by Johnson.

The following terminal double consonants should be pronounced with the value of the second letter except in the case of “-mb” and “-mn” which should be pronounced with the value of the first letter: -bt, -gm, -gn, gn-, -mb, -mn, bd-, ct-, kn-, pn-, ps-, pt-, wr-, x-, e.g. *doubt, paradigm, campaign, gnomon, bomb, autumn, bdellium, Ctenoid, knight, pneumonia, psychology, ptomain, write, xylophone*. (The initial stop of the terminal double consonants is not realized unless the second letter is a liquid, e.g. *true, plural*.) The rule of the final consonant clusters of “-mb”, “-mn” applies in prevocalic positions as well in verbal inflexions and derivations, e.g. *bomber, comber, plumber, benumbingly, damning, limner, hymning*. The boundary is shown by the otherwise redundant accent mark.

In the following, the “h” is redundant: bh, dh, ghV, kh, rh, xh, e.g. *bhang, dhole, ghost, khaki, rhombus, exhume*.

The initial non-aspirate “h”, e.g. *honour* and the redundant “w” in “wh”, e.g. *whole* were respelled in *SPD*. They could be italicized to avoid respelling. The redundant “w” of “wr-” is left unmarked.

The following combinations of letters are treated as “conventionals”, which are to be understood to represent their conventional values unless otherwise marked: alf, alm, alk, aulk, -ique, -ften, gh (sil.), oughC, -Cre, -sten, -stle, wor-, e.g. *calf, palm, talk, caulk, unique, often, night, thought, centre, listen, rustle, work*.

Geminate consonants should be pronounced as

single unless the boundary is indicated. The rule subsumes “dge”, “tch”, etc. In “dge”, the soft “g” has two markers, hence *abridg(e)ment*. “Cc” and “sc” should be construed according to the above rule of “c” differentiation, e.g. *accent, science. Soccer* and *sceptic* are exceptions.

Reduced Vowels

Some “a’s are reduced to close vowels. They are mostly in open syllables and can be realized as “a macron” when pronounced by syllable. In *SPD*, they were differentiated by the dot. The reduced close “a’s occur mainly in endings *-age, -ate, and -ace*, of which the last two fluctuate: *village, climâte, preface*. Fluctuation of *-ate* between strong and reduced values corresponds to the grammatical functions, namely different parts of speech of the words; e.g. *animate, associate*.

The unmarked final “e” is silent. The final “e” used to make a syllable together with the preceding single consonant. Hence the preceding macron vowel unless the said consonant is “v” which was a consonantal variant of “u” sometimes differentiated by its prevocalic position. The rule also applies to words with a suffix beginning with a consonant, e.g. *safety*. The muteness of the letter can be made explicit by the seat of an accent mark.

Most “e’s are reduced to close vowels. They are differentiated by the dot. Dotted “e’s do not occur in strong syllables except in the case of *prèetty* (and *England, English, etc.*) if we do not take into account fluctuating *sacrilegious* (cf. *W. Friedrich*) and prevocalic cases of *peony, idea, real, theory, theatre, etc.* In *SPD*, these prevocalic “e’s were always given as macron. In some words, the prevocalic “e” is consonantal “i”. Some medial “e’s are reduced to schwa. They are followed by a tautological “l, m, n” or “r” or adjacent to another close vowel, e.g. *cancel, problem, licence, fallen, anxiety*. Here again correspondence between values and grammatical functions, e.g. *experiment*.

Most “i”s are reduced to close vowels or remain the same breve “i”. The prevocalic unmarked “i”s are consonantal and affect the preceding alveolars but still retain the vocalic value when the following vowel is strong, e.g. *million, initial, initiate*. The macron “i” is seldom reduced. But in some types of American English which are more straightforwardly iambic, the pretonic one of “-ization” and post-tonic “-ile” preceded by a voiceless alveolar are reduced, e.g. *civilization, missile, fertile*. This “i” is left marked. In *SPD*, there was no differentiation of the breve “i” in strong syllables from that of weak syllables if it remains short and close. Both were represented by the same “i breve”.

The breve “u” is reduced to schwa and left unmarked: *minimum*. When the reduced macron “u” is front, it is marked except in the sequence of “-ure”. The “u macron” in *volume* is a reduced one hence front, but that in *absolute* is a strong one hence back. Differentiation is made by the number of syllables to separate it from the tonic one. The reduced macron “u” is back only when preceded by post-tonic consonant clusters ending in a liquid, e.g. *influence, congruence*. This is differentiated by unmarking.

The unmarked prevocalic “u” in weak syllables is /u/ in front of a weak vowel and /w/ in front of a strong vowel, e.g. *persuade, assuage, suite*, but in the combination of “gu”, it is only the designator of the hard “g” unless immediately preceded by “n”, e.g. *anguish*, and in the combination of “qu”, it is always /w/. *Anguish* can be construed to have two adjacent strong vowels because of the heavy consonant cluster to separate them. In *SPD*, the rule of the contextual differentiation of the prevocalic “u” by the strength of the following vowel was not incorporated.

The consonantal “i” and the reduced front “u macron” palatalizes the preceding alveolars and loses their distinctiveness when followed by a weak vowel but retains their values when followed by a strong vowel: *initial, question, anxious, asso-*

ciate, oceanic, casual, seizure. When the preceding consonant is a palatoalveolar, it is assimilated to it, e.g. *cushion, luncheon*. Voiced alveolars are rather resistant to palatalization. *Species* should be construed as a case of absorption of the retained “i” by the following strong vowel. In *SPD*, the word was not respelled. Respelling of a reduced vowel is a hair-splitting differentiation. And perhaps foreigners are allowed to mispronounce it like a Latin plural as given by *Kenyon & Knott*.

Some digraphs for the “a macron” are reduced to close vowels. e.g. *bargain, captain, portrait, Sunday*. Some other digraphs are reduced in word final and other post-tonic positions, e.g. *labour, enormous, mynah, chimney, dominie*.

Conclusion

Some people admit that the orthographical notation is better for a general dictionary than the IPA notation but with the reservation of “for native speakers of English”. I claim that if it has merits, they are rather for foreigners like us Japanese who learn the language in its written form first. And a good learner’s dictionary is a dictionary which leads the user to the point where he can do without it, which is difficult with an IPA notation system.

Loan words not fully Anglicized and proper names of foreign countries, e.g. geographical and personal names of international current topics which no reference book can be expected to enter are variously realized according to the speakers’ knowledge of and attitude to them. And we often know them by their native sounds through KANA transcription given by newspapers. The same is the case with Greek and Roman theological and legendary names or Hebrew names in the Bible. Their identification is often impossible without recourse to their spellings. It is not very difficult to recover original spellings in Latin alphabet from KANA transcription, for both KANA and Latin

alphabet are based on five-vowel systems, and one-to-one correspondence can be fairly well retained between them. So what we need to complete association is conversion rules between spelling and English pronunciation. And I believe they are captured in this scheme. Brook told more truth than he meant when he said, "the pronunciation of English is constantly changing and we have reason to be grateful that spelling is not constantly changing along with it." (Brook 1958)

(Sanseido Co., Ltd.)

References

- Abercrombie, D. *Studies in Phonetics and Linguistics*. Oxford: Oxford University Press, 1965.
- Bailey, Ch.-J. "Disadvantage of inadequate phonetic transcription in dialectology, phonetological explanation, and language teaching" *Wrights and Wrongs in Teaching English, A Vademecum, Arbeitspapiere zur Linguistik*. Berlin: Berlin Technische Universität, 1983.
- Barnhart, C. L. *The Second Barnhart Dictionary of New English*. New York: Clarence L. Barnhart, Inc., 1980.
- Brook, G. L. *A History of The English Language*. London: Andre Deutch, 1958.
- _____. *Varieties of English*. London: Macmillan, 1973.
- Dobson, E. J. *English Pronunciation 1500-1700*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1968.
- Ekwall, E. *History of Modern English Sounds and Morphology*. Oxford: Blackwell, 1975.
- Friedrich, W. *English Pronunciation; The Relationship between Pronunciation and Orthography*. (translated from the German by R. A. Martin) London: Longman, 1958.
- Gimson, A. C. *Everyman's English Pronouncing Dictionary*, 14th edition. London: Dent & Sons Ltd., 1977.
- _____. *An Introduction to the Pronunciation of English*, 3rd ed. London: Edward Arnold, 1980.
- Henderson, E. J. *The Indispensable Foundation, A Selection from the Writings of Henry Sweet*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- Jespersen, O. *Modern English Grammar I. (photographed edition)* Copenhagen: Ejnar Munksgaard, 1949.
- Jones, D. *An Outline of English Phonetics*, 9th ed. Cambridge: Heffer & Sons Ltd, 1960.
- _____. *Everyman's English Pronouncing Dictionary*, 12th and 13th ed. (rev. A. C. Gimson) London: Dent & Sons Ltd, 1963, 1977.
- Kenyon & Knott, T. A. *A Pronouncing Dictionary of American English*. Springfield, Mass.: G. & C. Merriam, 1944.
- Kurath "Englsih Pronunciation in The United States" *The English Language VII*, Cambridge: Cambridge University Press, 1969.
- Nuttal, P. A. *Johnson's Dictionary of English Language*. (a rebound copy lacking the title page together with the publisher's imprint, the preface is dated June 1855)
- Sanseido ed. *Sanseido Pocket English-Japanese Dictionary with Self-Pronouncing Entry Words 『表音小英和』*. Tokyo: Sanseido, 1980.
- Sechrist, R. H. "Respelling: Necessity or Boondoggle?" *Papers of DSNA* 1979.
- Sweet, H. *The Practical Study of Language*. Oxford: Oxford University Press, 1964.
- Vallins G. H. *Spelling*. London: Andre Deutch, 1965.
- Wijk, A. *Rules of Pronunciation for the English Language*. Oxford: Oxford University Press, 1966.
- _____. "Regularized English" *Alphabets for English* (ed. W. Haas) Manchester: Manchester University Press, 1969.
- Wyld, H. C. *A Short History of English*. London: John Murray, 1921.
- _____. *The University Dictionary of the English Language*. London: Routledge & Kegan Paul, 1932.

ENGLISH PHONOLOGY TABLE ON ORTHOGRAPHY

VOWELS

In Open Syllables	In Closed Syllables
a as in mate; care	a as in cap; farm also as in wash, quantity; warm, quarter Also in RP as in ask, after, path, advance
e as in eve, here	e as in bed; term
i as in fine; fire	i as in fish; bird
o as in home; shore (also as in move)	o as in hot; form (also as in son, work) Also in American English as in loft, across, dog, long
u as in cube; pure also as in flute; rural	u as in cut; turn (also as in pull)
oo as in moon, poor	oo as in book
ou as in house; hour	(ou as in double, journal)
ah as in Fahrenheit aw as in draw oi as voice, coir	

CONSONANTS

Voiceless Consonants	Voiced Consonants	Sonorants	Aspirates
p as in pin	b as in big		
t as in top	d as in dog		
k as in kind	g as in good		
ch as in cheese	j as in jam		
f as in fox	v as in vine		
th as in thing	th as in this		
s as in sun	z as in zone		
sh as in shoe	z+ as in zure+		
		l as in luck m as in man n as in nose r as in road w as in word y as in year	h as in head wh as in wheel

VOWEL SPELLING VARIANTS

open a/ aim, air; say; freight; convey great*, wear*	
open e/ caecum, chimaera; heat, clear; deed, beer; receive; key; brief, pier; coelacanth	closed e/ head, earth
open i/ fly, tyro; height; eye	closed i/ lynx, myrtle
open o/ boat, board; folk; soul, court; know	
open u/ neutral, sleuth, Europe, pleura; dew, crew; nuisance, fruit	closed u/ son, work; double, journey
open oo/ you, tour; move	closed oo/ pull
open ou/ now, dowry	
ah/ laager, aardvaak; calf; palm aw/ always; talk; launch, dinosaur; thought oi/ boy	

CONSONANT SPELLING VARIANTS

k/ cat; character; quiet	
ch/ (hitch), celestial*	j/ gymnasium; (bridge); verdure*
f/ enough; philosophy.	
s/ ice	z/ easy; execute
sh/ schilling; sensure*; initial*	z*/ vision*
w/ anguish; quick, persuade	

*Palatalization. Not to be segmentally represented.

* Shibboleth. Analogy should not be made on these.

アメリカの人種と民族 (18)

國弘正雄

今回もアメリカンインディアンについて書かせてもらいます。一説によると 136 もあるといわれるアメリカの ethnic groups をとり上げようすれば、その 1つについてこんな手間暇かけていては、往々道なお進まず、というか前途遼遠の思いに胸がふさがる気分です。

でも従来のアメリカ論、いやアメリカ人種民族論の中で、インディアンが不当に低くしか評価されてこなかった、ときとしては完全にネグレートされたことを思うと、せめてものことに本稿でその imbalance を正したかったのです。ご諒承下さい。

インディアンにはハゲがない

最初に 2 つほど、インディアンについての、全くうちもないステロタイプをご紹介しておきます。ステロタイプの常として、はたして本当にそうであるかどうかは証明のかぎりではないのですが、そういう神話というか lore が存在することだけは確かです。

その 1 つはインディアンにはハゲがない、という神話 (!?) です。有名な身の上相談女史—advice columnist とか lovelorn columnist とか申します—が読者との間でかわしたやりとりから採りました。

ご用とお急ぎでない方は、この罪のない——ただしヒューモラスこの上ない——質疑応答をお愉しみください。

なおいくつかの手紙を纏めて面倒を見てしまい

本号の用例

- hair on the chest
- apache dance
- Chrokee alphabet
- Comanche Indian
- Mohican
- Navavos

ますので不悪。

A reader wrote to ask why American Indians never lost their hair. Since I couldn't recall ever having seen a bald-headed Indian, I asked my readers to please send me a picture of one—if indeed one existed. Needless to say I received pictures of enough bald and balding Indians to populate a resevation.

Dear Abby : Well, you asked for it. I am enclosing a picture of a bald Indian. My husband. He is "Chief Deon"—a full-blooded Sioux, born on a reservation in Pine Ridge. S.D., in 1899. He claims he lost his hair because he put too much bear grease on it when he was young. (Mrs. R. P. Deon. Ogden. Utah)

Dear Abby : Well, you can stop your search for bald Indians. There aren't any. Where I was raised there were more Indians than whites, and I can't recall ever seeing a bald Indian. It's just characteristic of their race. Nobody ever saw an Indian with hair on his chest either. (A White From Walla-Walla)

Dear Abby : I have no picture to send you, but I give you my word that I have seen a bald-headed Indian. He was a full-blooded Choctaw from Oklahoma. We met at Alcatraz many years ago when he was doing life plus ninety-nine years. At that time he was only twenty-seven years old, and he was bald ! (Charlie in Jacksonville)

Dear Abby : I hear you're looking for bald Indian. Well, Sam Churchill up in Yakima, Wash., did a little research for you.

According to him, Indian Agency Superintendent Bill Schlick says he has never seen a bald Indian and he has dealt with thousands of In-

dians, including Colville and Warm Springs tribe members. Bill's secretary, Ethel Mae Chase, reported on the Klamath Indians in northern California and Oregon — no baldies there. Schilick's assistant, Barney Dunn, backs up both Bill and Ethel Mae. Dunn (part Sioux himself) is getting a little thin on top, but says that's because he's short on Indian blood. If I round up any more information, I will write. (Your Yakima Correspondent)

Dear Correspondent: Better yet, send smoke signals!

(Abigail Van Buren: *The Best of Dear Abby*, pp. 150-151)

(大意：読者の1人がなぜインディアンは髪の毛がなくならないのかを訊ねてみました。私自身、ハゲたインディアンに出会った記憶がないものですから、もしそういう人がいたらぜひ証拠の写真を送ってくれるようにと依頼したのです。果せるかな完全にハゲた、もしくはハゲかかっているインディアンの写真が寄せられました。あまり多すぎて居留地の1つが一杯になる程の数でした。

デビー小母さん：ご依頼ですから、ハゲのインディアンの写真を同封します。この人は私の夫で、1899年に南ダコタ州のパインリッジ居留地で生まれた純血のスー族で、デオン酋長として知られています。若いときにクマの油を塗りすぎてすっかりハゲてしまったというのが本人の言い分です。(R.P. ディオン, ユタ州オグデン市在住)

デビー小母さん：ハゲのインディアン探しなんて止めた方がいいよ。ぼくの育ったところでは、白人よりもインディアンの方が多かったんだけど、ただの一人として、ハゲたインディアンは見なかつたな。大体、人種的なものなんだよ。胸毛のあるインディアンも見ないものね。(ワラワラ居住の一白人より)

デビー小母さん：写真は送れないんだけどハゲのインディアンを見たことだけは神に誓って本当だ。オクラホマの純血のチョクトー族だった。そいつに会ったのはアルカトラス監獄でだったが、終身刑プラス99年の刑を受けお勤めしていた。27才だっていうのに、ハゲてたんだ。(ジャクソンビル居住のチャーリーより)

デビー小母さん：ハゲのインディアンを探しているんですね。実はワシントン州ヤキマのサム・チャーチルが一寸した調べものを作ってくれたんです。

彼に拵ると、インディアン局のビル・シュリック部長という人は、コルビル族やウォームスプリングズ族を含めて何万人ものインディアンを取り扱ったのに、ただの

1人のハゲたインディアンにも出くわさなかった、と言っているそうです。

またエセル・メケ・チェイスという彼の秘書もカリフオルニアの北部とオレゴン州のクラマス族について、1人もハゲはいなかったと報告しています。シュリック氏の補佐のバーニー・ダンも2人の発言の通りだといっています。ダンには少しスー族の血が混っていて、てっぺんの部分が少し薄くなりつつあるんですが、それはインディアンの血の割合が少ないからなんだそうです。もし何かこれ以上の情報があれば、また手紙で知らせます。(ヤキマ在住のアビー特派員より)

特派員どの：それよりも、煙で信号してよ。

いかがでしたか。天下泰平といえばこの上なく天下泰平ですが、多人種多民族国家ならではの人間的風景ではありますね。日本では一寸考えられぬやりとりです。もっともアメリカインディアンの平均寿命は43歳ときわめて低く、このことがハゲたインディアンが少ないと主張する理由かも知れませんね。なにしろ彼らは貧しいのです。

なお上記の応酬の中にいくつかのインディアンの部族の名前が出てきましたが、これ以後でまとめて列挙します。またreservations(居留地)についても取り上げるつもりです。他方、男性ホルモンが多いとハゲになりやすいという説はアメリカでも行なわれており、ハゲにならなければその不足の故で、だから胸毛がないのだ、という話にもなるのです。

hair on the chest

アメリカではhair on the chestといいうのが男らしさ(manliness)の象徴とみられており、たとえばミルクを嫌がる男の子に呑ませようとする際などに“It will grow hair on your chest.”などという位です。

以下は男らしさの象徴としての胸毛を示す例。前後関係がなくて少し判りにくいかも。

A cold eye, that manager, “Is something unsatisfactory?”

“Man here asked the price of one of the specials.”

That's the waiter talking. “Act tough. Brazen it out. Hair-on-the-chest stuff.”

(*The New York Times* : May 15, 1981)

(冷たい目をしてマネジャーは「何か文句あるのかね」と聞く。

「このお客様がある特別料理の値段を聞いたんです」とウェイター。

「へこたれちゃダメだ。堂々と構えなくちゃ、一人前の男なんだろう、お前は。」)

ハゲがない、ということからすると男らしさに欠けるとみなされかねないインディアンですが、インディアンの男子は性的に女性を歓ばす秘法を知っている、といういま一つのステロタイプもきわめて普通です。

同じ身の上相談女史の本から引かせてもらいます。

Well, there you have it. Are there really fewer baldies among the Indians? I still have reservations about that, but "Ed in East Illinois" raises another question concerning the American Indian male. Is it true that he's a better lover than the white man?

Dear Abby: I am a thirty-five-year-old man who's in love with a beautiful, twenty-eight divorcee. I want to marry her, but she keeps wanting more time to think it over.

In the meantime, she's seeing another man, and I'm afraid he has the edge on me. You see, he's part Kichapoo Indian, and I hear Indians are superior to the white man when it comes to lovemaking: Closely guarded tribal secrets on how to satisfy a woman are passed down from father to son. If there is any truth to that, I'm willing to pay whatever is necessary to find out.

Let me say that I was married for four years and I never had any complaints from my wife, but if Indians are better lovers than white men I would like to find out why.

Maybe your readers can help. Thank you. (Ed in East Illinois)

Dear Ed: I wouldn't touch your request with a ten-foot **totem pole**. Try the Bureau of Indian Affairs or the American Indian Movement.

A number of readers, however, responded pro and con. Perhaps I was conned by a couple of pros, but these letters made my day.

Dear Abby: This is for "Ed," who lost his girlfriend to an American Indian because Indians were supposed to be better lovers than white men.

Ed had heard that closely guarded tribal secrets on how to please a woman were passed from father to son. I'm an attractive divorcee living in San Francisco and teaching in a nearby university. I've had highly touted Italian lovers, black lovers, and even an Asian lover whom I met at the Hong Kong Hilton (he was a lawyer from Wyoming). In addition to the above, while visiting Mount Rushmore I met a tall, handsome Indian from a tribe near Rapid City, S.D. He was a good lover but no better than the others. But he was exceptionally gentle.

No one ethnic group holds the secrets to superior lovemaking. The best lover I ever had was an American-Scotch-Irish-English—whom I met in Louisville, Kentucky, at the Kentucky Derby. (Buy American)

Dear Abby: The American Indian has it all over the white man when it comes to loving. Ask any squaw who is familiar with the "Apache Grip" or the "Kickapoo Twist." (Minne Ha Ha)

(大意: というわけなんですが、本当にハゲているインディアンというのは少ないんでしょうか。私にはまだ疑問があるんですが、次の「イリノイ東部のエド」の手紙は、インディアンの男性について別の問題を提起しました。白人の男性よりもセックスに長けている、というのは本当か、という疑問です。

アビー小母さん: 僕はいま35歳、28歳の美人の離婚した女性に惚れているんです。僕としては結婚したいんですが、彼女の方がもう少し考えさせてほしいっていうんです。

その間、彼女は僕以外の男性とも会ってまして、どうもこっちは敵わないんです。その男性はキカブー・インディアンの血が入ってるんですが、セックスということになると、インディアンの方が白人よりまさっている、というでしょう。どうしたら女性を歓ばせることができるかについての秘法があって、父親から息子に代々引き継がれているっていうじゃありませんか。

もしそれが本当なら、いくらお金を積んでもいいから手にいれたいのです。

ついでにいいますが、僕は4年間の結婚生活の間で、

ワイフからこの点で苦情を聞かされたことは一度もなかったんです。でももしインディアンの方が達者だとうなら、なぜかを調べたいんです。

読者の皆さんからなにかあるかもね。ありがとう。

エドに：あなたの要請には 10 フィートのトーテムポールででもさわりたくないわ。政府のインディアン局か、それともインディアンの地位向上を目指す市民団体の AIM にでも訊ねてみたら。

でもたくさんの賛否両論の手紙が読者から寄せられました。2 通ほどの賛成意見にはほとんど言いくるめられただけに、次のような手紙を頂くと勇気百倍です。

デビー小母さん：これは白人よりもセックスが上手ということで、アメリカ・インディアンに恋人をとられちゃったエドへの返事です。

どうしたら女性を歓ばせることができるかについての父子相伝の秘法があるということを聞いたわけね。

私はサンフランシスコに住んでいる魅力のある離婚中の女性で、近くの大学で教えています。私、いままでに前評判の高いイタリー系や黒人の恋人を何人かもつたし、アジア系の恋人も 1 人いたわ。この人とは香港ヒルトンで会ったんですが、ワイオミング州に住む弁護士なの。

それ以外に、例のアッショア山に見物に行ったとき、南ダコタのラピッドシティの近くの部族出身の背の高いハンサムなインディアンに出会ったことがあるわ。この人、確かに上手かったけど、他の人たちと比べて際立って上手だったというわけじゃなくってよ。でもものすごくやさしかったのは確かだわ。

ある民族集団が何か秘法をもっていて、セックスの技倆にとくに優れているっていうことはなくてよ。私にとって最高だったのは、ケンタッキー・ダービーのときにハイビルで会ったスコットランド・アイルランド・イギリスの血を引くれっきとしたアメリカ人だったんですもの。

(アメリカ品受好者)

デビー小母さん：セックスに関してはインディアンの方が白人より上ですって。

アバッチ・グリップやキカブー・トイストに詳しいインディアン女性に聞いてみるとことね。(ミニ・ハ・ハ)

なお上記の用例中、totem pole とは北米インディアンが、自分たちの部族と血縁関係があると考えて崇拜する動物もしくは自然物——これを totem と申します——を彫刻もしくは彩色した柱のこと、自分の家の前に飾ります。この totem いう言葉自身が、インディアンの言葉で、親類を指します。

この totem pole は社会階層などの意味で比喩的に用いられることが多く、これはまたいざれ別途にいくつかの用例をあげて解説します。

他方、Minni Ha Ha というのは、詳しくはこの投書者にたずねてみないと判然とはしませんが、例の H. W. Longfellow の有名な作品 *Hiawatha* に出てくる Minnehaha——笑う水という意味の一族の言葉——をもじったものであるのは明白です。この Minnehaha を記念した同名の公園が、ミネソタ州のミネアポリスにあり、ハイアワサとミネハハの像があることで知られています。(ミネは水の意)

この程度の漫文ですら、キチンと読みこもうとすれば、文学史を含めてアメリカ文化全般についての一通りの知識が不可欠なことがこれではっきりします。

一方、squaw というのはアメリカ・インディアンの婦人のこと、俗語としては婦人一般を指します。

* * *

いかがでしたか。

いささか下世話かつ下ネタにすぎて、本誌のような生真面目な専門誌にはふさわしくなかったのでは、という怕れも禁じえぬのですが、いまの平均的アメリカ人の生活意識を垣間見る上で、あわせて彼らの言語生活の実態をのぞく上で、love-lorn columnists の書きものは恰好の原資料なのです。ご諒承下さい。

さてここでお約束のアメリカ・インディアンの各部族について、文化の型による六つの大分類を描いた地図をご紹介することで説明します。

この中には西部劇で有名な Apache (Village Dwellers の一員) や Commanche (Hunters of the Plains の一員), Cheyenne (同じく Hunters) や Cherokee (Indians of the Eastern Woodlands の一員) なども記載されていますが、それ以外に皆さんにとっては初耳の部族名も少なくないのではないでしょうか。

でもその多くはアメリカ人にとってはほぼ常識化していますので、できるだけ親しんでいただきたいと思います。

ここでいま列挙したインディアンの部族のほんの一部について、アメリカの ephemeral literature の中から手頃な用例をご紹介しておきます。

Ephemeral literature とお断わりしたわけは、例えば北東部の Iroquois 族などは、ニューヨーク州内の五部族で同盟を形成、17世紀から18世紀にかけてはメキシコ以北で最も強力な同盟関係を打ち樹てたほか、かの L. H. Morgan の不朽の名著『古代社会』(1877) の素材を提供した例があるわけで、そういった専門的な言及は本稿では省くことにしているからです。なおモルガンの『古代社会』がマルクスに巨大な影響を与えたことは、周知の事実です。

また potlatch についても触れねことにします。これはチヌーク語から英語入りした言葉で、クワキュートール族やトリンギット族などの間で行なわれる互恵的交換つまりは贈り物のやりとりを指します。人類学や社会学のテキストにはよく出てくる術語で、転じて祝宴とかパーティの意味で使われることもままありますが、口語的用法の後者の ephemeral literature の適例がいまのところ見つかっていませんので、残念ながら省かせてもら

います。

会話ではよく耳にするんですが、まだ ephemeral な印刷媒体でお目にかかるに至っていないからです。ただし読者の皆さんにはぜひ覚えていただきたい言葉です。

apache dance

最初は Apache 族を名指した例。最もこの文派では別にアパッチ族に限らずに、Indian という普遍的な形容詞で置き換えが可能と思われます。

Vivian slowly sent a cloud of smoke from her mouth and nose, while she and Shorty gazed into each other's eyes. Shorty lit his own cigarette, gave a vigorous shake of his wrist, and carelessly tossed the match aside. It seemed likely that at any moment they would go into an apache dance.

(Kathleen Windsor: *America, With Love*, p. 58)

(大意：ビビアンは口と鼻からゆっくりと煙草の煙を吐き出した。その間、彼女とショーティーとはお互いの目をのぞきこんでいた。次にショーティーが自分の煙草に火を付け、手首を激しく一振りし、マッチを無難作にわきに投げた。いつアパッチ族のダンスさながらの修羅場が



(Emerson M. Brooks : *The Growth of a Nation*, p. 21)

おこってもおかしくなかった。)

やや意識しましたが、要は大立ちまわり、ほどの気持ちです。

Chrokee alphabet

次はアルファベット順でチエロキー族に関する一節を。彼らが決して無文字——non-literate もしくは unlettered などと文化人類学では申します——な存在ではなかったことを示す用例です。When they came to the Indian Territory a century and a half ago, the tribes brought with them their sophisticated civilization: Schools, churches, colleges, hospitals, even lunatic asylums. One Indian, Sequoyah, had developed the **Chrokee alphabet** — the only person ever to singlehandedly invent a complete written language. In Oklahoma, Indians built cotton plantations — some with slaves — and farms and towns. Some tribes had their own laws courts and prisons.

(U. S. News & World Report : Jan. 28, 1980, p.51)

(大意：1世紀半ほど前にインディアン準州にやって来た彼らは、すでに高度な文明を携えていた。初等学校や教会、高等教育の学校や病院、それに精神病者用の施設までが揃っていたのである。

セコイアというインディアンのごときはチエロキー・アルファベットと呼ばれる書き言葉まで作り上げていたが、これは単独で表記法を完成した唯一の例である。

オクラホマでは、彼らは綿のプランテーションを開き奴隸を使う場合もあったほか、農場や町を作り上げた。自分たちの法律や裁判所それに監獄をもつ部族もあった。)

なお the Indian Territory がその後昇格して、オクラホマ州になったことを思うと、「その後オ克拉ホマ州になるに及んで」とでも訳すほうがずっとよいかも知れませんね。

Comanche Indian

次は同じくアルファベット順で Comanche 族についての用例を一つ。

As soon as possible I removed her to the delivery room, feeling like a culprit when her parents implored me to save their child even at the

expense of the baby's life if necessary. When I handed a whopper of a girl, yelling like a **Comanche Indian**, to the nurses, my heart dropped to my shoes. How could I ever pass off that bouncer, with her operatic voice, for an underdone, frail, seven-month infant? When my interns and nurses saw the luxuriant growth of hair, the length of the finger nails, the symmetrical robust body, and heard the powerful contralto voice, there seemed to be a certain atmosphere of doubt about my diagnosis.

(Joseph A. Jerger: *Doctor—Here's Your Hat!* p. 202)

(大意：できるだけ早く私は妊婦を分娩室に移した。最悪の場合には赤ん坊の命を犠牲にしてもよいかから、どうか母親の命だけは救ってほしいと彼女の両親に懇願され、犯罪者のような気分だった。

ところが取り上げた赤ん坊ときたらすごく元気のよい子で、まるでコマンチ族のような泣き叫んでいたが、この子を看護婦に手渡したときには私の気分はすっかり悴れてしまった。

こんなにも動きまわり、オペラさながらの大聲をはり上げる赤ん坊を、月足らずの弱々しい未熟児と誤診してしまったんだろうか。

インターンや看護婦にしてみても、ふさふさとした髪の毛や、まとうな長さの指の爪や、きっちと対照的な健康そうな身体を目の前にし、高く力づよい泣き声を耳にしては、果たして先生の診立ては正しかったんだろうか、という疑いの思いが立ちのぼってきているかのごくであった。)

どうやら診立て違いだった、というわけです。なおここでも別に Comanche である必要はないのでして、Apache でも Chrokee でも、一向に構わないわけです。要するにインディアンというのは大声を出す存在、というのが白人の対インディアン観なのですね。インディアンにしてみれば憤懣やるかたないのである。

Mohican

次はモヒカン刈りなど、最近日本でも流行の髪かたちで知られるモヒカン族に関する用例です。

Mark Coonradt's own ancestry says much about the kind of America that gives him pride. The name is Dutch. One forebear sailed up the Hudson with Peter Stuyvesant and settled

down to marry a **Mohican** maiden.

James Fenimore Cooper, you had it wrong.

In San Francisco, the **Mohicans** are still going strong, though you might say this particular descendent is one of a kind.

(*San Francisco Progress*: Oct. 3, 1979)

(大意：マーク・コーンラート自身の先祖は、彼がなぜアメリカを誇りに思うかについて、多くを物語る。名前はオランダ系で、先祖の一人はハドソン川と同じオランダ仲間のかのピーター・ステュベサンとさかのぼり、モヒカン族の娘さんと結婚した。

『モヒカン族の最後』を書いた作家のジェイムス・フェニモア・クーパーさん、あなたは間違っていました。

なぜって、ここサンフランシスコではモヒカン族はけっこ盛んにやっているんですね。最もこのモヒカンの末裔は、かなり水増しされたいい加減なものだと主張するかもしれないが。)

The Last of the Mohicans がクーパー（1789—1851）の傑作の一つであることはご存じの通りです。モヒカン——Mahicanとも繰ります——は最後どころか、ということですね。

Navajos

最後はナバホ族についての用例を。なおプエブロ族も顔を出します。

As with most collectibles, buying Indian weaving requires background knowledge. Part of the attraction for aficionados is that learning about the blankets and rugs means learning about the history of a fascinating people and of the development of the American Southwest. The saga of the **Navajos** is the story of a people who survived only through self-pride and the ability to absorb the lessons of alien cultures; to adapt and improve on what they learned while still managing to retain their own individuality.

The **Navajos** learned to weave from their neighbours, the **Pueblos**, but they changed the craft in two significant ways. The **Pueblos** used yarn made from the cotton they grew in their fields, and their weavers were men. The **Navajos**, borrowing from the Spanish settlers who were encroaching on their land, began to raise sheep to provide food and clothing, they use the wool for their looms. Since men considered tending sheep beneath them, the job fell to

the women, along with the weaving. To this day, only **Navajo** women tend the sheep, shear, card, spin and dye the wool and weave it into rugs.

(*The Robb Report*: July 1984, p.44 & p.47)

(大意：なんの蒐集でもそうだが、インディアンの織物を買うときにも背景知識が欠かせない。好事家にとってこたえられぬ魅力の一つは、彼らの毛布や敷物について知ることは、同時に魅力的な民族とアメリカ西南部の発展の歴史について知ることを意味する。ナバホ族の伝説は、自恃の精神と他文化の受容によってのみ生き永らえることを得た人々の生活史である。自らの個性を守りつつ、しかも他文化に適応し改良を加えていったのが彼らだったからである。

ナバホが織り方を身につけたのは隣人のプエブロ族からであった。ただ2つの重要な点で手を加えた。1つはプエブロは植えつけた綿花から直接糸をつむぎ、しかも織り手は男性だった。それにひきかえナバホは近くに迫りつつあったスペイン人から、食料並びに衣料用に羊を飼うことを身につけ、羊毛を織物に使ったのである。羊を飼うことなど面目にかかるとしたナバホであつてみれば、その仕事は当然女性のものとなった。織ること自体についても同様である。

そういうおかけで、今日に至るまで、羊を飼い、毛を刈り、梳き、つむぎ、毛糸の色染めをし、ラグに織るのは、ナバホの女性なのである。)

ではまた次号でお目にかかります。

(東京国際大学教授)

河村重治郎と『クラウン英和』

小島 義郎

『クラウン』という名の辞典

現在「クラウン」という名のついた英和、和英辞書が5点ある。すなわち、

『新クラウン英和』(第4版)

『カレッジクラウン英和』(第2版)

『初級クラウン英和』(第6版)

『初級クラウン和英』(第4版)

『新クラウン和英』(第5版)

で、いずれも三省堂発行である。以上の中で今回のテーマ河村重治郎に係わるものは最初の4点であって、『新クラウン和英』は元一橋大学教授故山田和男編である。

「クラウン」という名は大正以来三省堂の英語教科書・参考書のトレード・ネームであって、これは1916年(大正5年)神田乃武を編者として三省堂から発行され一世を風靡した『カング・クラウン・リーダー』(後に『キングズ・クラウン・リーダー』)に由来する。河村の辞書は学習辞典であったために「クラウン」の名を冠することになり、山田和男の『和英』はその姉妹篇として位置づけられたのでやはり「クラウン」と呼ばれることになったのであろう。

河村が世を去ったのは1974年(昭和49年)であり、実際に本人が手を下した版は、『新クラウン英和』が第3版(1972年)まで、『カレッジクラウン』が初版(1964年)のみ、『初級クラウン英和』が第4版(1971年)まで、『初級クラウン和英』が第2版(1972年)までである。河村は以上のほかにも研究社の『新英和大辞典』(3版、1953年;4版1960年)(以下『英大』と略す。)の編集主幹をつとめ、また同社の『新リトル英和辞典』も執筆し、三省堂の『初級コンサイス和英』も編集しているが、何と言っても河村重治郎の名を高からしめたものは『クラウン英和』とそのシリーズである。

るから、小論ではそれに焦点をしづって、生前本人が手を下した範囲の版に限って述べることにする。

苦学力行の士

三省堂から田島伸悟著『英語名人河村重治郎』(三省堂選書96、1983年)という伝記が出版されている。著者田島伸悟氏は昭和35年以来河村に懇望されてその辞書編集のスタッフに加わった人である。河村の生涯の細かい点については同書を参照していただくとして、ここでは河村について特記すべきことを一、二あげることにする。まず第一に、彼は家庭の都合で旧制中学を5年生の半ばで中退し、あとはすべて教員検定試験によって教員資格を得た苦学力行の士であったことである。

河村重治郎は1887年(明治20年)秋田市に生まれ、1900年(明治33年)秋田中学に入学、1904年(明治37年)一家が上京するに際して同中学を5年生で退学している。上京2年後の明治39年には小学校教員検定試験に合格、東京府小学校専科(英語)教員免許を取得、さらに2年後の明治41年には、中等教員検定試験を受けて中等教員免許を得て聖学院中学校教諭となった。それから数年後の1911年(明治44年)に懇望されて福井県立福井中学校に奉職、1924年(大正13年)まで13年間在職している。県立福井中学(現藤島高校)は県下きっての名門校で、学歴なく検定試験によって資格を得た河村をその人物・学力を見抜いて引っ張った異例の人事は当時の福井中学校長の慧眼と言わなくてはならない。

福井在任の13年間は河村にとって非常に充実した期間であったようで、結婚して家庭を持ち、研究・教育に精を出した。1920年(大正9年)32歳の時には第1回高等教員検定試験の難関を突破

し、30名中6名という数少ない合格者に名を連ねている。

戦前には、学歴はなくとも教員検定試験に合格して教員になる道が開かれており、苦学力行の士がかなりいた。そのような人たちの学力はすばらしいもので、ただ漫然と学校を出た人たちよりもはるかにすぐれた教師が多かった。教員検定試験の中でも大正9年から始まった高等教員試験は難関であった。小学校の学歴しかない人でも、ただ1回の試験に合格しただけで旧制高等学校、すなわち現在の大学教養課程の先生になれるのであるから難かしいのは当然と言えるかもしれないが、これに独学で合格するのは並たいていの勉強ではなかったであろう。戦前の高等教員試験合格者の中には後に名を成した学者がたくさんいたことがそれを証明している。因みに、後に河村の片腕となつて辞書編集に携わった元東洋大学教授吉川美夫氏もその一人である。吉川氏は福井のキリスト教会主催の夜間英語学校で河村の教えを受け、その才能を認められて河村の推薦を受けて福井中学教諭となり、後に旧制富山高校、新制富山大学の教授を経て東洋大学教授となったが、彼も河村同様、小学校、中学校の教員検定を経て第3回高等教員試験に合格している。

河村は1924年（大正13年）に福井中学を辞し横浜高商（現横浜国大経済学部）教授となり、太平洋戦争末期の1944年（昭和19年）まで20年間在職した。戦後は一時善隣外事専門学校教授を勤めたほかは、二、三の非常勤講師をしただけで専ら辞書編集に没頭した。

ところで、教員検定に合格した人々の学力が優れていることは前述したが、同時に彼らが学校教育を受けなかつたための欠点について指摘する声がないわけではなかった。また欠点ではないが、とくに独学で高等教員試験に合格して、旧制高等学校・専門学校教員になった人の場合は人脈のつながりがないという不利な点があった。たとえば何か助力のいる仕事をしようとする場合、英文科を担当している場合は弟子の養成ができるからよいが、そうでない場合には恩師や先輩・後輩とのつながりがないために人集めに苦労したのである。河村もその悩みを味わつたと思われる。吉川美夫

氏は福井の夜間英語学校での教え子であり、就職の世話もした関係でつながりが深いが、その他の協力者たちはいろいろ苦労して集めたらしい。1935年（昭和10年）発行の『学生英和辞典』以来河村の辞書編集に重要な役割を果し、その後は『新クラウン英和』第4版の増補を担当した横浜国立大学名誉教授沢崎九二三氏は、田島氏の伝記によると、昭和5年の高等教員試験合格者の名簿の中から選ばれ、突然協力依頼の手紙を受けとつたとある。（なお、沢崎氏は独学ではなく、昭和2年に東京外国语学校英語科を卒業している。）伝記の著者田島伸悟氏は自分の関係した教会の牧師の紹介を通して協力を依頼されている。

学習辞書名人

河村について特記すべき第2の点は、彼が辞書の中でもとくに学習辞典に対して強い執念を持っていたことである。これなくしては『クラウン英和』シリーズはあれほどファンをひきつけることはなかつたであろう。伝記の著者田島氏はその表題で彼に「英語名人」というタイトルを与えていたが私はもう一つ「学習辞書名人」というタイトルを送りたい。

河村が手がけた辞書は横浜高商に赴任して間もなく執筆者として参加した研究社『英大』（初版、俗に言う『岡倉英和』1927年〔昭和2年〕）をはじめ、同辞典第3版、第4版の編集主幹、研究社『リトル英和辞典』（第2版、第3版）など学習辞典以外のものもあるが、彼の興味の中心は『学生英和辞典』（三省堂、1935年〔昭和10年〕）、『クラウン英和辞典』（三省堂、1939年〔昭和14年〕）、『新クラウン英和辞典』（初版、三省堂、1954年〔昭和29年〕）。昭和14年版の復興版をはじめ、初級用を含む学習辞典のシリーズであったと思われる。

では河村が考えていた学習辞典とはどういうものであったのだろうか。この点について昭和29年の『新クラウン英和』（初版）の「はしがき」から引用すると、

「編者がここに学習辞典と呼ぶものは、英単語に対して单なる日本語訳を与えるいわゆる英和辞典ではなく、なお進んで言葉の下にひそむ言語的または文化的内容を理解せしめ、学習者

の真の教養に資すると共に、言語の運用面においても、豊富な用例の学習によって学力の確実な基礎を礎くことを目標として編集された辞書という意味である。」

とある。また、昭和14年の『クラウン英和』の「緒言」には、

「既ち重要基本語に就いてはスペースを惜しまず例句例文を豊富にしてその真の用法を解明せんとし、又単に訳語のみでは理解不充分と思はれる場合には懇切なる説明を附記し、説明を以ってしても尚真義不明の惧ある場合には本社が苦心蒐集した多数の挿絵を以て之を補ひ、只管学生諸子の徹底的理解を念願したのである。」と記されている。この『クラウン英和』は三省堂編輯所編纂となっていて、河村の名ははしがきの中に出るだけで表面には出ていないが、おそらくこのくだりは彼が原稿を書いたか、彼の案をもとにしたものと思われる。

ついでながら、戦前はもちろん、つい最近まで日本の辞書界には封建的な色彩が残っていて、編集関係者名のあげ方も実際の仕事をする、しないにかかわらず学会の大物を表面に出し、それ以外の人はどれほど献身的な努力をしようと、はしがきの中に謝辞とともに小さく名前が載るだけであった。そして大物ではない人物が編集した辞書は「…社編集部編」という形で出版され、中心的人物でさえも名前が表に出ることはなかった。戦後の復興版『新クラウン』はやっと「河村重治郎編」となったが、昭和14年の『クラウン英和』では河村も裏方役の悲哀を味わったことであろう。この点、欧米の辞書は格段に進歩している。たいていの辞書には編者をはじめ、すべてのスタッフの名が内扉に余すところなく記されている。最近では我国でも、次第に欧米式になってきたのは喜ばしい。責任の所在を明らかにし、各人に誇りを持たせなくてはよい辞書の仕事はできない。

さて、河村が学習辞典について言っていること、すなわち「言葉の下にひそむ言語的または文化的内容を理解」させるとか「重要基本語に就いてはスペースを惜しまず」ということは現在にも通じる学習辞典編集の大切な基本である。では河村はこれをどのように実現させたのであろうか。詳し

くは後述するが、彼はすべてを「用例を豊富にする」という一点に集約したのである。

また彼は昭和29年の復興版のはしがきの中で、「学生相手の小辞典ではあるけれども…」と書き、自らの辞書を「小辞典」と呼んでいる。これはどういう意味であろうか。ちょうど研究社『英大』(3版)の編集を終ったところで、大辞典と比較しての謙遜や自嘲の言葉ともとれないことはないが、もっと他の意味がくみとれるように思う。田島氏は伝記の中で、河村が研究社の『英大』をよく「中辞典」と呼んでいたこと、そして彼のいう大辞典とはOEDのようなものをいうのだということを書いている(p.108)。おそらく彼はそれを口ぐせのように田島氏はじめ周囲の人々に言っていたのであろう。この彼の言葉をもっと敷衍して言えば英和辞典は実用的なものであるから大きくても中辞典程度でよい。中辞典ならばもっと学習的配慮があるべきだ。ところが現実の『英大』の編集は彼の意のとおりにならなかった。それならば、たとえ「学生相手の小辞典ではあるけれども」もとと学習上の配慮を施した理想に近いものを作ろうということではなかったろうか。世の中には学習辞典は一般向け辞典より一段低い程度のもので、片手間でも作れると思っている人がいる。しかし、河村にはそのような考えが毛頭あろうはずがなかった。彼に言わせれば英和辞典のような二国語辞典はすべて学習辞典であらねばならなかった。その信念を実践するためには自分で思う存分采配の振れる辞書作りをしてみたかったのであろう。彼が3版にひき続き『英大』4版の改訂作業を当初は固辞した(結局名前は載ることになったが)理由は不明と田島氏は書いているが(p.107)私の推測では『英大』より『新クラウン英和』改訂の方にずっと大きな興味があったからだと思う。『英和大辞典』の編集主幹を断わって「小辞典」作りを選ぶというところに「学習辞書名人河村重治郎」の面目躍如たるものがあると思う。

『クラウン英和辞典』

『クラウン英和』が出版されたのは日中事変がますます拡大し、ヨーロッパでは第2次大戦の火の手があがった1939年(昭和14年)であった。

河村は大正 13 年に横浜高商教授として上京してから『岡倉英和』の執筆を手はじめに、教科書・参考書などを毎年 2, 3 点ずつ作るという多忙な生活を送っていたが、1935 年(昭和 10 年)に中学低学年生対象の『学生英和辞典』(三省堂)を出版した。これがなかなか評判がよく、版を重ねたので、彼が宿願としていた中学上級向けの学習辞典を作る決心をし、沢崎九二三、増野肇(元早大教授)両氏の助力を得て編集を開始した。

この辞典の最大の特徴はそれまで存在しなかった中級学習英和辞典をめざしたことである。

『クラウン英和』の 2 年後にはやはり中級学習辞典を意図した、岩崎民平編『簡約英和辞典』(研究社、1941 年〔昭和 16 年〕)が出ている。中級学習辞典は戦後昭和 30 年代後半から高校生数の激増に伴ってどっと現れるのであるが、上記 2 点の辞書はまさにそのはしりと言ってよい。それまでの学習辞典は、たとえば岡倉由三郎編『スクール英和』(研究社、1929 年〔昭和 4 年〕)のようにみな初級用であって、中学 2, 3 年以上になると、大辞典や齊藤秀三郎の『英和中辞典』(日英社、1915 年〔大正 4 年〕), あるいは『新コンサイス英和』などの一般用辞典を使わなくてはならなかった。

『クラウン英和』は総ページ 1,458 ページの机上版で見出し語 28,050 語、見出し語数は現在の中級学習辞典から見ればやや少ないが、『学生英和』の 9,650 語に比べれば約 3 倍である。これによって 1 冊の辞書で中学入学から卒業までをカバーしようとしたのであるが、学習辞典というものはあまり幅の広いレベルを対象とするとうまくゆかない。そのことを河村もよく承知していたようで、別に付録の小辞典を作つて、それには中学 1 年用の 600 語を収めてある。また、巻末に付録の『和英辞典』が付いているのが特徴で、これは河村のいう「英和辞典と結びつけた学習上の新方法」を提供するためであった。この和英辞典は訳語が列挙してあるだけの簡単なもので、必ず英和辞典でもう一度ひき直すようにとの注意が添えてある。

本辞典の記述上の大きな特徴は、用例中心主義の編集ということである。次に本辞典の how の一部を示す。

how [hau] 副①どんな風に、どんな方法で、どうして——*how to read* 如何に読むべきか、どう読んだらよいか、読方；*how to write* 如何に書くべきか、どう書いたらよいか、書方；*how to sing* 歌ひ方；*how to run* 走り方。
How do you make it?

君はどうしてそれを作りますか。
How do I look with this hat on?

この帽子を被つたら私はどんな風に見えますか。
Tell me how you did it.

君はどうしてそれをやったか話して下さい。
How did it happen?

どうしてそれは起こったのか。

(以下略)

用例中心主義とは単に用例の数が多いという意味ではない。用例に大きな解説の任務を負わせるということである。上の how の項は語義に続いてまずイタリック体のフレーズの用例があり、その後に一つ一つ改行した用例が語義の⑤までの間に 37 個続く。そして語義欄はそれぞれ訳語を 1~3 個並べただけの簡単なものである。もちろん必要最小限の語法・文法説明は、付けてあるが、それも、

②どれだけ…, 如何に…, 何と…。
☞この場合は後に形容詞か副詞が来る。

という程度の簡単なものである。いま、比較のために、同じ how の項を『簡約英和』(昭和 16 年)から一部ひいてみよう。

how [hau] I ad. [成句は C を見よ。A [疑問詞] 1 [様子・方法を問ふ] a どんな風に、如何に, (=in what manner or way); どうして, 如何にして, どんな手段・方法で (=by what means) : *How shall I do it?* どんな風にしたらよいですか; *How is the country looking?* 田舎はどんな様子ですか; *How was she dressed?* 彼女はどんな服装をしてゐたか; *How is he getting on?* 彼はどんな暮らしをしてゐますか; (以下略)

『簡約英和』は上に見るように、語義を I, II, A, B, 1, 2, a, b などのように精密に下位区分し、説明を付け、訳語もかなり多く並べ、一部は双解式にもなっている。『簡約英和』のこの項の用例は、I (ad.) の部分だけで合計 31 個ある。『クラウン英和』が 37 個であるから、大差はない。『簡約英和』も用例を重視していることはもちろんであるが、その記述法は『クラウン英和』と大いに異なっている。『簡約英和』では語義の区分、説明、訳語などにかなりのスペースを使っているのに対して、『クラウン英和』では語義の区分も簡単で、各語義の訳語も 3 個以内で、語法・文法の説明も少なく、「疑問詞」という表示さえもないことに驚く。(これは他の疑問詞も同様。) その代り、用例は実にもったいないと思うほどスペースを余して一つずつ改行し、いわば舞台正面に据えてある感じである。なるべく訳語や解説を少くして、その代りにできるだけ多くの用例を載せて用例にすべてを説明させるというのが河村の用例中心主義と言ってよいであろう。この傾向は戦後昭和 29 年の復興版『新クラウン英和』には一層顕著に現われる。

なお、『クラウン英和』では fish knife, finger bowl, revolver などのような文化的な語彙項目、動植物名、歴史的、地理的固有名詞などは違った扱いを受けており、多くは挿絵(写真も使われている)とともにかなり詳しい説明が付いていることも付け加えておきたい。

『新クラウン英和辞典』

昭和 14 年版の『クラウン英和』が復興版『新クラウン英和』として再び日の目を見るに至ったのは、講和条約も結ばれ、日本が 4 等国ながら、やっと一人歩きできるようになった昭和 29 年のことであった。『クラウン英和』出版より 15 年の歳月が流れていたが、「戦災で版を失なった」(『新クラウン英和』はしがき) ということであれば致し方のないことである。敗戦の年昭和 20 年から昭和 25 年までの間は戦後の混乱期であるから、英語辞書界も空白期で研究社の『ポケット英和辞典』(1947 年〔昭和 22 年〕) を除けばほとんど見るべき出版物はない。昭和 26 年から 30 年代の前半に

かけてやっと本格的な改訂版や新企画が出始めた。たとえば、三省堂からは『最新コンサイス』の英和・和英が昭和 26 年、27 年に相ついで出版され、昭和 28 年には河村が編集主幹となった研究社『英大』第 3 版、昭和 31 年には研究社『新簡約英和辞典』が出版されている。そういう中で『新クラウン英和』の復興版が出されたのである。

昭和 14 年の『クラウン英和』は机上版であったが、『新クラウン』は縦 18 センチ、横 10 センチ、総ページ 1,436 ページ(付録の『和英辞典』70 ページ、不規則動詞表 6 ページを含む)の小型携帯版である。しかし、決して内容の記述が減ったわけではなかった。それどころか記述量はかなり増えていると思われる。それにはいろいろの工夫がなされたようである。たとえば、昭和 14 年版では各ページの行数が 53 行であったものを、55 行に増やした。ただし各行の字数は 3 字ずつ減っている。また 1 文ごとに改行していた用例をすべて追いこみにしてスペースを確保したのが大きい。河村はできることならこれはやりたくない気持であったろう。昭和 14 年版では総見出し語数の 10 分の 1 に当たる 2,560 語に付いていた挿絵をかなり減らした。

このように苦心さんたんの上捻り出したスペースを使って河村はその用例中心主義の信念を完遂すべく用例を増やした。次にいくつかの見出し語について、『クラウン英和』と『新クラウン英和』シリーズ(3 版まで)の用例数を比べてみよう。(成句部分は除く。)

見出し語	版	『クラウン 英和』	『新クラウン』		
			(初)	(再)	(3 版)
accommodate		7	9	11	11
howl		9	7	7	5
interfere		3	7	7	7
may		14	28	28	28
smile		11	14	12	14
take		78	106	106	107

平均するとかなりの増加である。中には、“howl”的ように減っているものもあるが、これはもと“howl”的項に入っていた“howling”を別見出しとしたためである。また単に用例を付け加えた

だけでなく、入れかえも行なっているが、だいたいにおいて旧版の用例がそのまま残されているケースが多い。とくに『新クラウン』の再版（1964年〔昭和39年〕），3版（1972年〔昭和47年〕）は、新語に関する項目などは別として、そう大きな変化はないと見てよい。

ところで、河村の考えていた用例中心主義は昭和20年代から30年代にかけての英語教育の考え方方にぴったり合ったものであった。大正末期にHarold E. Palmer (1877-1949) によって我国にもたらされたオーラル・メソッドは、戦後Charles C. Fries (1887-1967) のオーラル・アプローチに置きかえられていたが、元来この二つの教授法はそう大きな違いのあるものではない。いずれも習慣形成理論にもとづくものであり、英語教育はまず模倣・記憶練習から始まり、条件反射の起こる点まで練習によって高めてゆくというものである。したがってなるべく多くの英文を記憶させることで重視された。またオーラル・メソッドを通じて、文脈(context)を重視するイギリス学派の考え方も我国に大きな影響を与えた。そういうことから、言葉の意味は文脈によって決まるものであり、辞書はOEDのように用例中心であるべきだということが、多くの英語教師に共通した考え方だったのである。このこと自体は現在でも真理であるし、変わっていない。しかし、その後いわゆる情報化時代と呼ばれる時代がやってきて、辞書にも用例以外にできるだけ多くの情報を載せるべきであり、とくに学習辞書の場合は懇切丁寧な情報の提供が必要だというように考え方方が変わってきたのである。

しかし、当時は河村の用例中心主義、すなわち語義、訳語などをできるだけ抑え、注釈も最少限にとどめて、ひたすら用例による説明に徹する方法が、英語教師たちにはまさに理想的な学習辞書と映ったのである。『新クラウン英和』は大へんなヒットとなり、クラウン時代とも呼ばれる盛況を示したのである。しかし、その後、上述したように世の中が情報化時代に移り、昭和42年の研究社『英和中辞典』を皮切りに情報満載主義の辞典が続々と現われ、その波に押されて『新クラウン英和』の影は次第に薄れてゆくことになった。時代

の流れに逆らうことができないのは世の常であるが、今あらためて『新クラウン英和』の初版を眺めてみて、その出来栄えには敬服する。たとえば、handの項には

hand [haend] *n* ①手。②人手、働き手、人。③時計の針 ④(美術品などに現われる)手並み、手際；筆跡 (以下略、用例略)

と簡単な語義があるほかはすべてが用例である。一見何でもないようであるが、ここまで抑えて語義を書くのはなかなか難しい。辞書の執筆者というものはえてしてごたごたたくさん書きたくなるものなのである。河村は主な原稿はみな自分で書いたと思われるが、まさに学習辞書名人の名人芸と言つてよい。

その他の学習辞書について

河村が手がけた学習辞書には『学生英和辞典』(1935年〔昭和10年〕)を発展させた『初級クラウン英和』『初級クラウン和英』があるが、特筆すべきは中・上級向け学習辞典『カレッジクラウン英和辞典』(初版1964年〔昭和39年〕)である。見出し語10万のこの辞典は『新クラウン』の用例中心主義をもう一段上の段階の学習者向けに応用了した辞典と言える。河村が中心人物ではあったが、編集は大塚高信、吉川美夫との共編となっている。今回は『クラウン英和』『新クラウン英和』を中心に述べたので、詳細は割愛する。

(早稲田大学教授)

〔参考文献〕

田島伸悟『英語名人河村重治郎』三省堂、1983

小島義郎『英語辞書学入門』三省堂、1984

文中の各辞典。(なお『クラウン英和』は三省堂出版のご好意により提供していただいた。)

(p.26より続く)

Americanの最終音節には強勢がなく[ə]で発音されるのにcaravanのそれには第二強勢があり母音も[æ]であるのはなぜか、等々、話したいことは山ほどある。詳しくは来年あたりに出るであろう拙著をお読み頂ければ有難い。

(東京都立大学教授)

学習者の個人差について

ELEC 情報・資料および分析研究グループ 松永 隆

英語教育をテーマにした演習のクラスを担当していて、毎年最初の講義の前に思い出すのが Lado 先生の“Give me the students and I will tell you how.”という言葉である。これは大学院で Language Teaching Methodology のクラスを履修していた時のことで、彼の話では、効果的な教授法は何かとよく聞かれるが、いつもそのように答えていたことであった。

そのようなことを考えている時に、目に止まったのが、J. Morley の “Current Directions in Teaching English To Speakers of Other Languages: A State-of-the-Art Synopsis” *TESOL Newsletter* Vol. XXI No.2 (April 1987) である。この中で Morley は現在の言語教育 (ESL/EFL) で比較的安定している新たな傾向を 11 項目挙げている。彼は、同じようなリストを今から 8 年前の 1979 年にも出しているが、その時には僅か 5 項目であったことを考えると、このような短い期間で第二言語学習、学習者のプロセスといった分野の研究がいかに大きな影響を英語教育に及ぼしているかが良く分かる。これら 11 項目の中で特に注目したいのが次の 3 つである。

- (1) A focus on learners as active creators in their learning process, not as passive recipients
- (2) A focus on the individuality of learners and individual learning styles and strategies
- (3) A focus on the intellectual involvement of learners in the learning process and in content

学習過程で学習者の果たす積極的な役割が重視されなければならない。そうなれば自然と各学習者の言語学習の課題に対する取り組み方の類似点、相違点が問題になってくる。特にこの 10 年は多くの研究が、学習者の性質や特徴と学習プロセスの関係に向けられてきた。例えば、良い学習者とそ

うではない学習者を分ける特徴の研究もその 1 つである。

H. D. Brown (1987) の *Principles of Language Learning and Teaching*. (2nd ed.) Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall は、学習スタイル (learning styles) と学習方略 (learning strategies) について役に立つ情報を提供してくれる。学習スタイルとは、各学習者のかなり安定した認知スタイルの特徴を指すもので、具体的には知的作業に対する取り組み方となって現れ、外国語の達成度に影響する。認知スタイルの類型としては、あいまいさの耐性 (tolerance of ambiguity), 場依存型・場独立型 (field dependence/independence), 衝動型・熟慮型 (impulsive/reflexive) などがある。学習方略は特定の問題を処理するために使用されるもので、第二言語を学ぶための方略、実際のコミュニケーションで使うための方略 (communication strategies), production/reception の過程で既に持っている知識を自動的に使えるようにするための方略などを含む。

J. Rubin (1975) は “What the Good Language Learner can Teach Us,” *TESOL Quarterly* Vol. 9 No.1 : 45-51 で、よい学習者は次の 7 つの特徴を示すとしている：

- (1)自分から進んでしかも正確に推測できること、
- (2)相手に伝えたいという強い気持ちを持つこと、
- (3)ネガティブな、学習低下を引き起こすような不安 (debilitating anxiety) を持たず、ばかりたことでも進んで出来ること、(4)形式に注意していること、(5)練習の機会はすべて活用していること、(6)自分や相手の発話を適切にモニターしていること、(7)表層構造だけではなく意味にも注意していること。

Rubin はこれらの 7 つに加えて課題に応じて学

習方略を変化させていることも指摘している。同じような特徴が H. H. Stern (1975) の "What can We Learn from the Good Language Learner?" *Canadian Modern Language Journal* Vol. 31 No. 4 : 304-318 で述べられている。

Morley の第 3 の項目についてだが、前の所で触れた通り学習者の知的関与、すなわち学習者自身のパーソナリティーを反映する学習スタイルに対する関心が高まってきたこともその 1 つである。おそらく大半の学習者は教師が意図的に目を向けさせなければ、自分の使用している学習スタイルや方略に気付くことはないであろう。Myers-Briggs Type Indicator と呼ばれる方法によって生徒だけではなく教師の心理的傾向（内向性、外向性など）を調査して、教育プログラムの中で活用していくとする動きも見られる。ESL/EFL の教師にとって関心のある知的関与としては、行動主義の習慣形成理論にかわるものとして 1960 年代後半に出された認知学習理論の原則と共通したものがあり、その中で言語学習というものは音韻、文法、語彙が意識的にコントロールできるようになる過程だと見なされる。10 代の生徒や大人を対象としたクラスでは、生徒に対しては何（どのような活動）をしているのか (process), どのようにして行うのか (procedures), そして理由 (活動もたらす結果とその価値) を認識させるのも効果的な方法である。1970 年代にはミンガン大学をはじめとしてその他でも、特にこの点に注意を払った教材開発が実施された。

さて少し前書きが長くなってしまったが、本稿においては学習者の個人差、特に認知スタイル (cognitive styles) と学習者の方略 (learner strategies) をテーマにして、Ellis, Rod (1985), *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press (Chapter 5 : Individual Learner Differences and Second Language Acquisition 及び Chapter 7 : Learner strategies)を中心にして理論的な面を紹介し、実験的研究については O'Malley, J.M., A.U. Chamot, G. Stewner-Manzanares, R.P. Russo

and L. Kupper (1985) "Learning Strategy Applications with Students of English as a Second Language", *TESOL Quarterly* Vol. 19 No. 3 : 557-584 を紹介していく。

個人差の諸要因の中で認知スタイルと方略を見ているだけでは全体を把握できないと思われるので、最初のセクションでは Gardner, R. C. (1985) *Social Psychology and Second Language Learning : The Role of Attitudes and Motivation*. London : Edward Arnold に見られる社会心理学的アプローチを概観する。

1. 動機づけ・態度・適性・第二言語の達成度

第二言語学習における個人差を説明しようとした初期の研究は Carroll and Sapon (1959) *Modern Language Aptitude Test* によって代表されるものである。よく一般的に当時言われていたような、「あの人たちは言葉を学ぶことを心得ている」といった説明は不十分であるとして、言語学習に対する適性を測定することによって個人差を説明しようとした。言語学習の能力がすぐれた人もいれば、それ程得意ではない人もいるが、我々は少なくとも第一言語は習得しているので誰にも言語学習の適性はある。しかしながら、言語学習適性が高いからといって良い言語学習者であるとは必ずしも言えない。適性の低い人でも高い言語技能を持つ人はいる。言語適性だけでは個人差の説明は十分にできない。そこで目標言語の習熟度は教授法や指導技術に関係するという見方もできる。

これまで Silent way, Suggestopedia, Community Language Learning, Cognitive-Code Learning など革新的な方法が提案、実施されてきたが、これらの方法によって教えられた生徒でも、伝統的なアプローチによって勉強した生徒でも、やはり習熟度の高低が生ずる。第二言語の達成度、態度、動機づけなどの要因から個人差を説明しようとするのが社会心理学的アプローチで、Gardner や Lambert が中心となって研究が行われてきた。

統合的動機づけ (integrative motivation) と道具的動機づけ (instrumental motivation) という

用語を SLA のプロセスに導入したのは, Gardner と Lambert である。統合的動機づけは“*a willingness to become a member of another ethnolinguistic group*”として定義され, 具体的には, 文化を異にする共同体やそこで生活する人々について学びたいという願望となって現われてくる。

(Gardner and Lambert 1972 : 3)

道具的動機づけは, 第二言語, 外国語の習得によって社会的認識を得たい, 経済的に有利になりたい, 試験にパスしたい, などの願望で, このような動機づけを持った人は自己志向の理由から, 他の言語の勉強から何らかの利益を得たいと考える。したがって道具的動機づけに支えられている人は, 言語やその民族に対して本当に関心があるとは限らない。

この 2 種類の動機づけ, そして態度と関係する重要な要因は動機づけの強さである。具体的には, 勉強にどれだけの時間と資金を費やす用意があるかなどを含めた学習者の勉強に対する熱意の強さである。外国語のクラスでの言語活動に対する関心, 外国語使用に関する向上心, 学習継続への熱意となって現われる強さは学習者に質問することによって測定できるものである。

Gardner and Lambert (1972) は動機づけの種類 (instrumental/integrative) と動機づけの強さに関連がない (どちらが強い動機づけであるとはいえない) としている。しかしながら, 学習者の置かれた環境によっては強さは同じでも種類が違えば, その影響も変化するとしている。たとえば合衆国やカナダの学校でフランス語を外国語として学んでいる生徒にとって総合的動機づけが有利に作用し, 第二言語 (教室外においても広くコミュニケーションの手段として使用されている言語) として教えられているフィリピンのような所では道具的動機づけがより効果的であることを述べている。Burstall (1975) は, フランス語の上達が同時に 2 種類の動機づけ (教科としてのフランス語がうまくなりたい, フランス人やフランス文化について知りたい) と強い関係があることを指摘している。このことからも統合的・道具的動機

づけが同時に作用をすることも可能であることはわかる。SLA にはどちらか一方というのではなく, 両方の動機づけが関与していると思われる。

Gardner (1985 : 47-50) において数種類の態度と第二言語の達成度の関係を論じているが, 調査方法及び結果を簡単に見ていくことにする。フランス語学習に対する態度, 外国語への関心, フランス系カナダ人に対する態度, フランス語教師に対する反応, フランス語コースの評価という 5 種類の態度及び MLAT (Modern Language Aptitude Test) を要因とし, フランス語の達成度との相関を分析している。使用された MLAT はすべての下位テストではなく, ‘words in sentences’ (文法的感覚の測定), ‘spelling clues’ (音声の記号化と英語の単語の知識を測定するもの), ‘paired associates’ (機械的記憶能力の測定), の 3 つの下位テストである。

達成度は自己評価によるもの (writing • understanding • reading • speaking), 客観テスト (vocabulary • grammar • comprehension), 教科の成績, フランス語学習継続の意志 (behavioral intention to continue French study) という 4 種類に区分される。相関分析の対象となったデータはカナダの 7 地区で行われた 33 の研究結果で, サンプルのサイズは 62-238 名 (平均 162 名) であった。

フランス語学習に対する態度との相関は常に第 1 位か第 2 位と高く, 外国語への関心も常に第 2 位か 3 位と高い相関を示した。他の要因でこれ程一定した, 高い相関は見られなかった。フランス語学習に対する態度, 外国語への関心, フランス語コースの評価という 3 種類の態度は, 自己評価による達成度との相関では常に言語適性テストよりも高い相関を示した。客観テストに関しては諸要因間でそれ程大きな違いはなかったが, 相関は高い方から順番に文法的感覚, フランス語学習に対する態度, 外国語への関心であった。

ここで明らかなことは, 直接言語と関係のある諸要因が教室の環境・フランス系カナダ人に対する態度よりも, 一定して高い相関を示していることである。すべての要因の中で, フランス語学習

に対する態度、外国语への関心が言語の習熟度予測に最も適切な要素といえる。逆に、最も役に立たない要素は、フランス語教師に対する反応、フランス系カナダ人に対する態度である。

最後に、Gardner (1985) における motivation とは SLA との関係でどのように説明されているかをまとめてみた。

Gardner にとって motivation は(1)言語学習に対する態度、(2)目標達成の願望、(3)動機づけの強さ、(4)目標の要素、から構成されている。(3)動機づけの強さは(1)と(2)から影響を受けるが、これら以外にも教材、教授法、教師、環境的要因もかかわってくる。目標は‘Learning French is important to me because ...’というステートメント完成の形式で評価されるもので、フランス語の学習理由が何らかの形でカテゴリー化されたものが orientations (志向) と呼ばれている。

Gardner (1985: 54) は下のように図式化している。

2. 学習者の認知スタイル

Ellis (1985: 114) は cognitive style を次のように定義している。

Cognitive style is a term used to refer to the manner in which people perceive, conceptualize, organize, and recall information. Each person is considered to have a more or less consistent mode of cognitive functioning.

ある刺激が入ってきた時に、人はその刺激の構成要素を検討し、以前に身につけ蓄えられた情報処

理ストラテジーを活用して新しい情報を概念化して、認知的課題を解決しようとするのであるが、このような刺激に対して人が示す反応様式が認知スタイルである。この様式は大脳半球機能の優位性や目の動く方向に安定した傾向が見られるのと同様、時間の経過にもかかわらず比較的安定している。特定の認知スタイルは大脳半球機能、目の動く方向と密接な関連がある。

右ききの人すべてと左ききの人の3分の2は、左半球が分析的・論理的情報処理にかかわっている。この他、時間の流れに関する判断（2つの刺激のうち何れが最初であるかなどの課題）、言語学的・数学的な機能は左半球に属するものとされている。Bogen (1975) は左半球がある場 (field) における要素を調べ、与えられた課題解決に役立つ要素だけを取り出すことにおいて優れていると述べている。右ききの人や左ききの人の一部は、右半球が情報の全体的・包括的 (holistic) 処理にかかわっている。左半球機能と比較すると、右半球は視覚的・聴覚的イメージ、ジクソー・パズルのような課題（複雑で言葉での記述が困難と思われるもの）に関しては優れているとされる。

Bakan (1971) は思考を引き起こす質問に対する最初の目の動きが半球機能の優位性と結びついているという主張した。つまり、考えている時に右へ目を動かす人は左半球とかかわる認知スタイルを、左へ動かす人は右半球優位の認知スタイルを使用しているという仮説を立てた。この仮説は、Krashen, Seliger and Hartnett (1974) の実験的研究によっても証明されている。これはスペイン語学習の Bull method (演繹的スタイルを強

Attitudes toward learning French



調した教授法)とBarcia method(帰納的スタイルを重視した教授法)で学んだ生徒を比較した研究で、Bull methodの生徒のグループはBarcia methodのグループよりもはるかに目を右へ動かす傾向が強いことを示したものである。

さて、以下ではEllis(1985)に従って認知スタイル研究の流れを、場依存型(field dependence, 以下FD)・場独立型(field independence, 以下FI)を中心として見ていく。

実験的研究で様々な認知スタイルが確認されてきたが、これらのスタイルはほとんどの場合対立的な用語で表現されている。(verbal/imaginal, analytic/relational, serialist/holist, impulsive/reflectiveなど)また、違った用語が使用されても内容的には相当重なる部分も多い。SLAに関する実験的研究で最も注目を集めてきたのがFD/FIである。EllisはFDとFIの具体的特徴を次のような形でまとめている。

場依存型(FD)

- (1)個人的志向：情報を処理する時に、外的基準に依存する。
- (2)包括的(holistic)：ある場(field)を全体として捕えることができるがフィールドを構成する要素を課題に応じて取り出すことができない。
- (3)依存的(dependent)：自己概念の形成が他に依存している。
- (4)社会的感覚が鋭い：対人関係の形成・維持の面で優れている。

場独立型(FI)

- (1)非個人的志向：情報を処理する時に内的基準を使用できる。
- (2)分析的(analytic)：課題に応じてフィールドを構成する要素を取り出したり、視覚・聴覚刺激にあいまいな所があっても必要な要素を取り出すことができる。
- (3)独立的(independent)：はっきりとしたidentityを持つ。
- (4)社交的感覚に欠ける：対人関係の形成・維持が

苦手である。

SLAにおけるFD/FIの役割について多くの仮説が出されている。自然な環境の中でのSLAにとつてはFDが有利に働くが、教室での学習にはFIが成功につながると言うのも興味深い提案のひとつである。自然な言語習得の環境に置かれた学習者は、対人間のやりとりに優れていればネイティブ・スピーカーとの接触も多くなり、inputもそれだけ増えることになる。教室での学習者の場合は言語の構造的規則を分析する能力を身につけることが重要となる。

これがこの提案の理論的根拠となっているが、認知スタイルの影響に関する実験的研究ではこのような提案を試そうとしたものではなく、教室での学習者に限定した研究がほとんどである。また、研究方法としては適性を調査する研究と類似した方法が取られている。FD/FIの調査ではGroup Embedded Figures Test(Witkin et al. 1971)

(複雑な模様の中に隠されている単純な図形を被験者に認識させるテスト)が使用され、このテストの点数と様々な形での習熟度テストの相関を出すという方法が取られる。この方法で教室での学習者を中心とした多くの研究が行われてきたが、結果は何れも決定的ではないようである。

Bialystock and Fröhlich(1977)はカナダの学校で9・10年生のフランス語の生徒を対象にした研究で、FD/FIはリーディングへの影響はほとんどないとしている。一方、Naiman et al.(1978)は、12年生の中で強いFI傾向を示す生徒については、模倣テストやリスニング・テストの成績に認知スタイルの影響が認められたが、8・9年生については認められなかつたと報告している。これは認知スタイルが年齢に関係していて、青年期後半の生徒にはFIが学習にプラスの作用を及ぼすと解釈できる。

大学での初級スペイン語クラスの253名を対象とした研究で、Hansen and Stanfield(1981)は、3種類の習熟度テストで認知スタイルとの関連は認めながらも、結論では認知スタイルが習熟度に

及ぼす影響は“minor”であるとしている。Ellis はこれらの FD/FI 研究から、SLAにおいては FD/FI 傾向が重要な要因ではないように思われると判断している。

認知スタイルの研究は、FD/FI の度合いを測定するテストと習熟度テストの相関を見るというような量的な研究が中心であったが、今後は質的な研究も必要とされる。認知スタイルの習得ルートへの影響も今後の研究課題としなければならない。

3. 学習者の方略（理論的枠組み）

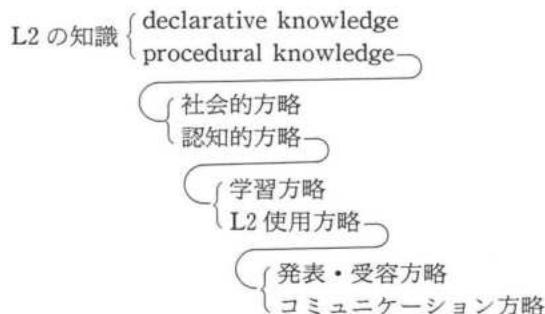
Ellis (1985) は学習者の持っている知識には 2 種類あるとして、(1) declarative knowledge (内面化された L2 規則と“かたまり”として記憶された言葉) 及び(2) procedural knowledge (言語を習得したり、コミュニケーション行動を取る際に必要となってくる、L2 資料を処理するための方略) に分類している。procedural knowledge は、social (社会的) component と cognitive (認知的) component に下位区分されている。

social component は、対人間のやりとりをスムーズに実行していくための方略を含むもので、Fillmore (1979) はアメリカ人の子供といっしょに遊びながら英語を学んでいる 5 人の子供（スペイン語が母国語）の行動を分析し、社会的方略を記述している。Fillmore は、(1) グループに参加をし、何が行われているのかあたかも理解できているような行動を取ること、(2) 単語数は少なくとも、注意深く選択して発話することによって、英語が話せるのだという印象を相手の子供に与えること、(3) コミュニケーションで困った時には英語を話せる子供に助けてもらうこと、などの方略をあげている。

cognitive component は、(1) 新しい L2 知識を内面化し、自動的に使用できるための方略（これには L2 でコミュニケーション行動を取るために必要な非言語的知識の活用も含まれる）、(2) production/reception (発表・受容) にかかる方略、(3) コミュニケーションのための方略から構成されている。第 1 の学習方略には、formulaic speech (決

まり文句によって作られている発話) に見られるようなパターンの記憶、過剰般化 (overgeneralization), 仮説の形成、試行 (hypothesis formation/hypothesis testing), 言語内・非言語的推測 (intralingual/extralingual inferencing) などの方略がある。第 3 のコミュニケーション方略は話者が意図した通りに伝達行動を行うことができない時に生ずるものである。L2 学習者の言語使用には、学習者がある時点で持っている資力を無意識的に活用する時に作用する production/reception の方略に対して、不十分な知識を補うために相当努力して、どちらかと言えば意識的に実行されるコミュニケーション方略が存在する。

Ellis (1985 : 165) は学習者の方略を次のようにまとめている。



4. 学習方略の実験的研究

O'Malley et al. (1985) は、学習方略の研究が L2 技能の習得にとって重要であるとの認識から、(1) 英語を第二言語として学んでいる ESL の生徒たちが使用している学習方略の種類とその頻度、(2) 学習方略の訓練が英語の技能に及ぼす影響を調査するために行われた研究である。

実験は 2 段階から成っており、第 1 段階として ESL の生徒と教師に対して面接が行われ、ESL の教室内外、教室外でよく取り上げられる課題とそれらに関係する学習方略^{#1}が確認された。第 2 段階では、ESL の生徒がランダムにクラス分けされ、それぞれのクラスで語彙、リスニング、スピーキングの学習方略の訓練を受けた。

各段階の実験方法、結果を簡単にまとめることにする。なお、方略を示す名称は原語のまま使用するので、定義については注1)を参照していただきたい。

第1段階

被験者は22名の教師と70名のESLの生徒で、ESLの教師によって高い学習能力を持っていると判断された生徒が対象となった。これは高い能力の生徒であれば、それだけ多くの学習方略を使用しているに違いないとの仮定からであった。研究は米国東部の3つの高校で行われたが、参加した生徒はESLの初級、中級クラスに属していた。データ収集に使われたのは行動観察チェックリスト(Class Observation Guide)と教師、生徒を対象とした面接法であった。生徒の行動観察は、教師、学校、科目、習熟度以外に次の5つの項目についても行われた。

- (1)方略の使用は生徒によるものか。教師によるものか。
- (2)どのような活動(語彙、文法ドリル、リスニングなど)に特定の方略が使用されたか。
- (3)クラス全体の活動で特定の方略が使用されたのか。グループ活動の中で使われたか。教師と1対1でL2を使用しているときに利用されたのか。
- (4)特定の方略が使用された時に使われた教材は何か。
- (5)方略が実行された時に教師と(又は)他の生徒がどのような発言をしたのか。

教師に対する1時間の面接は1対1で行われ、テープに録音されたが内容的には生徒の行動観察チェックリストと同様のものであった。生徒に対する面接は、70名の生徒を各グループ3～5名の13グループに分けて実施され、テープに録音された。特にスペイン系のESL初級の生徒には面接がスペイン語で行われ、正確な学習方略データが得られるようにした。

70名の生徒に対する面接で合計638の方略使用例(各グループ平均33.6回)が確認された。教

師との面接では1回の面接で平均24.5回方略の使用が確認されたが、教師によって示された方略は教えるためのもので、ほとんどの教師が生徒の学習方略を認識していないことが判明した。生徒の行動観察は、1回の観察で平均3.7回方略の使用が確認されたが、この少なさは観察できるような行動となって学習方略が現われてこないことも多いためと思われる。以上の理由から、O'Malley et al.は分析の対象を生徒の面接データに限定している。

638例の学習方略は20種類の学習方略(注1参照)にカテゴリー化された。このうちで30%がメタ認知的方略で、初級、中級の生徒は何れもself-management, advanced preparationの頻度が1位か2位を占めている。selective attentionについては、初級の生徒が22.3%、中級の生徒が16.3%となり、依存度の違いがはっきりと出ている。メタ認知的方略と他の方略が組み合わされて使用された例はわずか7%であるのに対して、メタ認知的方略以外の方略が組み合わされて使用された例は21%と高い。

認知的方略は全体の53%と大半を占めているが、その中でもrepetition, note-taking, imageryは初級、中級の生徒によってよく使用される方略である。translationとimageryは初級の生徒による使用頻度が高く、contextualizationとresourcingは中級の生徒による使用度が高くなっている。

社会的・情緒的方略は全体の17%を占め、各方略の頻度は初級、中級レベルでほとんど違いは見られなかった。

方略の適用は学習活動によって変化することも明らかになった。学習活動の種類を方略使用の頻度の高い方から順にリストすると、語彙の練習(17%)、発音(14%)、listening comprehension(11%)、口頭発表(8%)、listening for inference(7%)となる。傾向としては、語彙、発音練習のようなdiscrete-point taskでは使用頻度が高くなり、integrative tasksにおいては低くなる。

第2段階

被験者は米国東部の高校の ESL のクラスで学習している 75 名の生徒で、全員が中級レベルに属していた。スペイン語圏出身者が 3 分の 1、アジア諸国（ほとんどは東南アジア諸国）出身者が 3 分の 1、残りはその他であった。生徒はランダムに 3 種類のクラス（グループ）に分けられ、それぞれ別の指導法による学習をした。

第 1 のグループは metacognitive group で、1 つのメタ認知的方略、2 つの認知的方略と 1 つの社会的・情緒的方略を使うための訓練を受けた。第 2 のグループは cognitive group で、認知的方略、社会的・情緒的方略の使用訓練を受けた。第 3 のグループ（統制群）はいつもと変わらない指導を受けた。

実験群（第 1 グループと第 2 グループ）の生徒は 8 日間（1 日 50 分）の学習方略訓練を受けた。この訓練期間前後にそれぞれ予備テスト（50 分）、効果測定テスト（50 分）が実施された。実験群の生徒は、(1)語彙、(2)リスニング、(3)スピーキングの活動の中で毎回必ず 2 つの活動において方略使用^{#2)}の訓練を受けた。

効果測定テストの分析で、リスニング・テストについては実験群と統制群の間に有意義な差は認められなかった。これには 2 つの可能性があるとして、第 1 に生徒が訓練を受けたにもかかわらず方略を適用できなかったこと、第 2 に訓練を受けた方略では与えられたリスニング課題の複雑さに十分対応できなかったことをあげている。

一方、スピーキング・テストでは実験群と統制群の間には有意義な差が認められた。もし第 1 グループと第 3 グループ（統制群）のスピーキング・テストの平均を FSI (Foreign Service Institute) のスケール (1-5) で計算し直すと、第 1 グループが +2、第 3 グループが 2 を少し下回っていることになり、大きな違いであることがわかる。

認知スタイルや学習者の方略については研究の歴史も浅く、最近の実験的研究を見ていても、決定的な問題解決はなく tentative なものが多く、

解決された問題の数よりも多い課題が残されている。リサーチの結論がまだはっきりしないからと言って、英語教育の現場で教師が新しい考え方を教材作成に応用したり、新しい指導技術を導入したりできないと判断してはならないと思う。

（南山大学講師）

参考文献

1. Bakan, P. (1971) "The eyes have it," *Psychology Today*. Vol. 4 : 64-69.
2. Bialystock, E., and M. Fröhlich (1977) "Aspects of Second Language Learning in Classroom Settings," *Working Papers on Bilingualism*. Vol. 13 : 2-26.
3. Bogen, J. E. (1975) "Some Educational Aspects of Hemispheric Specialization," *UCLA Educator*. Vol. 17 : 24-32.
4. Burstall, C. (1975) "Factors Affecting Foreign-Language Learning: A Consideration of Some Research Findings," *Language Teaching and Linguistics Abstracts*. Vol. 8 : 5-125.
5. Gardner, R. C., and W. E. Lambert. (1972) *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, Mass.: Newbury House
6. Hansen, J., and C. Stansfield. (1981) "The Relationship of Field Dependent-Independent Cognitive Styles to Foreign Language Achievement," *Language Learning*. Vol. 31 : 349-367.
7. Krashen, S., H. Seliger, and D. Hartnett. (1974) "Two Studies in Adult Second Language Learning," *Kritikos Litterarum* Vol. 3 : 220-228.
8. Naiman, N., M. Fröhlich, H. Stern, and A. Tedesco. (1978) "The Good Language Learner," *Research in Education* No. 7 : 1-112.
9. Witkin, H., P. Oltman, E. Raskin, and S. Karp. (1971) *A Manual for the Embedded Figures Test*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.

注 1) この研究で使われた学習方略の定義は次の通りである。

学習方略と定義

メタ認知的 (metacognitive) 方略

1. Advance Organizers
予想される学習活動の全体的把握
2. Directed Attention

- 学習課題に取り組む前に注意すべき点を決定し、不必要な部分は無視する
- 3. Selective Attention
言語のどの部分に注意するかを前もって決めておく
 - 4. Self-Management
個人が学習しやすい環境とは何かを理解し、そのような条件を整える
 - 5. Functional Planning
予想される学習課題に必要な言語的要素を考え、それらを練習しておく
 - 6. Self-Monitoring
発音、文法、語彙、社会的適切さについて自分の発話をチェックする
 - 7. Delayed Production
最初はリスニングを通しての学習をするためにスピーキングは意識的に延ばす
 - 8. Self-Evaluation
学習成果を自己の内的基準（正確さ、達成度）から評価する
- 認知的（cognitive）方略
- 1. Repetition
声を出したり、黙って言語モデルを模倣する
 - 2. Resourcing
目標言語の中で参考となる素材を使用する
 - 3. Translation
L1 を L2 の理解、発話に利用する
 - 4. Grouping
共通性に基づき学ぶべき要素を区分、再区分する
 - 5. Note-Taking
耳や目から入ってきた情報のアウト・ラインや重要な日付などをメモしておく
 - 6. Deduction
発話、理解のために規則を意識的に応用する
 - 7. Recombination
既習の要素を組み合わせて新しい文やディスコ
- ースを作り出す
 - 8. Imagery
新しい情報を視覚的イメージと結びつける
 - 9. Auditory Representation
音の聴覚的イメージを記憶しておく
 - 10. Keyword
L2 の新語を記憶するのに L1 の同様な単語や L2 の既習の単語のイメージを利用する
 - 11. Contextualization
語句をコンテクトの中で考える
 - 12. Elaboration
新しい情報を記憶にある他の概念と関連づける
 - 13. Transfer
既習の言語的・概念的知識を利用して新しい課題に取り組む
 - 14. Inferencing
推測によって新出項目の意味、欠けている情報を理解する
- 社会的・情緒的（socioaffective）方略
- Cooperation
フィードバックを得るために、情報を収集するためには、他人といっしょに作業する
- Question for Clarification
先生やネイティブ・スピーカーに、くりかえし、パラフレーズ、説明、具体例などを求める

注 2) リスニングにおける訓練の対象となった方略は、selective attention(メタ認知的方略), note-taking(認知的方略), cooperation(社会的・情緒的方略)である。スピーキングにおいては、functional planning(メタ認知的方略)とcooperationである。生徒に与えられたスピーキングのtaskは口頭による短いレポートである。一方、リスニングのtaskでは、歴史、地理などの5分間のビデオを聞いて、内容理解のチェックが行われた。

1988年度 E L E C 賞 論文募集

A 中学・高校などにおける英語教育の実践記録

賞 1席1名 賞状および副賞10万円

B 英語教育および英語教授法に関する研究論文

賞 1席1名 賞状および副賞10万円

審査委員

黒田 巍（東京教育大学名誉教授）

太田 朗（上智大学教授）

伊藤健三（文教大学教授）

清水 譲（E L E C 常務理事）

応募要領

1. 応募資格 特に問いません。
2. 分量 400字詰横書原稿用紙50枚以内(図、表等の資料も含める)。英文の場合、A4判にダブルスペースでタイプしたもの、20枚以内。但し未発表のものに限ります。
3. 論文要旨 800字以内、英文の場合は200語以内を添えてください。
4. 論文の表紙に、応募する部門(A又はB)、論文名、氏名、住所、電話番号、勤務先(学生は在学校)名、およびその電話番号を明記してください。
5. 応募論文のオリジナルとそのコピー2通、合計3通を送ってください。応募論文はお返しいたしませんので、あらかじめご了承ください。
6. 締め切り 1988年7月31日(当日消印可)
7. 発表 1988年11月5日㈯に開催される第4回E L E C 英語教育研究大会で行ないます。

(財)英語教育協議会(E L E C)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-8

電話(03)265-8911

新刊紹介

『英語ヒアリング

集中コース(上級用)』

ELEC 編

本音声教材「英語ヒアリング集中コース・(上級用)」は、Listen & Learn 3を全面的に改訂した新版で、テキストとカセット・テープ2巻から成り立っている。上級レベルの英語力を持つ人を対象として、TOEFL600点以上の得点や、映画などを楽しめるヒアリング力を養成するためのものである。

内容はアメリカ人の生活とアメリカ文化全般から興味深いトピック、いくつか例をあげれば、夫婦と姑、アメリカ人の姓名の由来、ジェスチャーによって表わされる意味、マナー、迷信、

伝説などが取り上げられ、20のレッスンにまとめられている。

テキストは各レッスンとも4頁で構成されている。1頁目には本文の内容に関連する場面を示す絵があり、内容を把握するのに役に立つ。2頁目には本文の大意把握や、細部の正確な理解を試すヒアリングテスト問題の選択肢がある。問題数は各レッスンとも5問で、4肢選択である。3、4頁目には本文と、ヒアリングテストの質問文があり、レッスンによっては、Further Studiesとして重要表現の活用や、本文に関連した背景知識が英語で与えられている。各レッスンとも大意の把握から全体の完全な理解までをシステム化し、ヒアリングの力を効果的に伸ば

し、定着させるように工夫されている。テープにはレッスン毎に、本文、ヒアリングテストの質問文、テストの正答がこの順序で吹き込まれ、問題の解答時間はそれぞれ13秒間である。この長さは実際にやってみて、適當だと思った。吹込者各氏の発音が明確で美しい、B. G. M. や効果音が入っていないため聞きとりやすい。

日頃ヒアリング力の不足を痛感し、本コースで独習しているが、面白い内容や適切な4肢選択のテストで、効果をあげられると思う。

(A 5 判、187頁、カセット版(テキスト+カセット・テープ) 4,800円)

(古川法子 大妻中学校・高等学校教諭)

必修語のアクセントの分析

望月 国男

I はじめに

英語の単語のアクセントは前強勢が特徴で、約7割近くの語は、第1音節にアクセントがあるといわれている。(小栗敬三『英語アクセント法』学書房出版、1973) 教師がその知識をいかして指導すれば、おぼえる単語の数は残り3割ですむということになる。

そこで、中学校3年間のいずれかの学年で指導すべき必修語490語が、どのような傾向をもっているのか、490語のアクセント型を整理、分類してみた。

II 分類にあたっての留意点

1 単語にあらわれている強勢グループの型をストレス・グループの音節数と第1強勢の位置によって分類した。

2 単語の分節の仕方は「辞書による差異がある」(『英語アクセント法』小栗敬三)という指摘もあるので、本調査の分節法は(『英語分節辞典』竹中治郎、愛育出版、1958)の分節法に基づいた。

3 tillとuntilは、tillが第1音節語、untilは第2音節語に入れたので、語数は全部で491語とした。

III 必修語の音節の数

1 音節語	331 語	67.4%
2 音節語	130 語	26.5%
3 音節語	26 語	5.3%
4 音節語	4 語	0.8%

IV 必修語のアクセントの分析結果

音節数	ストレス・パターン	語 数	割合%
1 音節語	●型	331	67.4
2 音節語	●●型	101	20.6
	●●型	23	4.7
	●●型	6	1.2
3 音節語	●●●型	12	2.4
	●●●型	10	2.0
	●●●型	3	0.6
	●●●型	1	0.2
4 音節語	●●●●型	4	0.8

V 必修語のストレス・パターンの分類

紙数が限られているため、1音節語と2音節語の●●型に属する語の例挙は避けるが、2音節語の●●型以上からすべての語をのせると、次のようになる。

2 音節語

●●型			
a · bout	a · cross	a · gain	a · go
a · long	a · mong	ar · rive	a · way
be · cause	be · come	be · fore	be · gin
be · tween	e · nough	for · get	good · by (e)
in · vite	Ja · pan	Ju · ly	o' · clock
to · day	un · til	with · out	

●●●型		
thir · teen	four · teen	fif · teen
six · teen	eigh · teen	nine · teen

3 音節語		
an · i · mal	an · y · one	an · y · thing
eve · ry · one	eve · ry · thing	fam · i · ly
hol · i · day	li · bra · ry	news · pa · per
Sat · ur · day	sev · en · ty	yes · ter · day

●●●●型		
al · read · y	an · oth · er	De · cem · ber
e · lev · en	e · lev · enth	No · vem · ber
Oc · to · ber	Sep · tem · ber	to · geth · er
to · mor · row		

● ● ● 型

af · ter · noon Ja · pa · nese un · der · stand

● ● ● 型

sev · en · teen

ただし、●●型の thirteen などや、●●●型の afternoon, Japanese, ●●●型の seventeen は本文のリズムのため、アクセントが移動することがある。

4 音節語

● ● ● ● 型

dic · tion · a · ry Feb · ru · a · ry
in · ter · est · ing Jan · u · ar · y

以上のように、必修語には第1音節語が極めて多いこと、また、多音節語でも第1音節にアクセントのある語が圧倒的に多いことがわかる。2音節語以上で、第1音節にアクセントがある語は、総計 124 語となっている。

必修語には4音節語の●●●●型、5音節語はなかったが、この3月まで使用していた5種類の教科書の単語を分類してみると、次のような結果になった。

4 音節語	{ ●●●●型 13 語 ●●●●型 12 語
5 音節語	{ ●●●●●型 8 語 ●●●●●型 4 語

VI 指導の実際

必修語については、中学校3年間で正しいアクセントで正確に発音できるとともに、正しく書けるようにさせたい。そこで筆者のささやかな実践をあげてみたい。

1. アクセントの指導について

(1) フラッシュ・カードには、アクセントの符号をつけ、正しいアクセントで発音できるようにしている。特に必修語については、学年色の青色でかき、重要さの認識を深めさせる。

(2) tapping や clapping をとり入れて指導している。この方法を用いると単語や音節数など、その強弱関係を聴覚化し、正しいリズムの習得にもなってくる。

(3) 多音節は強音節の母音をはっきり正確に発音し、弱音節は曖昧にするという強勢リズム中心の指導に心がけている。

(4) ●●型や●●●型は身体を動かして練習すると、覚えやすくなる。

(5) 接頭辞や接尾辞によって、第1アクセントの位置が決まっている語が多いので、この体系を指導しておく。

2. 書く指導について

筆者は現在2年生を担当しているが、1年の3学期には必修語を必ず含めて重要単語を10級から1級まで級別に分類して、毎週土曜日の短学時に書き取りテストを全クラス実施した。1回30語を出題し、20語以上書けたら合格とする。不合格者は会議などない放課後には、いつでも再テストが受けられるようにし、約90%の生徒が1級に合格した。3月の学年集会に、本校担当の外国人講師に認定書を英文で書いてもらい、合格者に手渡した。

2年になって、6月に1年から2年の6月まで習った必修語を含めて、100語の書き取りテストを、今年度本校担当の外国人講師テレサ・クローリー先生の名前にちなんで、第1回テレサ・クローリー賞英単語書き取りコンテストという名称で実施した。70語以上書けたら合格とし、不合格者には7月現在放課後再テストを行っているが、全員合格のクラスもできている。夏休みの課題にも、必修語を課し、9月には第2回目の書き取りコンテストを行う予定である。

VII おわりに

本調査を通して、必修語のアクセントの傾向がつかめ、指導の重点が一層明確化したことは、大きな収穫であった。今後は6種類の教科書の全単語の傾向をつかみたいと考えている。

(神奈川県秦野市立本町中学校教諭)

参考文献

稻垣明子：『うたとリズムでフォニックス』

国社社，1984

小栗敬三：『英語アクセント法』学書房出版，1973

心理言語学

伊藤克敏

はじめに

心理言語学(Psycholinguistics)は、ことばの習得と使用における心理的過程(mental processes)を研究するのが主な目的で、前者は「発達心理言語学」(Developmental Psycholinguistics)，後者は「実験心理言語学」(Experimental Psycholinguistics)である。最近では「応用心理言語学」(Applied Psycholinguistics)の分野で、第二言語習得、言語障害、言語教育の問題が取扱われている。ここでは最初に心理言語学の歴史的展開についての参考文献を紹介し、次に発達心理言語学、実験心理言語学、応用心理言語学、一般的な概論書の順に主な文献を挙げ、寸評を加えて行くことにする。

1) 史的展開

‘Psycholinguistics’という用語を最初に使ったのは Pronko (1946) であるといわれているが、ことばと心理についての本格的な研究は、ドイツ的心理学者ヴント(W. Wundt)からみていいだろう。ヴントとパウル(H. Paul)の文の心理的処理に関する論争から、言語習得論、読みの心理の研究、更に米国におけるチョムスキーの心理言語学に与えたインパクトに至る歴史的考察が、A. Blumenthal (1970), *Language & Psychology : Historical Aspects of Psycholinguistics*. John Wiley & Sons, Inc. で行われている。また、1960年以後のチョムスキー的心理言語学の理念的基礎を成す「デカルト言語学」(Cartesian Linguistics)に影響を与えた一連の哲学者(Cordemoy, Diderot等)の思想の現代的意義を考察しているのが、R. W. Rieber(ed.) *Psychology of Language and Thought : Essays on the Theory and History of Psycholinguistics*. Plenum である。

1950年代の研究動向を知るには、S. Saporta (ed.) (1961) *Psycholinguistics : A Book of Readings*. Holt, Rinehart and Winston が、また、1960年代の動向は、C. Jakobovits and M. S. Miron (eds.) (1967) *Readings in the Psychology of Language*. Prentice-Hall, 更に、1970年代の欧米における研究方向は、R. Campbell & P. T. Smith (eds.) (1978) *Recent Advances in the Psychology of Language*. 2 Vols. Plenum と D. Aaronson & R. W. Rieber (eds.) (1979) *Psycholinguistic Research : Implications and Applications*. Laurence Erlbaum Associates が各々、有用な情報源となろう。

2) 発達心理言語学

- (1) F. Smith & G. A. Miller (eds.) (1966) *The Genesis of Language : A Psycholinguistic Approach*. MIT Press.
 - (2) C. A. Ferguson & P. I. Slobin (eds.) (1973) *Studies in Language Development*. Holt, Rinehart & Winston.
 - (3) E. H. Lenneberg & E. Lenneberg (eds.) (1975) *Foundations of Language Development*. 2 Vols. Academic Press.
 - (4) C. Snow & C. A. Ferguson (eds.) (1977) *Talking to Children : Language Input & Acquisition*. Cambridge University Press.
 - (5) P. Fletcher & M. Garman (eds.) (1979) *Language Development*. Cambridge University Press.
 - (6) K. Nelson (ed.) *Children's Language*. Gardner Press.
- (1) は「発達心理言語学」(Developmental Psycholinguistics)という分野を最初に確立したマクニールの論文をはじめ、D. Slobin, R. Weir,

E. Lenneberg 等の論文が収録されており、発達心理言語学の幕明けと初期の研究動向を盛りこんだ論集。(2)は中国語、ロシア語、ガロ語、フランス語、イタリア語、日本語等、各國語の音韻、形態、統語の習得に関する論文が収められている。(3)は正常児、異常児(盲、啞、言語遅滞児)の言語習得を、心理学、脳生理学、神経言語学等から考察した論集である。(4)は1970年代に入って、子どもに与えられる「母親語」(motherese)の研究が盛んになったが、本論集はその初期の代表的な論文が集録されている。(5)は、ことばを発する以前の幼児の伝達ストラテジーから、音韻、一語文、多語文、複文の習得、それに最近注目されている会話能力の習得についての研究等、巾広い研究動向が伺える論集である。(6)は1978年から毎年発行されている論集で、言語習得の諸相に関する代表的な論文が収められており、発達心理言語学研究の発展を知る上で参考になる。

3) 実験心理言語学

a) ことばの知覚・理解に関する研究書

- ① A. Cohen & S. G. Nooteboom (eds.) (1975) *Structure and Process in Speech Perception*. Springer-Verlag
- ② I. M. Schlesinger (1977) *Production and Comprehension of Utterances*. Laurence Erlbaum Associates
- ③ G. B. Floresd'Arcais & R. J. Jarvella (eds.) (1983) *The Process of Language Understanding*. Wiley.

①は主として音声的な面の知覚に関する論文集で、②はことばの知覚と産出面の相関性についての論考であり、③は文の理解における語や形態素の役割、朗読における理解過程、文処理における場面の影響等に関する論文集である。

b) ことばの産出に関する研究書

- ① S. Rosenberg (ed.) (1977) *Sentence Production*. Laurence Erlbaum Associates.
- ② B. Butterworth (ed.) (1980) *Language Production Vol. 1, Speech and Talk*. Academic Press. *Language Production Vol. 2, Development, Writing and Other Language Processes*. Academic Press.
- ③ A. Wells (ed.) (1985) *Progress in the Psychol-*

ogy of Language. Vol. 1 & 2. Laurence Erlbaum Associates.

①はことばの産出における神経心理面、脳損傷者の言語産出、口ごもりと言語産出等に関する論考集、②は失語症、言い誤り、文字表現との関連で、言語産出の問題を論じている。

4) 応用心理言語学

S. Rosenberg (ed.) (1983) *Handbook of Applied Psycholinguistics*. Laurence Erlbaum Associates.

読書、文字表現の心理的過程、第二言語習得の過程、言語障害者の言語行動、等に関する論文集で、応用心理言語学の分野についての編者の巻頭論文は興味深い。

5) 概論書

- ① H. H. Clark & E. V. Clark (1977) *Psychology and Language*. Harcourt Brace, Javanovich, Inc. 藤永保他訳『心理言語学』上下、新旺社。
 - ② D. I. Slobin (1979) *Psycholinguistics*. Scott, Foresman.
 - ③ D. D. Steinberg. *Psycholinguistics : Language, Mind and World*. Longman.
 - ④ D. W. Carroll (1986) *Psychology of Language*. Brooks/Cole Publishing Company.
 - ⑤ D. McNeill (1987) *Psycholinguistics : A New Approach*. Harper & Row.
 - ⑥ 坂野登、天野清(1970)『言語心理学』新読書社。
 - ⑦ P. ヘリオット著(1970)芳野表訳注『言語心理学入門』大修館書店。
 - ⑧ 入谷敏男(1983)『言語心理学のすすめ』大修館書店。
- ①は米国の大学(院)でよくテキストとして使われた概論書である。②は1971年版の改訂版である。71年版には訳書(宮原英種他訳『心理言語学入門』日旺社)がある。⑤は社会的状況における言語活動、メタファー、身振り等も扱っており、従来の認知心理言語学的傾向から、ことばの運用面での心理過程へ視点を移した新しい心理言語学を志向している。⑥は神経心理学的な面からの考察が特徴的で、⑧は本邦で出版されている概論書としては手ごろであろう。 (神奈川大学教授)

『言語習得と英語教育』

田中春美・玉崎孫治・大塚達雄
有元將剛・松永 隆 共著
B5判, xi+354頁, 2,800円
ELEC

小池生夫

本書は ELEC 創立 20 周年を記念して 1976 年に発足した海外の「情報・資料の収集及び分析研究グループ」の 10 年に及ぶ成果を一冊にまとめたものである。24 篇の論文のいずれも 1978 年の No. 60 の『英語展望』より毎号掲載されたもので、本書の出版以降もひきつづき新しいテーマで掲載される予定と聞く。執筆者は田中春美氏（24 篇中 6 篇及びあとがきを執筆）を中心に、玉崎孫治氏（6 篇）、大塚達雄氏（5 篇）、有元將剛氏（6 篇）、松永隆氏（1 篇）の南山大学言語学グループである。まえがきを太田朗教授が ELEC 中高英語教育研究委員会委員長として担当し、関連諸科学の研究が英語教授法の研究に生きてくる意義を述べている。

本書の全論文を概括すると、田中氏自身が述べているように①第 2 言語／外国語教授法、②言語学研究の直接利用の試み、③対照分析／誤りの分析／中間言語仮説、④ハイフン付き言語学の 4 本柱にまとめられよう。このうち①については、oral approach 以降の最近変化しつつある教授法理論を概観し、比較検討している。cognitive, humanistic, natural, communicative approach など、今後日本の英語教授法の発達に影響を与えるものまで含めてよく整理された内容で、英語教育の専門家にも参考になる。特に最近一部の人々に注目されている natural approach についてのコメントは読んでおいてよいものである。②については、音韻及び文法の特定項目についての分析をした論文を若干紹介している。この中では、具体的文法分析の結果を英語教育の現場で利用できるであろう。しかし、この分野の全体的な視野を見るものではないので、むしろ分析の手順についての

解説が参考になるであろう。③は④とともに言語習得について大変興味ある展望と分析解説がなされ、英語教育を研究テーマとする人々にとって、かなり重要な論文が並んでいる。一読をぜひおすすめしたいところである。③では対照分析が、限界であり、error 分析へと移っていった時代の流れの中で、もう一度対照分析の方法論を見直し、新しい光をあてて見ていること、error 分析を「中間言語」過程の中で把え、第 2 言語習得という大きなテーマの一部としているという見方は妥当な考え方である。また「言語の転移」については第 2 言語の習得に母語の干渉がどれほど作用するかについて論争がある現在、それにかかる解説をしているのは著者たちが言語学研究の論点の所在をつねにたしかめていることを感じさせる。④についても、応用言語学の領域設定についての研究や、論争の流れを解説し、第 2 言語習得とビジョンのクレオール化の発達と母語の発達の間に普遍化とも言うべき共通発達過程があるとの論文の紹介、神経言語学から見た言語習得と脳の関係など、習得を究極の目標とする外国語学習・教授理論研究で、無視できない重要論文を取り上げ、比較検討している。特に外国語教育の始期についての分析はその賛否をめぐって論議を呼ぶであろう。

全般的に見て、本書が取り扱った論文の解説は力作が揃っているが、その前に何を取り上げるべきかについて論議を経たと思われる視点の鋭さがあることを高く評価したい。英語教育の科学的研究にとって、かなり先端を行く論文紹介が多く、これからのがわ国における英語教育研究にとって参考となることがすこぶる多い。しかしながら、一部に難解な説明があり、読みにくいところがある。読者のレベルを考えたものであってほしい。雑誌掲載を一冊にまとめることはなかなか困難であるが、これには成功していると評価したい。全体が英語教育と関連科学、あるいは応用言語学の具体的解説ともなっている。このグループが、継続して仕事を続けられ、第 2 作を将来私たちに見せてくれることを期待している。（慶應義塾大学教授）

『最新の音声学・音韻論』

—現代英語を中心に—

島岡 丘・佐藤 寧 共著

B5判, vii+196頁, 2,300円

研究社出版

牧野 勤

本書は、音声学・音韻論は何を扱い、現在どのような研究が行われ、今後の課題にどんなものがあるかを紹介している好著である。全体で11章からなり、前半の第1章から7章を島岡氏が、第8章から終り迄を佐藤氏が担当している。

第1章の「序論—音声学と音韻論」では各章のまとめが論じられている。

第2章の「発音器官と発声過程」では発声器官とその働きの説明。第3章は「現代英語のモデル：RPとGA」について簡単に記述している。第4章の「現代英語の表記」では Jones と Gimson についてふれ、Hawkins(1984)を紹介し、Kenyon-Knott と Ladefoged の表記にふれている。

第5章は「音素と異音」と題して、両者の関係を公式化して示しているが、音素配列と同化と異化の問題の公式化に比重が置かれている。

第6章は「強勢と音調」で、強形・弱形の問題、強勢の段階、音調表記にふれている。全体のページ数からはやむを得ないかも知れないが、この部分の扱いが大変簡単である。

第7章の「音響音声学と聴覚音声学」ではサウンド・スペクトログラフの説明とその分析にもとづく、弁別的特徴について Chomsky-Halle(1968)に加えて、Halle(1983)を紹介している。

第8章の自律分節音韻論 (autosegmental phonology) では Goldsmith(1976)を中心にその考え方の紹介がある。この中には Hyman(1983)の Luganda 語の分析や、Hart(1981)の Parintintin 語の鼻音性の記述等がある。

第9章の「韻律音韻論」(metrical phonology) では Liberman and Prince(1977)の紹介で、SPEとの対比をしながら説明している。この中では、

英語のリズムに関して「好韻律性」(eurhythm)の問題も取り上げ、リズムによる強勢変化の現象の公式化がみられる。ここでは更に Hayes(1980)も紹介されている。

第10章では「音節音韻論」と題して、音節を重視した分析が、Kahn(1976)の紹介を通して展開されている。又 McCarthy(1978)や Clements and Keyser(1981, 1983)の議論も加えられている。

第11章では「語彙音韻論」(lexical phonology)といわれる Kiparsky(1982 a, b)を中心とした音韻論の説明がなされ、Halle and Mohanan(1985)の説でしめくくられている。

生成文法が様々な考え方で発展して来たように、音韻論の分野でも実に様々な考え方が提示されて来ている。本書はそれを比較的分かり易く示してくれた点参考になる、これを出発点に、それぞれの代表的な本や論文に当たることが出来る。

尚幾つか気が付いた点をあげて見ると、用語で point of articulation の調音位置・調音点、labiodental の歯唇音・唇歯音のぶれ。p. 8 の pin の説明の図の軟口蓋上昇のタイミングはこれでいいか、p. 15 基本母音 No. 1 = /i:/ の表示。p. 35 Kenyon(1973)はこの本の古さ(初版1924)を考えると誤解を与える。

イギリス英語の /ʌ/ を前母音と規定するのはロンドンの方言なら別だが RPとしては妥当だろうか。

p.39 r-帯色に関して「調音過程でそり舌 (retroflexion) の現象を伴う」の例として bird [bɜːd] は誤解を与える。p. 46 第2基本母音 [t], [t̪] は、[i], [ɪ] のミスプリント。p. 61 破列音→破裂音、p. 62 /-ŋz/ finger, /-lf/ adult, /-bl/ stabs, /dz/ needles, /-z1/ isn't は何かの整理ミスか? p. 65 日本語の /ni/ は [nji] の代りに [ni] では駄目か。p. 66 の進行同化の規則、Bach・井上は /š, ž/ で、/+/, tʃ, dʒ/ を使うのなら /ʃ, ž/ も加えないかと間違ひ。p. 84 [] → [I]。Robinet は Robinett(p. 57, 180) p. 76 の米構造言語学の音調表記の /231↓/ は 2, 3, 4 の表記にはならないと思う。

(青山学院大学教授)

『国際英語—英語の社会言語学的諸相』

P. トラッドギル, J. ハンナ著

寺澤芳男・梅田巖訳

B 6 判, xvii+215 頁, 2,700 円

研究社出版

比嘉正範

本書は Peter Trudgill と Jean Hannah 共著の *International English: A Guide to Varieties of Standard English, Second Edition* (London: Edward Arnold, 1985) の邦訳である。この本の内容は、原著の題名通り、*a guide to varieties of Standard English* である。

かつての大英帝国の植民地主義は当然のように言語帝国主義を伴い、その結果、英語が世界で最も通用する言語、つまり国際語になった。しかし、イギリス人は、正確にはイギリスの支配層は、自分達のいわゆる King's English が最も純正で上品な種類の英語であるということを世界の人に思い込まずことに成功し、King's English の native speaker でない人達に対して言語的に優位な地位を保っていた。

この歴史的な背景を考えると、本書の動機は画期的と言える。著者は文法的に正しい英語はすべて「標準英語」とみなし、イングランドだけでなくスコットランド、アイルランド、ウェールズ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アメリカ、カナダ、西インド諸島、西アフリカ、インドなどで使われている多種多様の標準英語 (varieties of Standard English) の特徴を発音、語彙、スペリング、表現の面で記述、分析、比較している。

日本人に最もなじみのある標準英語はイングランド英語とアメリカ英語である。我々は両者の差を been や can't などの発音、labor や program などのスペリング、will や do, have などの使い方、monkey wrench や rookie, zero などの単語で感じてきたが、戦後は、英語教育でも辞書編集でもイングランド英語に代わってアメリカ英語が「主要な標準英語」になり、我々も標準英語に関する問題の経験者になった。

英語の世界には多種多様の標準英語があることを改めて認識し、それぞれの特徴を把握し、King's English 以外の種類の英語に対する偏見を取り除くと同時に理解を深めようと思う人にとって、本書は大変有用な参考書である。

(放送大学教授)

『言語と国家

—言語計画ならびに言語政策の研究』

フロリアン・クルマス著、山下公子訳

B 6 判, 352 頁+36 頁, 3,000 円

岩波書店

橋内 武

社会言語学が隆盛する時代にあって、言語計画（言語変化・言語維持を意図的に行おうとする嘗み）は、まだ耳新しい領域だろう。同じ社会言語学でもミクロ社会言語学（敬語、女性語、会話分析など）の方が圧倒的に盛んであり、マクロ社会言語学についてはせいぜい田中克彦氏とハラルト・ハールマン氏の著作ぐらいしか思い当らないのが日本の学界の現状である。

その点昨年秋のaina・ハウゲン教授岡山講演は、そういう我々の盲点を突いて啓蒙してくれた点で大いに刺激となった。（『言語』1987年1月号参照。）確かに、この F. クルマス著『言語と国家』を読んでみると、ハウゲン博士がこの分野でいかに先駆的業績をものにしているかがわかる。そもそも 'language planning' という概念とその四段階説（規範選別・範例化・造成・成就）にしてが、博士の創唱する所に負うているのである。

本書の内容は、世界の言語区分、言語のイデオロギーと政争化、多言語社会における少数民族、途上国における植民地主義の言語的遺産、ビジン・クレオール、世界語としての英語、文字化と識字運動（インド・ソヴィエト連邦・中国）、近代化と言語計画（インドネシアと日本）と多岐にわたり、豊富な例証によって世界の言語問題に目を開かせてくれる。また歴史学、社会心理学、文化人類学などの関連領域からの知見と方法を縦横に取り入れているのも本書の特徴で、言語計画と言語政策の研究がいかに裾野の広い学問であるかを実感する。

原著は独文、訳文は明快。著者の現職は中央大学教授であるから、今後の活躍が一層期待される。

総じて、本書はその日暮らしの語学教師の視野を拡げるには、この上なく好ましく刺激的な本である。読み終えたあと、中国残留日本人孤児、帰国子女、在日韓国人・朝鮮人、東南アジア難民等の言語生活が気になるのは評者だけではあるまい。

(ノートルダム清心女子大学教授)

『動詞+名詞 英語活用表現辞典』

木塚晴夫著

B 6判, 1,328頁, 4,800円

ジャパンタイムズ

中田 実

小生は英語II Cを担当している。お恥しい限りではあるが、生徒の英文を添削したり生徒の質問に答えるのにいつも冷や汗をかいている。例えば、次のような生徒の英文を見て、何とかおかしいと思う。

I saw a dream last night.

本書は、こんな場合必要な information を提供してくれる。試みに dream の項を引くと、

◆昨夜とても怖い夢を見た。

(a) I dreamed a terrible dream last night.

(b) I had a terrible dream last night.

◇今日では(b)の方が一般的、see a dream とは言わない。

「夢を見る」は have a dream であると自信をもって教えることができる。ちなみに冷や汗のかきついでに「冷や汗をかく」は英語で何と言うか本書で調べてみよう。巻末の「さくいん」で日本語でも調べられるように便利に編集されている。

◆この前の幾何の試験を思い出すと冷や汗が出てくる。最後の瞬間にになって正解が分かったんだから。

I can't recall my last geometry exam without breaking (out) a cold sweat. I got the right answer at the very last moment.

◇break (out) into a cold sweat は「冷や汗をかく」の意の熟語。この表現では不定冠詞とともに用いる。

…と日本語、英語の文例、適切な説明がのっている。ついでに「汗」にかんして「汗だくになる」「汗を十分に流す」も簡単に調べられる。

一般の辞書で豊富な説明と例文の中から必要な項目を探すのに苦労したあげく、適切な説明や、例文が見つからず辞書を何冊も調べても結局分からぬことがよくある。名詞と動詞の結びつきに関して本書はこのような悩みを解決してくれる。

●コロケーションに頭を悩ませてきた人に

●英語らしい英語を身につけたい人に

●自分の英語に更に磨きをかけたい人に

●英文を書く機会の多い人に

とあるが、●英語教師にも必携の辞書がまた一冊増えたことは喜ばしい。(東京都立桜水商業高等学校教諭)

『旺文社 和英中辞典』

長谷川潔、桃沢力、堀内克明、山村三郎編

B 6ワイド判, 1,800頁, 2,900円

旺文社

名和雄次郎

3年前に、『ライトハウス和英辞典』(研究社)という画期的な辞典が、高校生を主な対象として出版されたが、今度は、大学生や社会人のための画期的な和英中辞典ができたことは、まことに喜ばしい。

「画期的」と言う理由は、何よりも学習者本位の和英辞典であることだ。単なる「和→英」式の引く辞典ではなく、読む辞典として、英語の運用に役立つ情報が満載されている、と言っても過言ではないからである。

その視点から、本辞典の特徴を 2, 3 挙げてみよう。

(1) 見出し語 7万で、これは中辞典として妥当であろう。その中に、カタカナ語や人名、地名などの固有名詞も含まれているのは、なかなか便利である。

また、副見出し語だけではなく、多義語の語義区分や、用例中の日本語の慣用句なども太字で表示されていて、非常に探しやすい。

(2) 用例は、センテンス単位のものが多く、しかも、日本語の字句にとらわれない斬新・的確な英文である。例えば、「お天気が怪しい」は、The sky is threatening. ⇔ It looks like rain. (p.52) という具合である。従来の辞典なら、The weather looks doubtful (uncertain).であろう。これは 16 名にも及ぶ英米の語学専門家の協力の賜物だろうと思う。

さらに、上の訳例に見るように、言い換え表現が多く示されていることは特筆すべきことで、運用力を高めるのに大いに役立つ。

(3) 語法や参考の欄の他に、「テーマ・分野別関連表現」48項目、「重要動詞シソーラス」72項目、「Things Japanese」119項目の囲み記事があり、まさに読む辞典にふさわしい。「接頭辞・接尾辞の訳し方」(p.875)などは、英作文の授業に早速使わしてもらおうと思う。

このように、本辞典は、英作文を学ぶ者にはもちろんのこと、教える者にとっても、非常に有益な辞典であると確信する。

(拓殖大学教授)

展望通信

I. JACET 中国四国支部

●講演会

* 10月15日(木) 午後4時～5時30分

“What is modality?” Prof. Frank Palmer (Univ. of Reading) 聴講料：500円(学生無料)

* 11月8日(日) 午前9時30分～10時50分

“How native should or could a non-native speaker be?” Prof. Gerhard Nickel (Universität Stuttgart) 聴講料：500円

* 11月18日(水) 午後2時30分～4時

“Theoretical foundations of The Cambridge English Course” Ms. Catherine Walter(英語教育専門家) 聴講料：無料

●第9回支部例会

12月26日(土) 午後2時～5時 会費：500円

「ゲール語教育・言語政策」芝田征二(鳴門教育大学)
「正用と誤用の問」河上道生(広島女子大学)

●会場はすべてノートルダム清心女子大学4-1セミナーハー室。問合せ：同大学文学部橋内研究室。電話：0862-52-1155 内線402。

2. 第3回幼児・児童英語教育推進シンポジウム

日時：10月11日(日)、午前9時30分より意見発表、午後1時30分より討議。テーマ「これからの英語教師に求められるもの」 講師：小笠原林樹(文部省調査官)、藤掛庄市(岐阜大学教授)、佐久間禄(言語科学研究所主宰)、志田正(長崎ウエスレヤン短期大学教授)、場所：諫早市高城会館大ホール(電話：0957-24-1500) 入場料：無料 問合せ：長崎ウエスレヤン短期大学幼児・児童言語教育研究所、志田正(電話：0957-26-1234)

3. 第7回「言語と人間」研究会例会

日時：10月24日(土) 午後2時～4時30分、研究発表：メタファーと英語教育 講師：柳沢康司 場所：横浜教育文化センター(関内下車) 問合せ：牧内勝(電話：0427-84-7112)

4. 第8回 Second Language Research Forum (SLRF)

期間：1988年3月3日～6日 会場：ハワイ大学

ゲスト・スピーカー：Eric Kellerman (Univ. of Nijmegen) Susan Gass (Michigan State Univ.) , Barry McLanglin (Univ. of California Santa Cruz), Dick Schumidt (Univ. of Hawaii) 会費：学生20ドル、教職員25ドル(当日は学生25ドル、教職員30ドル)

SLRFは第二言語習得・教授に関心を持つ研究者・教員・大学院生の学会。今回は、上記のゲスト・スピーカーに加えて、普遍文法と第二言語習得、教室研究、エスノグラフィーなどのパネルを予定。問合せ：Toshiyuki Doi または Janice Cook, Co-chair, SLRF, % Dept. of ESL, University of Hawaii at Manoa, 1890, East-West Road, Honolulu, Hawaii 96822 Tel. 808-948-8508.

5. 1987年度ELEC 英語教育研究大会

日時：11月7日(土)

講演(10:10～12:00) I 「H.E. パーマーとC.C. フリーズ——その英語教育の原理について」伊藤健三(文教大学) II "The Problems of English Teaching in Japan and America" Benjamin Duke (ICU)

ELEC賞授与式、ELEC同友会総会(12:00～12:40)

実演授業(13:30～15:00) 静哲人(大妻中学校)

授業研究発表(15:10～16:50) 「ティーム・ティーチング」 上村弘子(東京都立神代高等学校)、種谷美智子(富山市立東部中学校)、吉川玲子(千葉県・山田町立山田中学校) 親睦会(17:00～18:00)

場所：ELEC英語研修所(東京都千代田区神田神保町3-8) 問合せ：ELEC、電話：03-265-8911

英語展望(ELEC Bulletin)

第89号

定価 650円(送料200円)

昭和62年10月1日 発行

◎編集人 朱牟田夏雄

発行人 松本重治

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 エレック ELEC(財団法人英語教育協議会)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-8

電話：(03) 265-8911～8916

FAX：(03) 265-8917

振替：東京 3-11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC